

群馬県埋蔵文化財調査事業団発刊調査報告 第100集

上 澁 新 幹 線 関 係
埋蔵文化財発掘調査報告

第 14 集

熊野堂遺跡(2)

まとめ編

1991

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

財群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第100集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第14集

熊野堂遺跡(2)

まとめ編

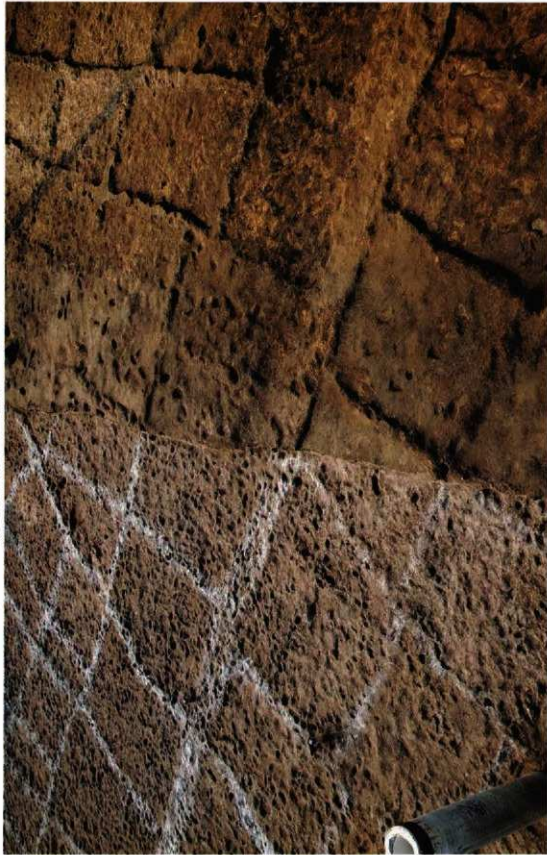
1991

群馬県教育委員会
財群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社



熊野堂遺跡水田跡 (C水田上・FA水田下)

熊野堂遺跡水田跡（C水田左・F A水田右）



例 言

- 1 本書は上越新幹線建設に伴い事前調査された群馬県高崎市大八木町、群馬県群馬町大字井出に所在する「熊野堂（くまのどう）遺跡」第II地区の発掘調査報告書である。体裁は、遺構編2冊、遺物編1冊、まとめ編1冊の4冊からなり、本書はその第4分冊「まとめ編」である。
- 2 第4分冊 まとめ編は、前3冊の編集にもれたものの補遺及び、資料集成、資料分析、各種の化学的分析を掲載した。
- 3 資料集成は、女屋和志雄、関根慎二が担当した。
- 4 資料分析及び化学的分析については、外部の次の方々協力及び原稿をいただいた。

奈良・平安時代の土器 三浦京子氏（シン航空写真株式会社）

馬歯の鑑定 宮崎重雄氏（大間々高校教諭）

飾り金具 加島 勝氏（東京国立博物館）

胎土分析 花岡紘一・小沢達樹氏（群馬県工業試験場）

三浦京子氏（シン航空写真株式会社）

プラントオパール 藤原宏志氏（宮崎大学）

これ以外の執筆については当事業団職員が当たり、文中に記した。

- 5 第3分冊と本文冊の整理編集事業は、群馬県教育委員会を通じ、東日本旅客鉄道株式会社の委託を受けて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成元年4月1日から平成3年3月31日にかけて実施した。担当職員は、以下の通りである。

事務担当 邊見長雄 松本浩一 田口紀雄 神保佑史 岩丸大作 住谷進 国定均 笠原秀樹
小林昌嗣 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏

整理担当 調査研究第2課長 桜場一寿（平成元年度） 能登健（平成2年度）

担 当 女屋和志雄 関根慎二

嘱 託 員 新井悦子 三浦京子

補 助 員 阿部幸恵 安達好子 石井きよ子 岩渕節子 宇佐美征子 大野容子 小野寺仁子
岸トキ子 五明志津子 佐子昭子 立川千栄子 田所順子 筑井弘子 戸神晴美
富沢スミ江 長岡美和子 原島弘子 平林照美 山田キミ子 吉田文子
六反田達子 岡田美知枝

凡 例

- 1 遺構・遺物の縮尺は図版中にスケールを記載したが、資料分析中のものについてはスケールを記載しないものもある。遺構、遺物編を参照されたい。

目 次

第1章 調査に至る経過と遺跡の概要

第2章 検出された遺構

(以上遺構編)

第3章 出土した遺物

(以上遺物編)

口絵1・2

例 言

目 次

補遺・資料編	1
第4章 補 遺	3
第1節 遺構編補遺・住居址遺構図資料	3
第5章 資 料 集 成	14
第1節 特殊遺物集成	14
弥生時代石鏃・未製品	16
埴 輪	18
土製模造品	20
石製模造品	23
鉄 器	28
墨書土器	37
瓦	39
碁 石	49
こも編み石	51
まとめ・分析編	59
第6章 ま と め	61
第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について	61
第2節 弥生時代磨製石鏃の製作工程について	95
第3節 古墳時代前期の土器について	101
第4節 奈良・平安時代の土器	107
第5節 熊野堂遺跡第49号住居出土の装飾金具	123
第6節 熊野堂遺跡II地区出土の瓦について	127

第7章	分 析	130
第1節	熊野堂遺跡出土須恵器胎土分析	130
第2節	熊野堂遺跡II地区出土の馬歯について	138
第3節	プラント・オパール分析による群馬：熊野堂遺跡水田址の考察	157

挿 図 目 次

口絵1	口絵2	第37回	熊野堂遺跡II地区住居址変遷図平安時代
第1回	18号・28号・45号住居址遺構図	第38回	熊野堂遺跡II地区時代別住居方位図
第2回	51号・54号・83号住居址遺構図	第39回	熊野堂遺跡時代別住居規模
第3回	92号・146号・162号住居址遺構図	第40回	弥生時代磨製石鏃の製作工程図
第4回	175号・177号・183号住居址遺構図	第41回	弥生時代磨製石鏃の製作道具
第5回	178号・179号住居址遺構図	第42回	古墳時代前期の土器
第6回	190号・191号・192号住居址遺構図	第43回	古墳時代前期の土器
第7回	193号・207号・208号・212号・216号住居址遺構図	第44回	7世紀代の土器
第8回	222号・225号・228号・244号住居址遺構図	第45回	第1段階の土器
第9回	249号・256号・258号住居址遺構図	第46回	第2段階の土器
第10回	260号・3区17号住居址遺構図	第47回	第3段階の土器
第11回	弥生時代石鏃・未製品集成図	第48回	第4・5段階の土器
第12回	埴輪集成図	第49回	第6・7段階の土器
第13回	土製模造品集成図	第50回	第8段階の土器
第14回	石製模造品集成図	第51回	第9段階の土器
第15回	石製模造品集成図	第52回	第10段階の土器
第16回	鉄器集成図	第53回	第11・12段階の土器
第17回	鉄器集成図	第54回	第13段階の土器
第18回	鉄器集成図	第55回	第14段階の土器
第19回	鉄器集成図	第56回	第15段階の土器
第20回	鉄器集成図	第57回	裝飾金具
第21回	墨書土器集成図	第58回	裝飾金具
第22回	瓦集成図	第59回	A類の瓦
第23回	瓦集成図	第60回	B類の瓦
第24回	瓦集成図	第61回	胎土分析土器実測図
第25回	瓦集成図	第62回	胎土分析土器実測図
第26回	瓦集成図	第63回	群馬県内の主な古家跡の Sr/Rb と Ca/K 比率
第27回	瓦集成図	第64回	熊野堂遺跡の Sr/Rb と Ca/K 比率
第28回	墓石集成図	第65回	69号住居址馬歯出土状態図
第29回	こも編み石集成図	第66回	馬歯集成図69住(1)
第30回	こも編み石集成図	第67回	馬歯集成図69住(2)
第31回	こも編み石集成図	第68回	馬歯集成図69住(3)
第32回	こも編み石集成図	第69回	馬歯集成図69住(4)
第33回	こも編み石集成図	第70回	馬歯集成図
第34回	こも編み石集成図	第71回	192号土坑平面図・牛歯図
第35回	熊野堂遺跡住居址変遷図弥生・古墳時代	第72回	プラントオパール分析図
第36回	熊野堂遺跡住居址変遷図古墳・奈良時代	第73回	プラントオパール写真

図 版 目 次

図版1-1	233号住居址全景(北より)	図版5-1	241・246号住居址全景(西より)
2	234号住居址全景(北より)	2	241号住居址遺物出土状態(南より)
3	234号住居址遺物出土状態(東より)	3	242号住居址全景(西より)
図版2-1	235号住居址全景(西より)	図版6-1	242号住居址遺物出土状態(西より)
2	235号住居址カマド(西より)	2	243・245・246号住居址全景(西より)
3	237号住居址全景(西より)	3	243・245・246号住居址全景(南より)
図版3-1	237号住居址カマド遺物出土状態(北より)	図版7-1	243号住居址遺物出土状態(西より)
2	238号住居址全景(西より)	2	243号住居址カマド(西より)
3	238号住居址遺物出土状態(東より)	3	245号住居址全景(西より)
図版4-1	239号住居址全景(西より)	図版8-1	246号住居址遺物出土状態(西より)
2	239号住居址カマド(西より)	2	246号住居址遺物出土住居址(西より)
3	240号住居址全景(西より)	3	244号住居址全景(西より)

補遺・資料編

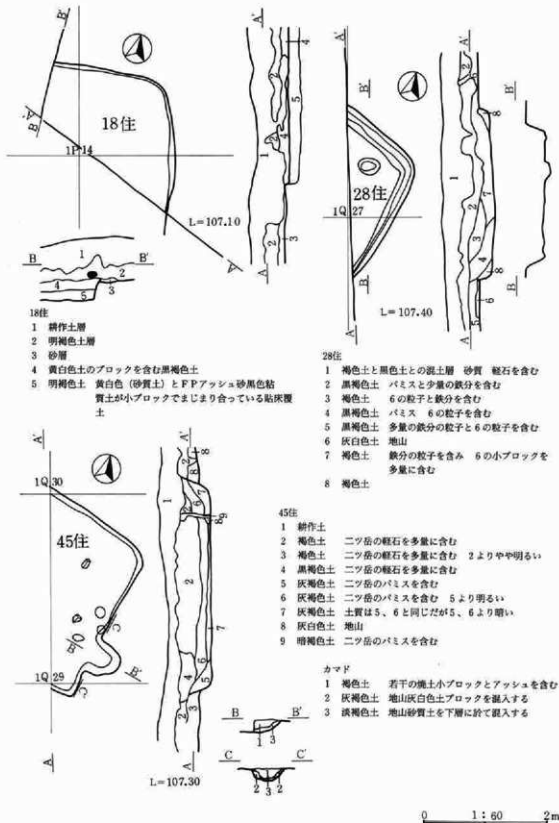
第4章 補 遺

第1節 遺構編補遺・住居址遺構図資料 (第1図～第10図)

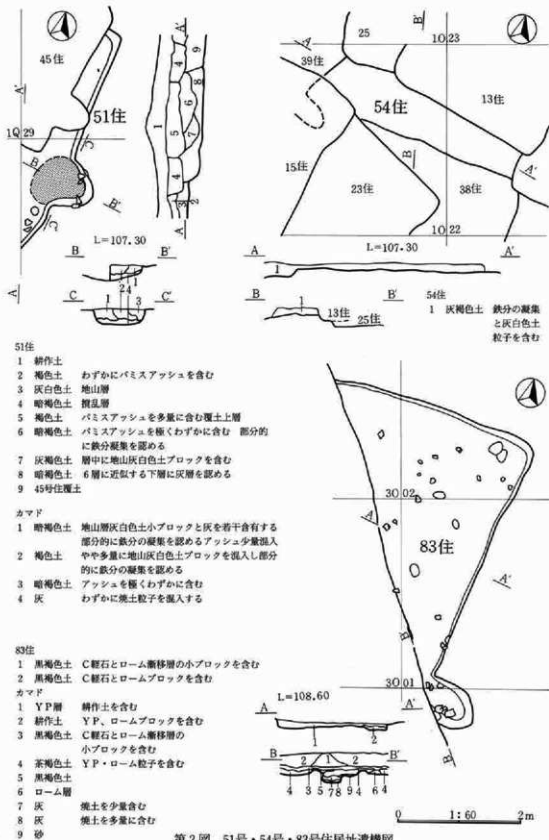
ここに掲載した住居は、調査区域外にかかるか、複雑に重複するという調査時の状況の中で、全体の一部だけが確認されたか、全貌のつかめなかったものである。その数は32軒である。従って、上記の内容を持った住居は、遺構編 第1分冊からは割愛した。ただし、177住、178住の様に当初予定からもれたものもあり、それを補う意味から、上記の確認状態の住居を含めて補遺資料として一括掲載をする。

なお、遺構説明は、既に遺構編 第1分冊に掲載してあるので、ここにその頁を付記する。

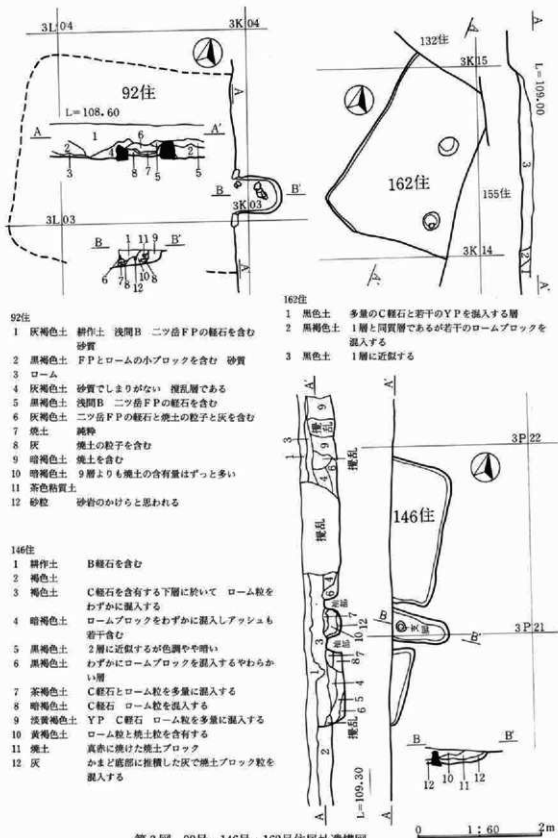
住居番号	遺構編	本文頁	住居番号	遺構編	本文頁
18住	第1分冊	P-52	207住	第1分冊	P-183
28住	〃	P-62	208住	〃	P-187
45住	〃	P-64	211住	〃	P-195
51住	〃	P-64	212住	〃	P-195
54住	〃	P-75	216住	〃	P-201
83住	〃	P-95	222住	〃	P-204
92住	〃	P-103	225住	〃	P-204
146住	〃	P-145	228住	〃	P-205
162住	〃	P-155	244住	〃	P-220
175住	〃	P-169	249住	〃	P-224
177住	〃	P-171	255住	〃	P-229
178住	〃	P-171	258住	〃	P-230
179住	〃	P-171	260住	〃	P-231
183住	〃	P-176	3区17住	〃	P-247
190住	〃	P-182			
191住	〃	P-183			
192住	〃	P-183			
193住	〃	P-183			



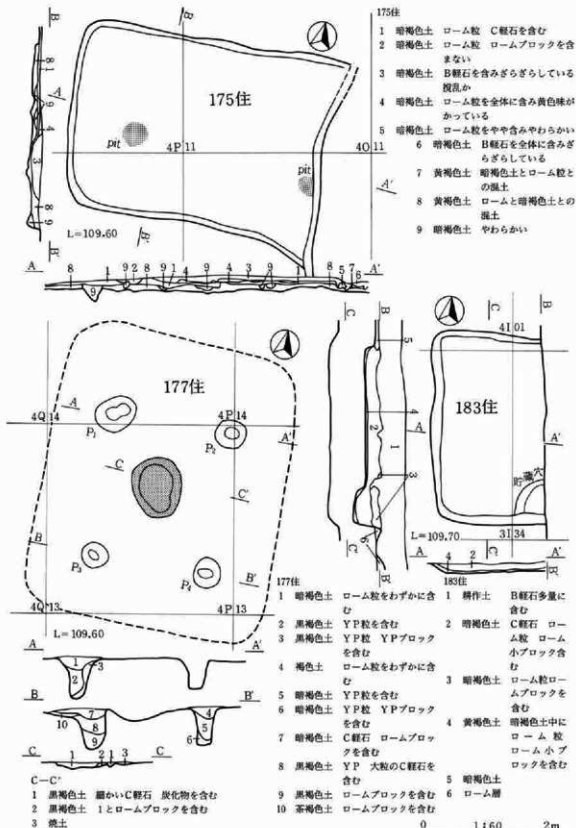
第1図 18号・28号・45号住居址遺構図



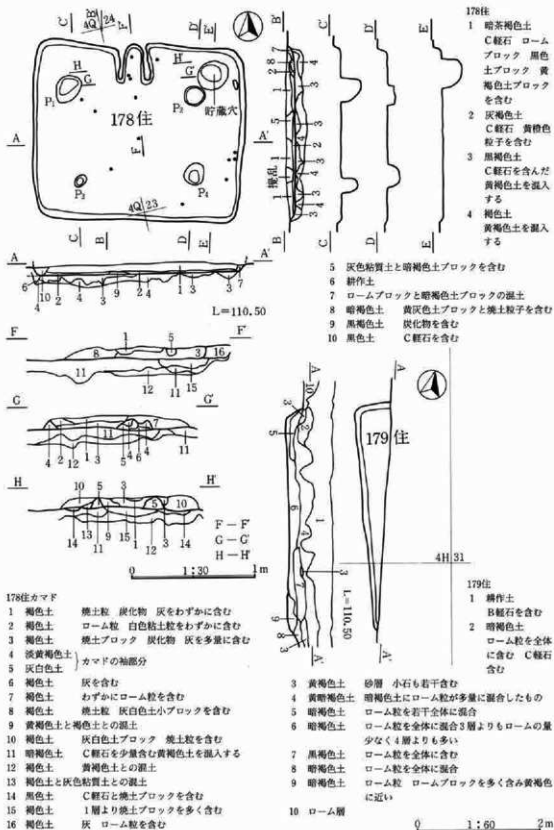
第2図 51号・54号・83号住居址遺構図



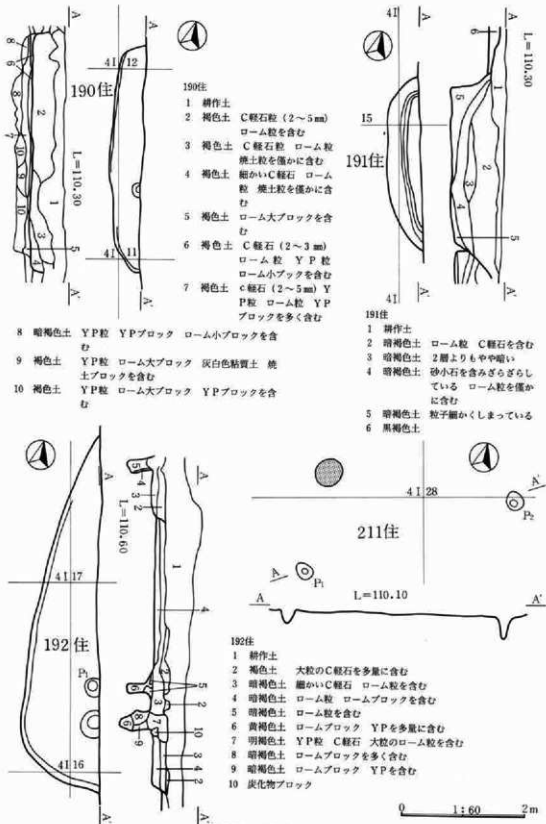
第3図 92号・146号・162号住居址遺構図



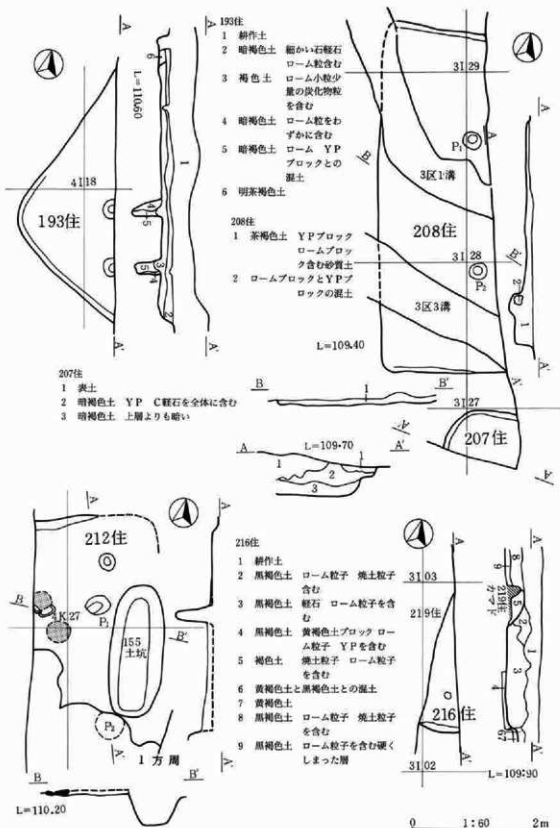
第4図 175号・177号・183号住居址遺構図



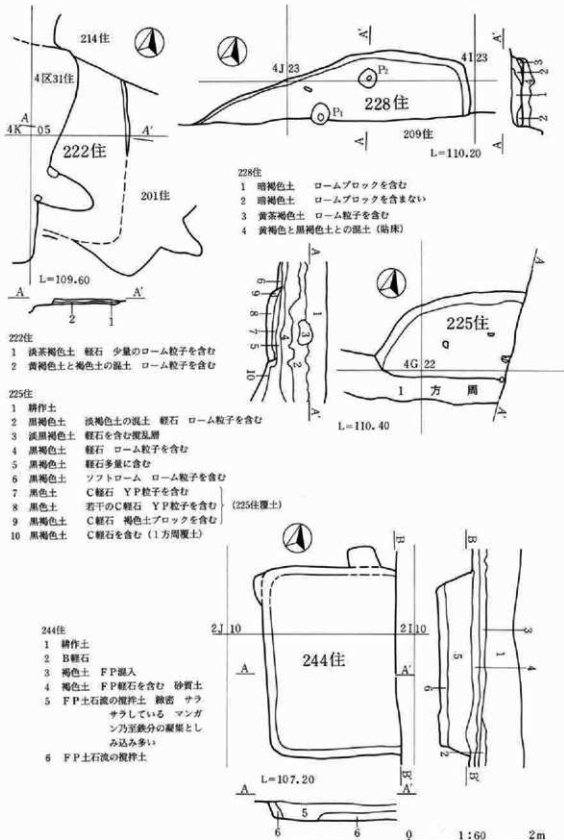
第5図 178号・179号住居址遺構図



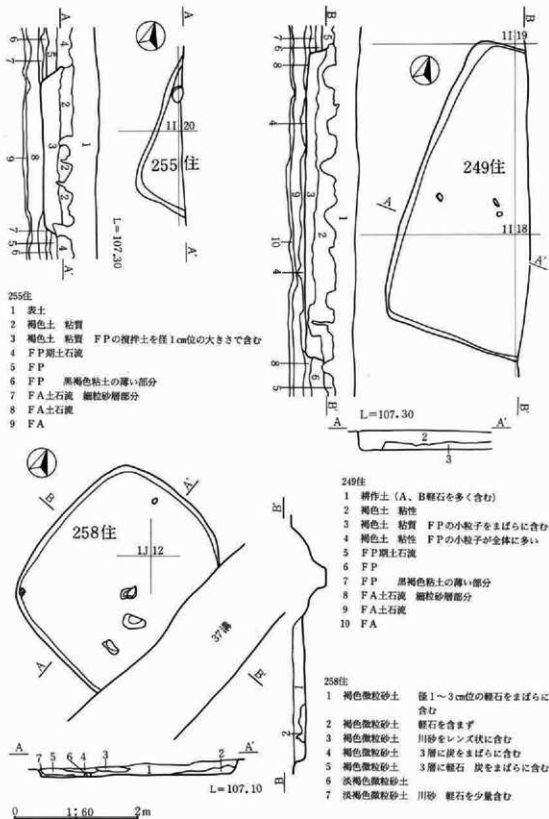
第6図 190号・191号・192号住居址遺構図



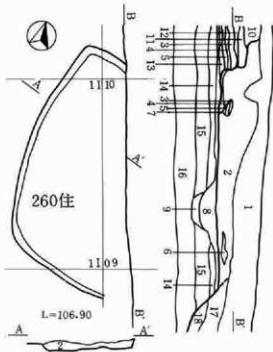
第7図 193号・207号・208号・212号・216号住居址遺構図



第8図 222号・225号・228号・244号住居址遺構図

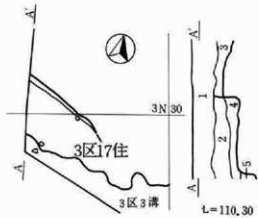


第9図 249号・255号・258号住居址遺構図



260住

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 耕作土 | 10 褐色土 軽石をまばらに含む |
| 2 灰黒褐色土 軽石 炭化物 だいだい色粒子を含む | 11 黒褐色土 粘土の薄い部分 |
| 3 FA土石流 | 12 FA土石流 細粒砂層部分 |
| 4 FA | 13 C軽石層 |
| 5 FA水田耕作土 | 14 C水田耕作土下部の黒色土 |
| 6 3、4、5層の混土 | 15 灰黄色粘性土 |
| 7 注記なし | 16 8層の亜層 |
| 8 C軽石期水田耕作土 | 17 褐色土 |
| 9 8層の鉄分凝集部 | 18 17層に近い土 下に鉄分層を含む |



3区17住

- | |
|--|
| 1 耕作土 B軽石を多量に含みざらざらしている |
| 2 暗褐色土 YPをとところろろろに含む やや軟らかい |
| 3 暗褐色土 YPを含むが少なくしまっており やや暗い |
| 4 明褐色土 YPを含むが少なく ロームブロック(覆指犬)をとところろろろに含む |
| 5 暗褐色土 やや赤味がかっており YPを少量含む やや軟らかい |

0 1:60 2m

第10図 260号・3区17号住居址遺構図

第5章 資料集成

第1節 特殊遺物集成

本遺跡は、縄文時代から中・近世までの様々な遺構や遺物が確認された。その中では、弥生時代中期から平安時代にかけての住居跡や水田、畠などが主体となり、本遺跡を特色付けるものである。しかし、遺跡は、調査の経緯を異にする3つの地区からなる上に、第II地区の様に調査が都合6次にも及び、遺構番号などを始めとして不統一で繁雑になっている。その番号は、報告書の作成段階でも混乱を避ける意味で、あえて時代別に分けることなく調査時のままとした。

出土遺物については、第3分冊の遺物編で遺構毎に観察説明を行った。本編では、3つの地区での同じ種類の遺物をまとめて概観できるようにし、各種の集計・統計的处理を行えるようなデータベース作成の基礎資料として、稀少な出土遺物を中心に集成図と若干のデータ表を掲載した。

集成掲載した資料は、弥生時代の磨製石鏃に関する資料や土製品、古墳時代の滑石製模造品（紡錘車を含む）や土製模造品、埴輪、主に奈良から平安時代の鉄器、墨書土器、瓦、碁石、こも編み石である。

磨製石鏃は、後期樽式のもので僅少な資料ではあるが、第II地区の5軒の住居で製作され、「素材→分割→研磨→穿孔→仕上げ」の製作工程が復元される。県内では、甘楽町白倉下原遺跡と合わせて2例目の資料である。白倉下原遺跡では、主に粘板岩を素材に使用しているとのことであるが、2つの住居群の一方にのみ工房がある点で共通する。供給は、集落内での自給的なものと推定されるが、工具とした礫器の付着物や砕く・擦るなどの工程の類似から、第I地区で出土したベンガラも合わせて生産していた可能性がある。工程は、第6章第1節にのべる。

土製品は、第13図に合計31点集成したが、弥生時代後期樽式から平安時代のものまでを含んでいる。弥生時代のものとしては、手づくねの甕や台付甕、鉢などのほかに勾玉や土玉、円盤がある。古墳時代のものとしては、手づくねの甕や壺、勾玉、丸玉がある。

滑石製模造品は、第14・15図に集成したうち、線刻紡錘車3点を除く61点がある。時期別には、5世紀から6世紀代の住居で出土したもので、剣形品、勾玉、管玉、白玉、有孔円板、紡錘車のほかに滑石の原石や剥片がある。遺構での出土頻度は、特定の住居で多量かつ組成を持った出土状態にはなく、大半が数点内外である。しかし、第II地区の168号住居や185号住居、4区14号住居など数軒にまとまりが見られ、手づくね土器と共伴して剣形品、勾玉、白玉、有孔円板の組成がある。供献具のあり方では、本来、第II地区の170号住居に見られる様に長甕・杯・高杯の土器を主要な組成とした中に滑石製模造品が共伴する、というのが一般的なあり方であろう。隣接する井出村東遺跡などと比較すると、5世紀代の住居から出土することや量がやや多いことが特徴といえる。その背後には、北2kmにある三ツ寺I遺跡の「古墳時代豪族居館」との関係があらうが、集落の規模や継続性からすると、居館に集約されるものとは別の集落内で完結する祭祀の体系化があらう。また、4区26号住居から出土した滑石の原石や未報告となったが、第I地区東の畑から表採された紡錘車の研磨前段階の未製品

の存在などからすると、隣接区域での工房も推定される。

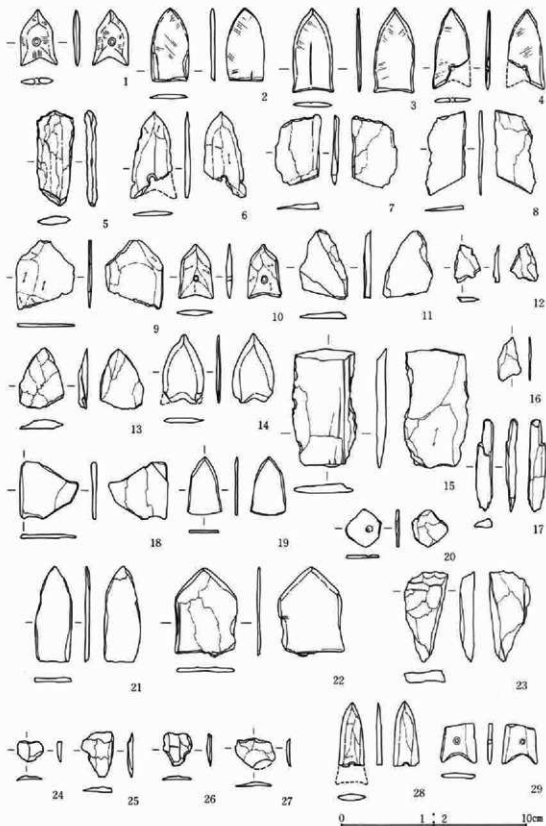
埴輪は、第12図に集成をした。遺物としては、6世紀代の年代観があたえられるが10世紀以降の住居で瓦とともにカマドの袖補強材として出土している。10点と少量ではあるが、周辺の古墳との関係やその破壊時期を間接的に示している。瓦とともに、10世紀以降という一線を画した遺構からの出土は、破壊と裏腹の関係にある台地上で面の開墾が進んだことを意味し、前代との画期を示す遺物といえる。周辺の古墳としては、北の群馬町井出から保渡田地区にかけて5～7世紀のものが知られ、中でも井出二子山・八幡塚・葉師塚の「保渡田三古墳」は代表的な存在である。6世紀以降の円墳からなる一群としては、井野川下流2km付近には高崎市「旧中川村」の古墳群、東1kmには群馬町「菅谷古墳群」がある。

鉄器は、第16～20図に集成をした。鎌、鋤先、刀子、鉄鎌、釘、紡錘車、留め金具など101点がある。全体に出土頻度は高く、中でも鎌や刀子、釘にその傾向が見られる。このほかに、埋没土中に混入したもので含めて20軒を超す住居から合計12kg近い鉄滓が出土している。第II地区の10世紀から11世紀の22号住居や55号住居では、床面での炭化物や鉄滓の集中が見られ小鍛冶とも推定される。また、同じく第II地区の10世紀前半の184号住居では、型枠らしい痕跡を持つ錆こぼれらしい銅滓が出土しており同様な可能性を持っている。

墨書土器は、第21図に集成した9世紀から11世紀までの17点がある。器種は杯と碗で、破片での出土が多いことに特徴がある。時期別には、底部から体部の外面に施書部位が変化している。字数は、殆どが1文字で記号としての意味が強いと考えられる。このほかの文字資料に、「大・上・万」を線刻した紡錘車3例と第II地区97号住居で「田」の字を刻んだ砥石があり、記号の中でも使用者としての集団や人名を特定する可能性がある。また、第II地区84号住居では風字硯が出土しており、集落内の施書と文字の普及を読み取ることができると推定される。

瓦は、第22～27図に集成をした109点がある。その殆どは、埴輪と同様にカマドの補強材として転用されたものである。平瓦が殆どで、未使用に近い状態のものまであり、建物との関係が注目される。個別には、第6章第6節で軒丸瓦が「熊野堂技法」と仮称できる特徴を持ち、上野国の終末段階の様相を考える上で意味を持つとされた。同様な出土傾向は、井野川をはさんだ南にある融通寺遺跡でもみられ、調査範囲内では確認できなかったが2つの遺跡を含めた周辺地域に寺院あるいは瓦を葺いた建物を推定する資料として位置付けられる。

こも編み石は、まとまって出土した75号住居と197号住居を例として第29図～34図に集成をした。形状は、分量で近似値を示しているが、スクリーントーンで表現した部分に「擦る・敲く」などの痕跡がみられ、こも編みだけと用途を特定するのはわずかしい。むしろ、住居内で多い、工作用の台らしい大形の石と組み合わせた万能具としての機能を持つと考えたい。



第11圖 弥生時代石鏃・末製品集成圖

第1表 熊野堂遺跡 弥生時代石製品一覽表

No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
1	I	16住	28	磨製石鏃	4.5 × 2.1 × 0.2	緑色準片岩	熊1 P-38
2	I	16住	29	磨製石鏃	3.8 × 2.0 × 0.2	緑色準片岩	熊1 P-38
3	I	16住	30	磨製石鏃	3.0 × 2.0 × 0.3	緑色準片岩	熊1 P-38
4	I	67住	2	磨製石鏃	4.3 × 2.0 × 0.2	結晶片岩 基部に直径2mm孔	熊1 P-62
5	II	96住	7	剥 片	7.5 × 2.6 × 0.7	輝石片岩 石鏃素材剥片か	熊2 P-70
6	II	115住	8	磨製石鏃	4.6 × 2.3 × 0.3	珪質準片岩 孔径0.3cm	熊2 P-81
7	II	115住	9	剥 片	3.8 × 2.5 × 0.4	緑色片岩	熊2 P-81
8	II	115住	10	剥 片	0.5 × 2.2 × 0.3	緑色片岩	熊2 P-81
9	II	115住	11	磨製石鏃	3.7 × 3.1 × 0.2	緑色片岩	熊2 P-81
10	II	171住	12	磨製石鏃	2.9 × 1.7 × 0.3	珪質頁岩 孔径0.2cm	熊2 P-127
11	II	197住	2	剥 片	3.7 × 2.4 × 0.5	珪質準片岩	熊2 P-147
12	II	218住	6	剥 片	2.0 × 1.4 × 0.3	珪質準片岩	熊2 P-153
13	II	218住	5	未 製 品	3.2 × 2.3 × 0.5	珪質準片岩	熊2 P-153
14	II	238住	6	磨製石鏃	3.6 × 2.2 × 0.2	珪質準片岩	熊2 P-173
15	II	238住	7	剥 片	6.2 × 3.2 × 0.5	珪質準片岩	熊2 P-173
16	II	240住	26	剥 片	2.3 × 1.3 × 0.2	珪質準片岩	熊2 P-178
17	II	240住	27	剥 片	4.9 × 0.9 × 0.6	珪質準片岩	熊2 P-178
18	II	240住	28	剥 片	3.0 × 3.1 × 0.3	珪質準片岩	熊2 P-178
19	II	4区12住	14	磨製石鏃	3.1 × 1.9 × 0.3	珪質準片岩	熊2 P-228
20	II	4区19住	17	平 玉	2.0 × 2.0 × 0.2	珪質準片岩	熊2 P-245
21	II	4区19住	18	磨製石鏃	5.2 × 2.0 × 0.3	珪質準片岩	熊2 P-245
22	II	4区19住	19	磨製石鏃	4.8 × 3.1 × 0.2	珪質準片岩	熊2 P-245
23	II	4区19住	20	剥 片	4.9 × 2.4 × 0.9	珪質準片岩	熊2 P-245
24	II	185住		剥 片	1.5 × 1.4 × 0.3		未報告
25	II	185住		剥 片	2.4 × 1.7 × 0.4		未報告
26	II	185住		剥 片	1.8 × 1.6 × 0.3		未報告
27	II	185住		剥 片	1.6 × 2.2 × 0.2		未報告

第5章 資料集成

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
28	II	4区28住	10	磨製石器	3.4 × 1.5 × 0.3	蛇紋岩 孔径0.2cm	熊2 P-256
29	II	4区28住	11	磨製石器	2.2 × 1.9 × 0.3	珪質礫片岩 孔径0.2cm	熊2 P-256

註1 地区名は以下の略称である。Iとしたものは第1地区、IIが第II地区である。

2 法量の単位はセンチメートル (cm) で、実測図から計測した。各計測値は、最大値か形状の特徴を示す箇所のものである。

3 報告書掲載頁は以下のことを示す。

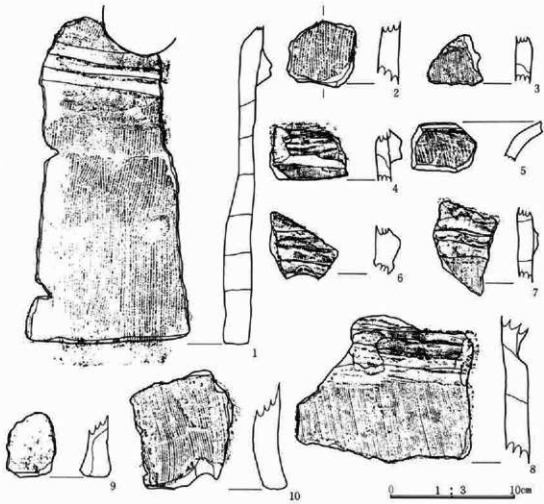
熊1 熊野堂遺跡(1)財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1984

熊2 熊野堂遺跡(2)第3分冊 遺物編 同上 1991

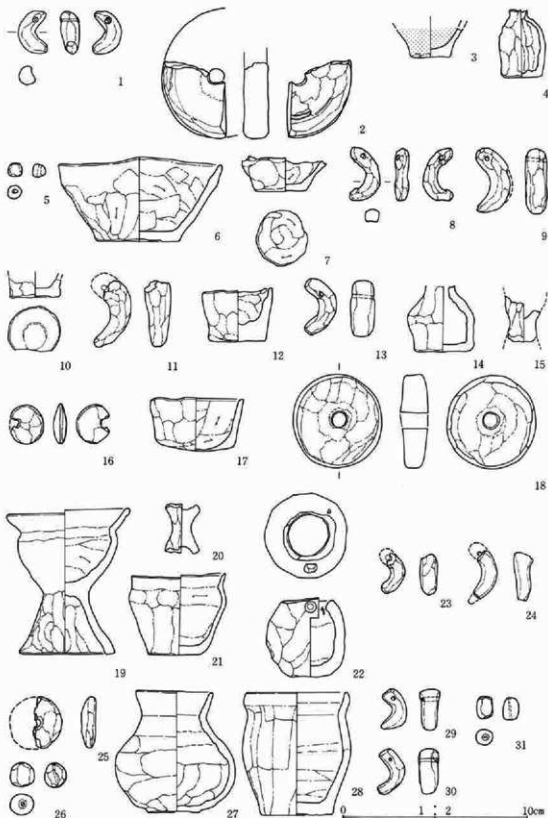
第2表 熊野堂遺跡 埴輪一覧表

法量の単位: cm

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
1	II	4住	3	円 筒	25.7 × 13.2 × 2.4	カマド袖補強材に使用	熊2 P-3
2	II	22住		円 筒	5.2 × 5.4 × 1.9		未報告
3	II	13住		円 筒	4.0 × 4.4 × 1.3		未報告
4	II	13住		円 筒	4.2 × 6.1 × 1.1		未報告
5	II	15住		円 筒	3.9 × 5.1 × 0.9		未報告
6	II	15住		円 筒	5.3 × 5.5 × 2.1		未報告
7	II	22住		円 筒	7.4 × 5.1 × 1.6		未報告
8	II	22住		円 筒	11.6 × 14.1 × 2.2		未報告
9	II	34住		円 筒	5.2 × 4.0 × 2.4		未報告
10	II	2区表探		円 筒	9.4 × 8.2 × 2.0		未報告



第12圖 織物集成圖



第13图 土製模造品集成图

第3表 熊野堂遺跡 土製模造品一覧表

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×高さ	備 考	報告掲載頁
1	I	36住	12	勾 玉	2.6 × 1.1 × 1.0	焼成良好、によい橙色	熊1 P-31
2	II	66住	6	紡 錘 車	(6.0) × (6.0) × 1.3	高台付柄の底部使用	熊2 P-41
3	II	164住	3	手づくね	(2.3) × 3.2	内外面赤色塗彩	熊2 P-117
4	II	172住	1	手づくね	1.2 × 3.6 × 2.3		熊2 P-127
5	II	178住	2	土 玉	0.7 × 0.7 × 0.6	孔径0.29	熊2 P-129
6	II	185住	13	手づくね	8.7 × 4.5 × 4.5		熊2 P-139
7	II	185住	14	手づくね	4.6 × 1.9 × 2.9	赤褐色	熊2 P-139
8	II	185住	15	勾 玉	2.8 × 0.8 × 0.7		熊2 P-139
9	II	197住	1	勾 玉	3.4 × 1.2 × 1.2		熊2 P-146
10	II	208住	1	手づくね	2.6 × 1.1 × 1.7		熊2 P-147
11	II	215住	5	勾 玉	(3.6) × 1.3 × 1.4		熊2 P-153
12	II	218住	4	手づくね	3.8 × 2.9 × 3.1		熊2 P-153
13	II	240住	25	勾 玉	3.0 × 0.9 × 1.3		熊2 P-178
14	II	3区5住	11	手づくね	(1.6) × (3.5) × 3.2		熊2 P-206
15	II	3区5住	12	手づくね	(2.4) × (2.5) -		熊2 P-206
16	II	4区2住	8	土 玉	2.1 × (1.9) × 0.7	橙色	熊2 P-216
17	II	4区5住	2	手づくね	5.0 × 2.9 × 4.3		熊2 P-218
18	II	4区18住	12	紡 錘 車	5.0 × 4.8 × 1.4	孔径0.81×0.75	熊2 P-242
19	II	4区19住	14	手づくね	6.6 × 7.7 × 5.1		熊2 P-245
20	II	4区19住	15	手づくね	(2.7)		熊2 P-245
21	II	4区19住	16	手づくね	5.1 × 4.3 × 3.1		熊2 P-245
22	II	4区25住	3	手づくね	3.0 × 4.2 × 2.3		熊2 P-250
23	II	4区27住	3	勾 玉	(2.2) × 0.8 × 0.9		熊2 P-254
24	II	4溝	4	勾 玉	(2.5) × 1.0 × 0.9		熊2 P-268
25	II	33溝	1	紡 錘 車	2.8 × 1.6 × 0.8	孔径0.3	熊2 P-271
26	II	3区3溝	10	土 玉	1.3 × 1.2 × 1.1	孔径0.2	熊2 P-273
27	II	4区1方周	31	手づくね	4.2 × 6.5 × 2.7		熊2 P-291

No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
28	Ⅱ	4区1方周	32	手づくね	5.4 × 6.6 × 3.9	丹彩が一部残る	熊2 P-291
29	Ⅱ	4区1方周	34	勾 玉	2.1 × 0.8 × 0.9		熊2 P-291
30	Ⅱ	4区1方周	35	勾 玉	2.4 × 0.8 × 1.0		熊2 P-291
31	Ⅱ	遺構外	104	土 玉	1.2 × 0.9 × 0.9	孔径0.18	熊2 P-306

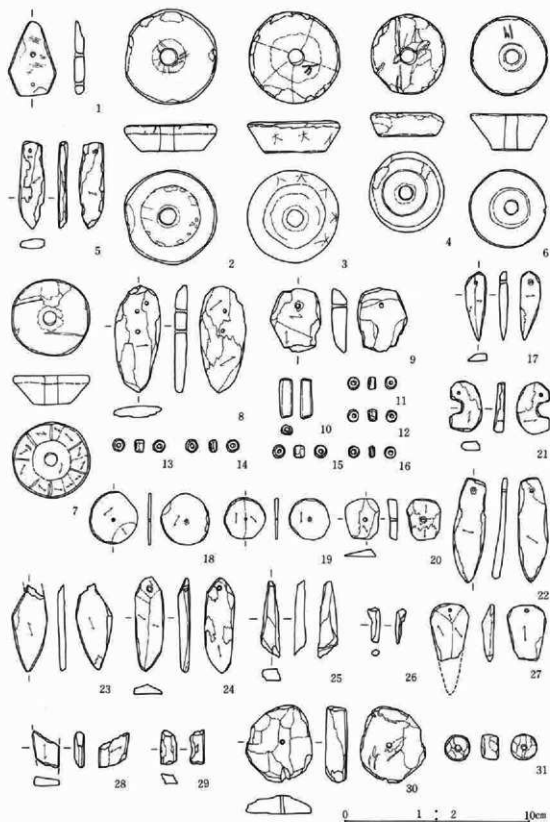
註1 地区名は以下の略称である。Ⅰとしたものは第Ⅰ地区、Ⅱが第Ⅱ地区である。

2 法量の長さ、幅、厚さ、径は、実測図から計測したもので最大値を示す。各々の径数については四捨五入、単位cmである。

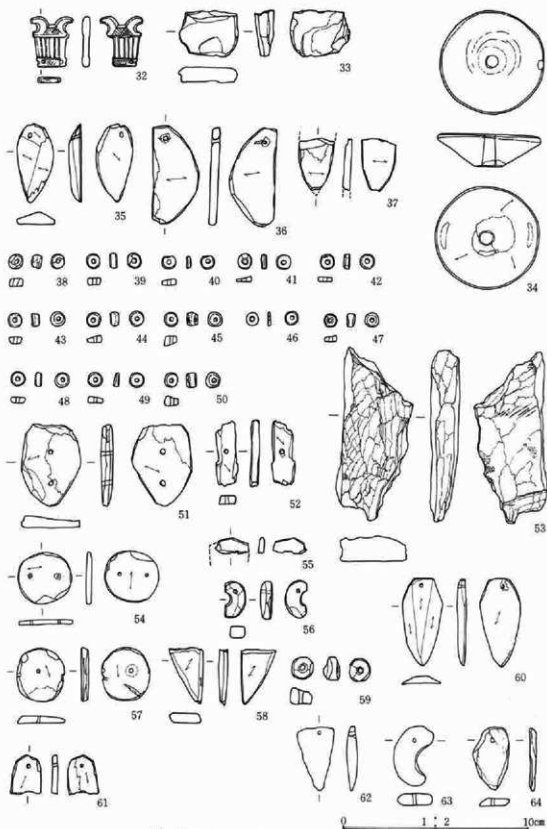
3 報告書掲載頁は以下のことを示す。

熊1 熊野堂遺跡(1) 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1984

熊2 熊野堂遺跡(2) 第3分冊 遺物編 同 上 1991



第14圖 石製模造品集成圖



第15図 石製模造品集成図

第4表 熊野堂遺跡 滑石製模造品一覧表

No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
1	I	1特殊井戸	42	剣 形	3.8 × 2.4 × 0.4	中央に直径2mmの穿孔あり	熊1 P-234
2	II	47住	4	紡 錘 車	5.0 × 5.0 × 1.3	孔径0.85×0.83 青灰色	熊2 P-29
3	II	81住	10	紡 錘 車	4.8 × 4.8 × 1.5	青灰色 万、大の線刻あり	熊2 P-59
4	II	81住	11	紡 錘 車	4.1 × 4.2 × 1.2	青灰色 上の線刻あり	熊2 P-59
5	II	89住	1	剣 形	4.6 × 1.4 × 0.5	孔径0.15、0.12、0.12	熊2 P-66
6	II	145住	16	紡 錘 車	4.1 × 4.1 × 1.8	孔径0.72×0.72 淡青灰色	熊2 P-101
7	II	168住	9	紡 錘 車	4.0 × 4.2 × 1.5	孔径0.72×0.65	熊2 P-122
8	II	168住	10	剣 形	5.7 × 2.5 × 0.6	孔径0.19、0.22、0.22	熊2 P-122
9	II	168住	11	勾 玉	3.4 × 2.7 × 0.9	孔径0.22	熊2 P-122
10	II	168住	12	管 玉	2.1 × 0.7 × 0.6	孔径0.3 紐づれ痕	熊2 P-122
11	II	168住	13	白 玉	0.7 × 0.6 × 0.4	孔径0.25×0.2 紐づれ痕	熊2 P-122
12	II	168住	14	白 玉	0.6 × 0.6 × 0.5	孔径0.22×0.2	熊2 P-122
13	II	168住	15	白 玉	0.7 × 0.7 × 0.5	孔径0.25	熊2 P-122
14	II	168住	16	白 玉	0.7 × 0.7 × 0.4	孔径0.2×0.27	熊2 P-122
15	II	168住	17	白 玉	0.7 × 0.7 × 0.6	孔径0.22×0.22	熊2 P-122
16	II	168住	18	白 玉	0.6 × 0.6 × 0.3	孔径0.28×0.25	熊2 P-122
17	II	181住	17	剣 形	3.7 × 1.2 × 0.4	孔径0.15×0.15	熊2 P-134
18	II	185住	16	有孔円板	2.8 × 2.6 × 0.2	孔径0.15×0.15	熊2 P-139
19	II	185住	17	有孔円板	2.3 × 2.3 × 0.2	孔径0.1×0.15	熊2 P-139
20	II	185住	18	有孔円板	2.2 × 1.9 × 0.5	孔径0.2×0.22	熊2 P-139
21	II	188住	4	勾 玉	2.7 × 1.8 × 0.6	孔径0.12×0.15 未貫通	熊2 P-141
22	II	200住	1	剣 形	5.6 × 1.7 × 0.9	孔径0.15×0.15	熊2 P-147
23	II	214住	3	剣 形	4.6 × 1.9 × 0.4		熊2 P-151
24	II	219住	7	剣 形	0.5 × 1.6 × 0.6	孔径0.2×0.18	熊2 P-155
25	II	219住	8	剣 片	4.0 × 1.0 × 0.6		熊2 P-155
26	II	219住	9	剣 片	1.9 × 0.7 × 0.3	滑石	熊2 P-155
27	II	231住	6	剣 形	3.0 × 2.1 × 0.7	孔径0.15×0.15	熊2 P-168

第5章 資料集成

No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
28	II	234住	2	剣 形	1.9 × 1.5 × 0.5		熊2 P-170
29	II	259住		不 明	1.8 × 0.9 × 0.6		未報告
30	II	259住	6	有孔円板	4.1 × 3.5 × 1.2	孔径0.21×0.28	熊2 P-199
31	II	259住	7	白 玉	1.4 × 1.5 × 1.0	孔径0.3×0.3	熊2 P-199
32	II	3区8住	2	琴 柱 状	2.7 × 2.3 × 0.4	灰緑色	熊2 P-208
33	II	3区8住	3	不 明	2.4 × 3.1 × 1.1	勾玉か	熊2 P-208
34	II	4区2住	7	紡 錘 車	5.4 × 5.5 × 1.5	孔径0.6×0.63 暗灰色	熊2 P-216
35	II	4区10住	5	剣 形	4.5 × 2.0 × 0.7	孔径0.18×0.18	熊2 P-224
36	II	4区11住	11	勾 玉	5.2 × 2.5 × 0.5	孔径0.22×0.25 緑灰色	熊2 P-226
37	II	4区11住	12	剣 形	2.8 × 2.0 × 0.5	灰緑色	熊2 P-226
38	II	4区14住	42	白 玉	0.8 × 0.8 × 0.6	孔径0.25×0.2	熊2 P-239
39	II	4区14住	43	白 玉	0.8 × 0.7 × 0.4	孔径0.21×0.28	熊2 P-239
40	II	4区14住	44	白 玉	0.7 × 0.8 × 0.3	孔径0.2×0.25	熊2 P-239
41	II	4区14住	45	白 玉	0.8 × 0.8 × 0.4	孔径0.28×0.29	熊2 P-239
42	II	4区14住	46	白 玉	0.8 × 0.8 × 0.3	孔径0.25×0.28	熊2 P-239
43	II	4区14住	47	白 玉	0.8 × 0.8 × 0.5	孔径0.25×0.22	熊2 P-239
44	II	4区14住	48	白 玉	0.8 × 0.8 × 0.5	孔径0.25×0.21	熊2 P-239
45	II	4区14住	49	白 玉	0.8 × 0.7 × 0.6	孔径0.21×0.2	熊2 P-239
46	II	4区14住	50	白 玉	0.8 × 0.7 × 0.2	孔径0.22×0.22	熊2 P-239
47	II	4区14住	51	白 玉	0.7 × 0.7 × 0.5	孔径0.22×0.22	熊2 P-239
48	II	4区14住	52	白 玉	0.8 × 0.8 × 0.4	孔径0.25×0.22	熊2 P-239
49	II	4区14住	53	白 玉	0.8 × 0.8 × 0.4	孔径0.22×0.22	熊2 P-239
50	II	4区14住	54	白 玉	0.8 × 0.7 × 0.6	灰白色	熊2 P-239
51	II	4区14住	55	剣 形	4.3 × 3.2 × 0.7	孔径0.25	熊2 P-239
52	II	4区14住	56	勾 玉	3.5 × 1.3 × 0.5	孔径0.22	熊2 P-239
53	II	4区26住	17	滑石原石	13.5 × 5.3 × 2.3	長さ、厚さを調整してある	熊2 P-254
54	II	4区26住	18	有孔円板	2.7 × 2.9 × 0.3	孔径0.13、0.15	熊2 P-254
55	II	4区28住	12	剣 形	0.9 × 1.9 × 0.3	灰緑色	熊2 P-256

No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
56	II	4区28住	13	勾 玉	2.0 × 1.1 × 0.6	孔径0.2×0.2	熊2 P-256
57	II	70土坑	2	有孔円板	2.9 × 2.6 × 0.4	孔径0.2×0.22	熊2 P-277
58	II	149土坑	1	剣 形	3.0 × 1.9 × 0.5		熊2 P-280
59	II	205土坑	5	白 玉	1.2 × 1.2 × 1.9	孔径0.28×0.3	熊2 P-280
60	II	4区1方周	33	勾 玉	4.7 × 2.2 × 0.5	孔径0.18×0.17	熊2 P-191
61	II	遺構外	105	勾 玉	2.1 × 1.7 × 0.4	孔径0.2×0.18	熊2 P-306
62	III	19住	5	剣 形	3.4 × 2.0 × 1.1	片面穿孔1	熊3 P-43
63	III	19住	6	勾 玉	3.2 × 1.9 × 0.7	上位に片面穿孔1	熊3 P-43
64	III	遺構外	105	剣 形	3.3 × 2.0 × 0.4	基部に径2mmの小孔あり	熊3 P-104

註1 地区名は以下の略称である。Iとしたものは第I地区、IIが第II地区、IIIが第III地区である。

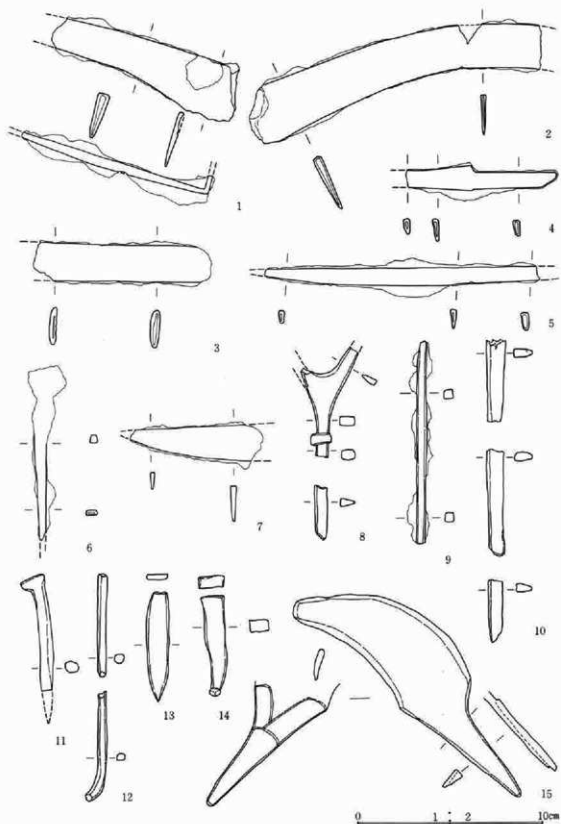
2 法量の長さ、幅、厚さは、実測図から計測したもので最大値を示す。各々の端数については四捨五入、単位cmである。

3 報告書掲載頁は以下のことを示す。

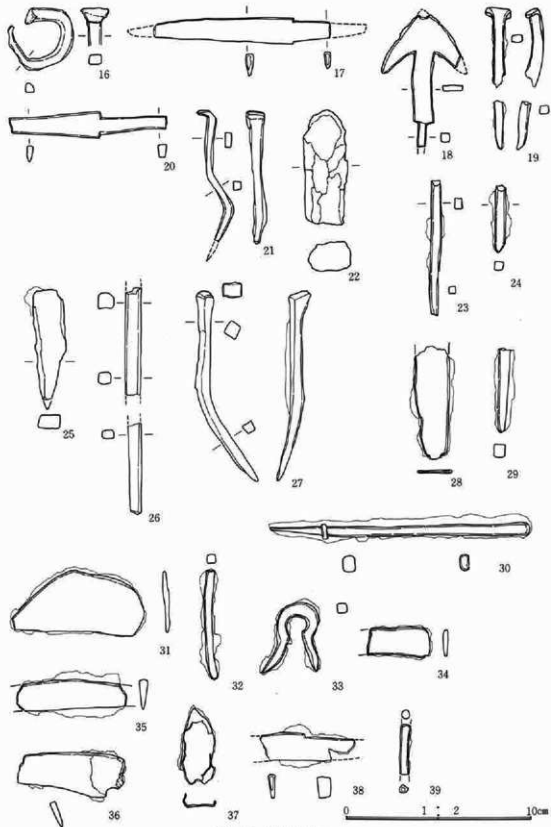
熊1 熊野堂遺跡(1)財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1984

熊2 熊野堂遺跡(2)第3分冊 遺物編 同 上 1991

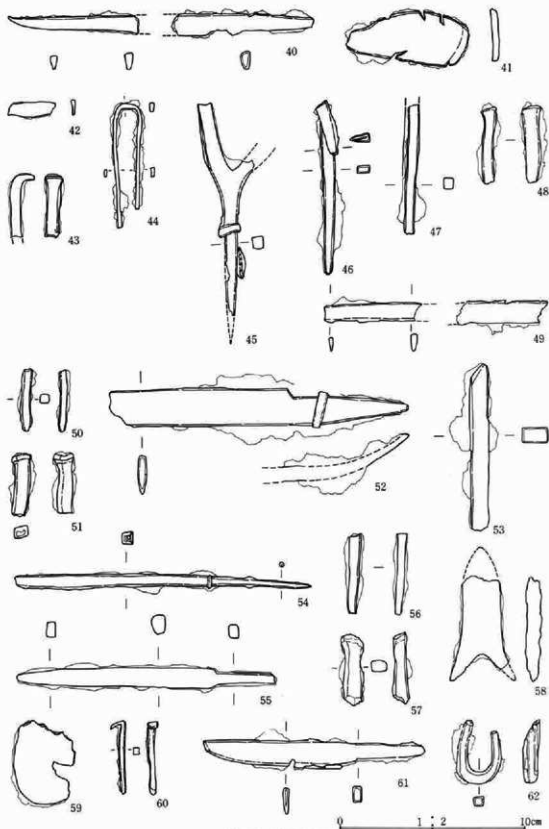
熊3 熊野堂遺跡 第III地区・雨森遺跡 同 上 1984



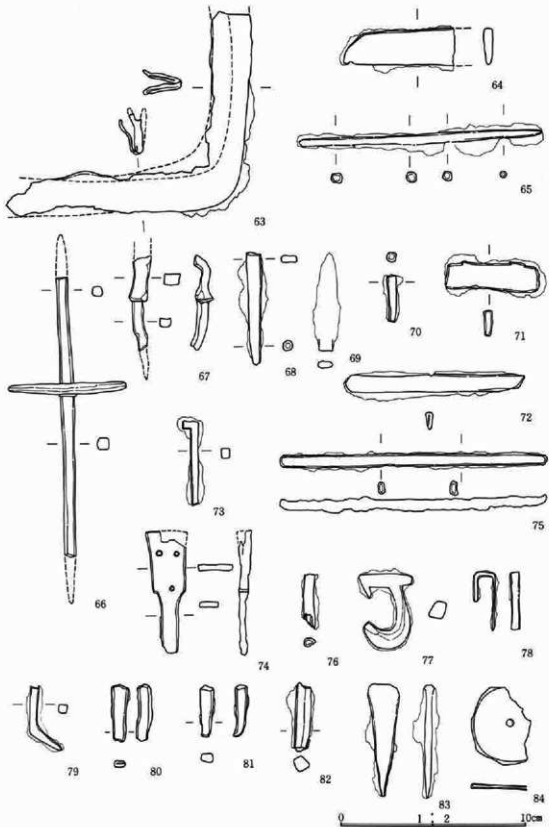
第16圖 鉄器集成圖



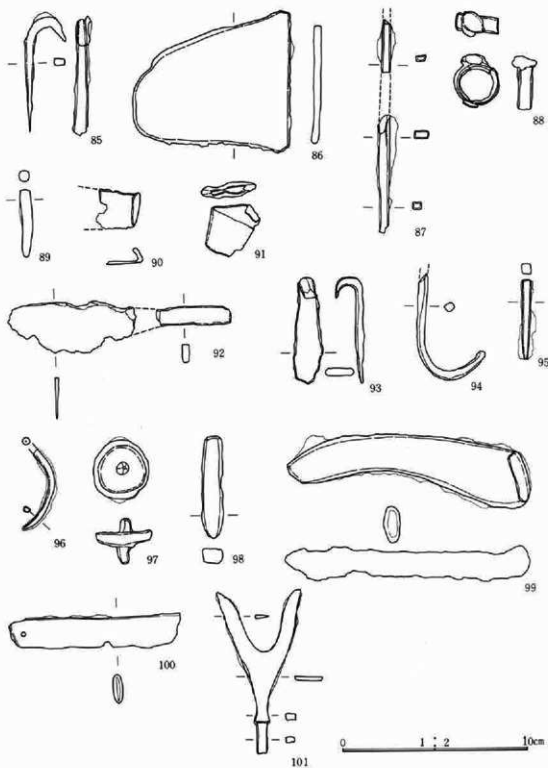
第17圖 鐵器集成圖



第18図 鉄器集成図



第19圖 鉄器集成図



第20圖 鉄器集成図

第5表 熊野堂遺跡 鉄製品一覧表

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
1	I	27住	4	鎌	10.8 × 3.3 × 1.6		熊1 P-110
2	I	31住	16	鎌	16.3 × 3.3 × 1.9		熊1 P-116
3	I	32住	16	不 明	9.5 × 2.2 × 1.0		熊1 P-120
4	I	64住	8	刀 子	8.2 × 2.0 × 0.8		熊1 P-154
5	I	64住	9	刀 子	14.9 × 1.9 × 1.5		熊1 P-154
6	I	68住	8	釘	9.3 × 2.0 × 1.8		熊1 P-164
7	I	道路状遺構	13	刀 子	7.0 × 2.5 × 0.5		熊1 P-207
8	II	2住	2	鉄 鎌	(8.7) × 3.1 × 0.6		熊2 P-3
9	II	8・9住	9	釘	10.7 × 5.5 × 5.0		熊2 P-9
10	II	8・9住	10	刀 子	(13.2) × 0.9 × 0.5		熊2 P-9
11	II	19住	1	釘	6.1 × 0.7 × 0.7	頭1.7×1.5	熊2 P-16
12	II	21住	3	丸 棒	(11.1) × 0.5 × 0.5	紡織車の軸部の可能性あり	熊2 P-18
13	II	25住	3	鉄 鎌	5.8 × 1.3 × 0.2		熊2 P-21
14	II	25住	4	釘	5.3 × 1.1 × 0.6		熊2 P-21
15	II	26住	5	鎌	15.8 × 4.5 × 0.4	刃長7.9、茎長7.9	熊2 P-21
16	II	27住	2	釘	7.5 × 0.7 × 0.5		熊2 P-21
17	II	29住	2	刀 子	9.5 × 1.3 × 0.4	刃長7.5、茎長2.0	熊2 P-23
18	II	49住	5	鉄 鎌	7.0 × 4.3 × 0.5	刃幅4.3、茎長4.9	熊2 P-31
19	II	49住	6	釘	6.8 × 0.6 × 0.4		熊2 P-31
20	II	51住	4	刀 子	8.4 × 1.5 × 0.4	刃長4.7、茎長3.6	熊2 P-34
21	II	55住	3	釘	7.3 × 0.5 × 0.8		熊2 P-34
22	II	57住	11	鉄 塊	6.1 × 2.3 × 1.5		熊2 P-36
23	II	64住	6	釘	7.2 × 0.5 × 0.6		熊2 P-40
24	II	64住	7	釘	3.5 × 0.6 × 0.5		熊2 P-40
25	II	70住	9	釘	6.5 × 1.2 × 0.7		熊2 P-47
26	II	70住	10	釘	(10.6) × 0.9 × 0.7		熊2 P-47
27	II	73住	5	釘	11.0 × 0.7 × 1.0		熊2 P-49

第5章 資料集成

No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
28	II	75住	4	不 明	6.0 × 1.8 × 0.2		熊2 P-52
29	II	75住	5	釘	4.5 × 0.6 × 0.7		熊2 P-52
30	II	75住	6	紡 錘 車	14.0 × 0.7 × 0.6		熊2 P-52
31	II	83住	3	不 明	7.3 × 3.2 × 0.3		熊2 P-59
32	II	84住	12	釘	5.8 × 0.6 × 0.5		熊2 P-63
33	II	100住	6	留 金 具	8.0 × 0.5 × 0.5		熊2 P-72
34	II	103住	3	刀 子	3.5 × 1.4 × 0.3		熊2 P-72
35	II	106住	5	刀 子	6.0 × 1.6 × 0.5		熊2 P-74
36	II	127住	4	鏝	5.7 × 1.5 × 0.3		熊2 P-86
37	II	145住	18	不 明	4.2 × 1.8 × 0.1		熊2 P-101
38	II	149住	6	刀 子	5.1 × 1.3 × 0.1		熊2 P-101
39	II	153住	13	釘	2.7 × 0.5 × 0.1		熊2 P-106
40	II	159住	10	刀 子	14.7 × 1.0 × 0.1		熊2 P-111
41	II	159住	11	不 明	6.6 × 2.8 × 0.3		熊2 P-111
42	II	164住	23	不 明	2.6 × 0.8 × 0.2		熊2 P-119
43	II	167住	7	釘	3.3 × 0.7 × 0.7		熊2 P-120
44	II	182住	5	金 具	12.6 × 0.2 × 0.5		熊2 P-134
45	II	188住	5	鉄 鏝	11.3 × 2.8 × 0.6		熊2 P-141
46	II	200住	2	釘	9.2 × 0.7 × 0.1		熊2 P-147
47	II	200住	3	釘	6.8 × 0.6 × 0.6		熊2 P-147
48	II	223住	5	釘	4.3 × 1.1 × 0.5		熊2 P-157
49	II	202住	3	刀 子	(10.1) × 1.0 × 0.3		熊2 P-147
50	II	230住	8	釘	3.3 × 0.5 × 0.5		熊2 P-166
51	II	231住	7	釘	3.3 × 0.8 × 0.2		熊2 P-168
52	II	231住	8	刀 子	16.0 × 2.0 × 0.1		熊2 P-168
53	II	231住	9	釘	8.9 × 1.0 × 0.1		熊2 P-168
54	II	241住	10	鉄 鏝	15.8 × 0.7 × 0.8		熊2 P-182
55	II	241住	11	刀 子	13.8 × 1.0 × 0.5		熊2 P-182

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
56	II	241住	12	釘	4.3 × 0.7 × 0.4		熊2 P-182
57	II	250住	13	釘	3.8 × 0.8 × 0.6		熊2 P-192
58	II	247住	1	鉄 鏃	5.5 × 3.5 × 0.7		熊2 P-186
59	II	256住	9	鉄 滓	4.5 × 0.3 × 0.4		熊2 P-197
60	II	3区3住	3	釘	4.4 × 0.6 × 0.4		熊2 P-204
61	II	3区8住	4	刀 子	11.8 × 1.4 × 0.5	刃長8.2、茎長3.7	熊2 P-208
62	II	3区8住	5	釘	6.5 × 0.5 × 0.1		熊2 P-208
63	II	3区15住	2	鋤 先	19.8 × 2.4 × 1.0		熊2 P-214
64	II	4区16住	4	鏃	6.0 × 2.0 × 0.5		熊2 P-239
65	II	4区21住	2	丸 棒	13.1 × 0.5 × 0.1		熊2 P-247
66	II	4区10住	6	紡織車の軸	14.8 × 0.8 × 0.6		熊2 P-224
67	II	4区2井	13	釘	5.0 × 0.8 × 0.6		熊2 P-265
68	II	4溝	1	釘	6.0 × 5.2 × 0.4		熊2 P-268
69	II	4溝	2	不 明	5.2 × 1.5 × 0.4		熊2 P-268
70	II	4溝	3	釘	2.5 × 0.6 × 0.5		熊2 P-268
71	II	37溝	2	不 明	5.4 × 1.3 × 0.1		熊2 P-271
72	II	3区3溝	9	刀 子	9.7 × 1.0 × 0.2		熊2 P-273
73	II	3区28溝	1	釘	4.4 × 0.4 × 0.5		熊2 P-274
74	II	175土坑	1	留 金 具	6.4 × 2.2 × 0.3		熊2 P-280
75	II	189土坑	1	釘	14.3 × 0.7 × 0.4		熊2 P-280
76	II	4区9土坑	1	釘	2.9 × 0.6 × 0.1		熊2 P-283
77	II	KT-1住	4	釘	5.7 × 1.0 × 0.9		熊2 P-258
78	II	KT-1住	5	釘	5.2 × 0.5 × 0.5		熊2 P-258
79	II	KT-1住	6	釘	4.1 × 0.4 × 0.4		熊2 P-258
80	II	KT-2住	2	釘	3.0 × 0.8 × 0.4		熊2 P-260
81	II	KT-2住	3	釘	2.8 × 0.7 × 0.5		熊2 P-260
82	II	KT-2住	4	釘	3.6 × 0.8 × 0.9		熊2 P-260
83	II	KT-4住	7	不 明	6.0 × 1.7 × 0.4		熊2 P-262

第5章 資料集成

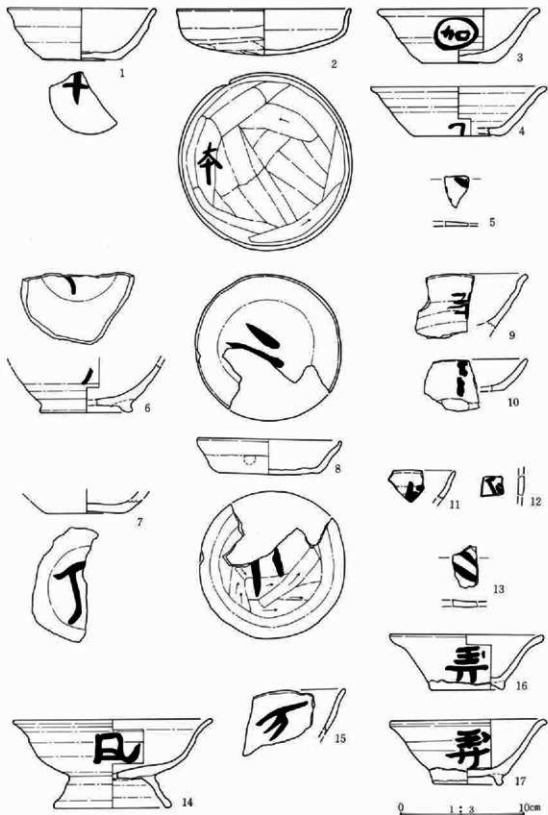
No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
84	II	KT-2土坑	1	有孔円盤	4.1 × 3.0 × 0.1		熊2 P-283
85	II	遺構外	117	釘	6.3 × 0.4 × 0.4		熊2 P-309
86	II	遺構外	118	不 明	8.4 × 6.2 × 0.4		熊2 P-309
87	II	遺構外	119	紡 錘 車	(9.0) × 0.6 × 0.1		熊2 P-309
88	II	遺構外	120	丸 金 具	2.8 × 2.5 × 0.6		熊2 P-309
89	II	遺構外	121	釘	3.5 × 0.6 × 0.6		熊2 P-309
90	II	遺構外	122	鏝	2.2 × 2.1 × 0.2		熊2 P-309
91	II	遺構外	123	不 明	2.6 × 2.7 × 0.8		熊2 P-309
92	II	遺構外	124	刀 子 か	10.9 × 2.7 × 1.0		熊2 P-309
93	II	遺構外	125	釘	5.7 × 1.5 × 0.5		熊2 P-309
94	II	遺構外	126	釘	7.9 × 0.5 × 0.5		熊2 P-309
95	II	遺構外	127	釘	4.2 × 0.5 × 0.5		熊2 P-309
96	II	遺構外	128	釘	5.0 × 0.3 × 0.1		熊2 P-309
97	II	遺構外	129	不 明	2.4 × 3.0 × 0.6		熊2 P-309
98	II	遺構外	130	釘	5.4 × 0.8 × 0.8		熊2 P-390
99	II	遺構外	131	鏝	13.2 × 2.0 × 0.2		熊2 P-390
100	II	遺構外	132	不 明	9.2 × 1.5 × 0.2		熊2 P-390
101	III	遺構外	50	鉄 鏝	8.6 × 4.6 × 0.3		熊3 P-108

註1 地区名は以下の略称である。Iは第I地区、IIが第II地区、IIIが第III地区を示す。

2 法量の長さ、幅、厚さは、実測図から計測したもので、最大値か形状の特徴を示す箇所のもの、単位cmである。

3 報告書掲載頁は以下のことを示す。

熊1	熊野堂遺跡 (1) 財団法人	群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか	1984
熊2	熊野堂遺跡 (2) 第3分冊	遺物編	同上
熊3	熊野堂遺跡	第III地区・雨倉遺跡	同上



第21圖 墨書土器集成圖

第6表 熊野堂遺跡 墨書土器一覽表

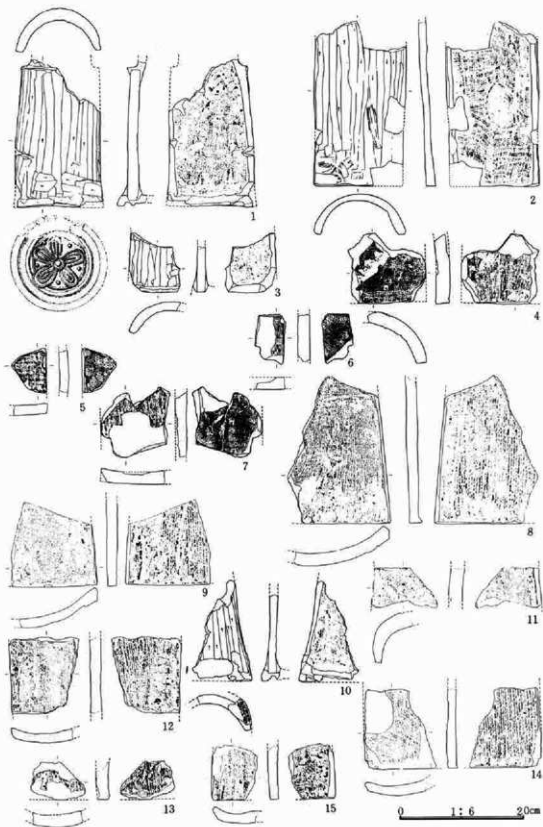
No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	口径×器高×底径	備 考	報告書掲載頁
1	II	5住	1	杯	(11.7)× 4.1 ×(6.5)	底部外面施書 字体不明	熊2 P-7
2	II	11住	1	杯	13.8 × 3.6 ×	底部外面施書 「本」	熊2 P-14
3	II	17住	1	杯	(12.6)× 4.3 ×(5.8)	体部外面施書 「0」	熊2 P-16
4	II	17住	3	杯	(14.0)× 3.9 ×(7.0)	底部外面施書 字体不明	熊2 P-16
5	II	81住	9	杯		底部内面施書 字体不明	熊2 P-59
6	II	84住	4	碗	(3.6)×(7.9)	体部、底部施書 字体不明	熊2 P-62
7	II	91住	3	杯	(1.0)× 6.2	底部外面施書 字体不明	熊2 P-68
8	II	159住	9	杯	11.5 × 2.8 × 8.0	底部内外面施書 字体不明	熊2 P-111
9	II	168住	7	碗		体部外面施書 字体不明	熊2 P-122
10	II	168住	8	皿	2.5 ×	体部外面施書 字体不明	熊2 P-122
11	II	182住	4	碗		体部外面施書 字体不明	熊2 P-134
12	II	183住	2	碗		底部内面施書 字体不明	熊2 P-134
13	II	3区15住	1	杯		底部内面施書 字体不明	熊2 P-214
14	II	4区17住	3	碗	(16.0)× 7.0 ×(9.4)	体部外面施書 字体不明	熊2 P-239
15	II	29土坑	1	碗		体部外面施書 「万」	熊2 P-277
16	II	123土坑	1	碗	12.2 × 4.4 × 5.9	体部外面施書 「弄」	熊2 P-280
17	II	123土坑	2	碗	12.0 × 5.1 × 5.1	体部外面施書 「弄」	熊2 P-280

註1 地区名の略称は、IIが第II地区であることを示す。

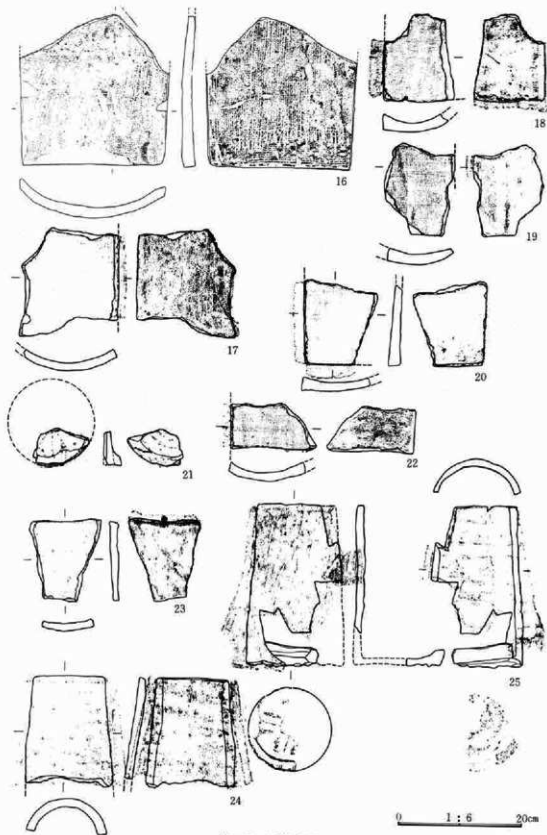
2 法量の口径、器高、底径は、実測図から計測したもので単位はcmである。

3 報告書掲載頁は以下のことを示す。

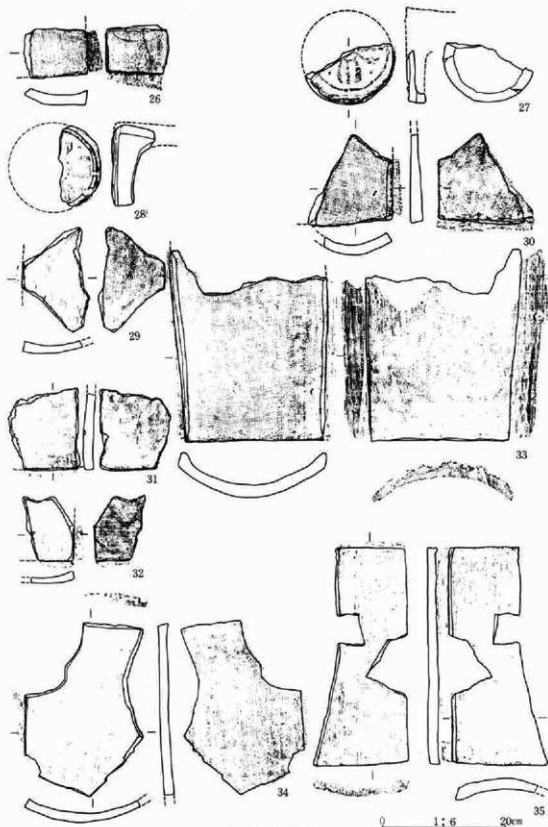
熊2 熊野堂遺跡(2)第3分冊 遺物編 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1991



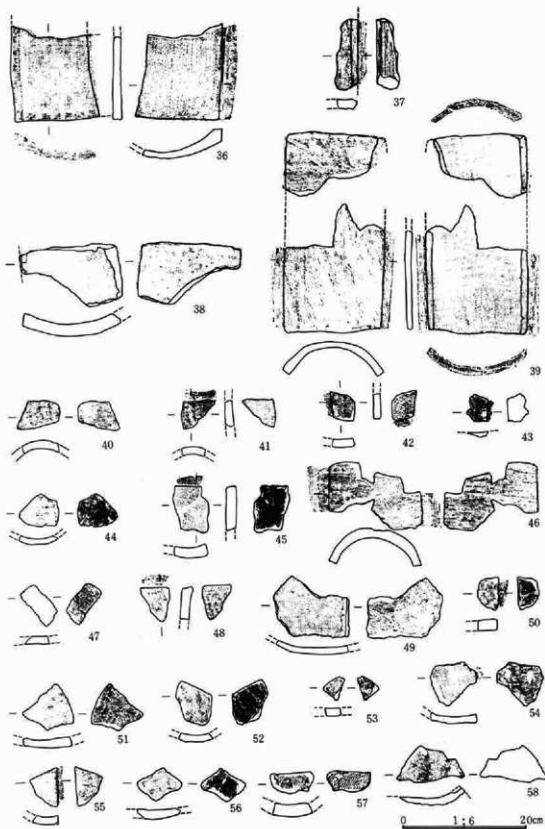
第22圖 瓦集成圖



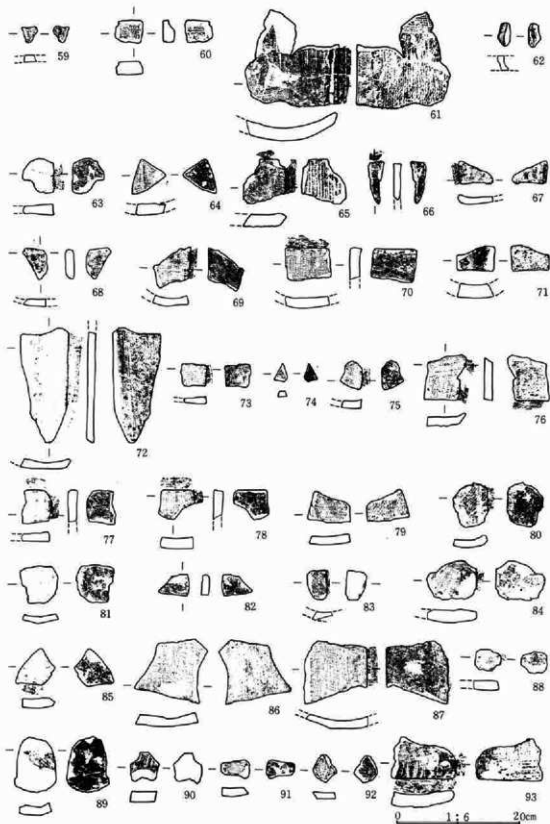
第23圖 瓦集成圖



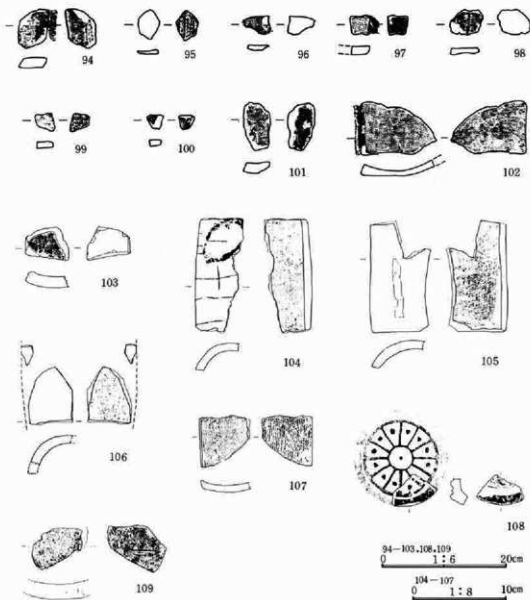
第24圖 瓦集成圖



第25圖 瓦集成圖



第26圖 瓦集成圖



第27圖 瓦集成圖

第7表 熊野堂遺跡 瓦一覽表

法量の単位：cm

No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
1	I	68住	1	軒丸瓦	22.0 × 13.6 × 1.5	瓦当径14.5	熊1 P-163
2	I	68住	2	丸瓦	25.7 × 14.4 × 1.2		熊1 P-164
3	I	68住	3	軒丸瓦	9.6 × 8.3 × 1.4		熊1 P-164
4	I	18溝	5	平瓦	11.3 × 11.0 × 1.8		熊1 P-206
5	I	18溝	6	平瓦	7.2 × 5.5 × 1.5		熊1 P-206
6	I	18溝	7	平瓦	7.9 × 4.9 × 1.8		熊1 P-206
7	I	18溝	8	丸瓦	11.3 × 12.6 × 2.2		熊1 P-207
8	I	21溝	1	平瓦	23.5 × 16.5 × 1.6	側端部幅2.0	熊1 P-216
9	I	21溝	2	平瓦	13.5 × 13.6 × 1.6	側端部幅2.0	熊1 P-216
10	I	11土坑	24	軒丸瓦	16.0 × 9.6 × 1.0		熊1 P-285
11	I	11土坑	25	丸瓦	6.3 × 10.5 × 2.2		熊1 P-285
12	I	11土坑	26	平瓦	12.0 × 11.1 × 1.8		熊1 P-286
13	I	11土坑	27	平瓦	6.0 × 8.7 × 1.9		熊1 P-286
14	I	11土坑	28	平瓦	12.6 × 11.4 × 1.5		熊1 P-286
15	I	11土坑	29	平瓦	8.7 × 7.5 × 1.5		熊1 P-286
16	I	11土坑	30	平瓦	24.0 × 23.2 × 1.5		熊1 P-287
17	II	23住	3	平瓦	17.0 × 16.0 × 1.2		熊2 P-18
18	II	25住	5	平瓦	13.7 × 11.5 × 1.7		熊2 P-29
19	II	40住	1	平瓦	14.5 × 11.3 × 1.8		熊2 P-25
20	II	44住	1	平瓦	13.4 × 11.8 × 1.6		熊2 P-29
21	II	49住	8	軒丸瓦	4.9 × 8.9 × 1.5		熊2 P-31
22	II	49住	9	平瓦	7.2 × 14.0 × 1.3		熊2 P-31
23	II	49住	10	平瓦	13.2 × 11.4 × 1.3		熊2 P-31
24	II	49住	11	丸瓦	17.5 × 14.0 × 1.3		熊2 P-32
25	II	49住	12	軒丸瓦	25.6 × 15.5 × 1.3	幅は推定	熊2 P-32
26	II	52住	1	平瓦	7.7 × 10.1 × 1.4		熊2 P-34
27	II	73住	6	軒丸瓦	9.4 × 14.4 × 1.0		熊2 P-50

第5章 資料集成

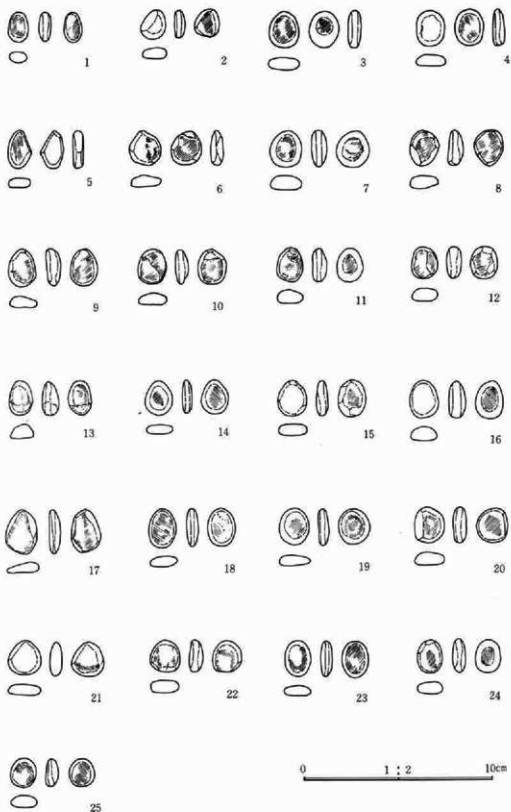
No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×高さ	備 考	報告書掲載頁
28	II	73住	7	軒丸瓦	12.6 × 6.7 × 3.5		熊2 P-50
29	II	73住	8	平瓦	16.4 × 10.7 × 1.2		熊2 P-50
30	II	73住	9	平瓦	14.2 × 13.7 × 1.7		熊2 P-50
31	II	73住	10	平瓦	12.7 × 11.3 × 1.5		熊2 P-50
32	II	73住	11	平瓦	10.3 × 8.1 × 1.0		熊2 P-50
33	II	248住	6	平瓦	30.1 × 25.1 × 2.1		熊2 P-188
34	II	248住	7	平瓦	27.3 × 19.1 × 1.5		熊2 P-189
35	II	248住	8	平瓦	34.4 × 15.1 × 1.7		熊2 P-189
36	II	248住	9	平瓦	14.9 × 14.1 × 1.3		熊2 P-190
37	II	248住	10	平瓦	11.2 × 3.7 × 1.5		熊2 P-190
38	II	254住	3	平瓦	9.7 × 16.4 × 2.0		熊2 P-195
39	II	K.T-4住	3	丸瓦	(30.7) × 15.9 × 1.1		熊2 P-262
40	II	13住		丸瓦	4.5 × 6.8 × 1.3		未報告
41	II	13住		丸瓦	4.5 × 5.3 × 1.2		未報告
42	II	15住		平瓦	4.6 × 3.9 × 1.3		未報告
43	II	22住		平瓦	4.3 × 3.5 × 0.8		未報告
44	II	31~33住		平瓦	5.2 × 6.4 × 1.0		未報告
45	II	35住		平瓦	7.4 × 5.6 × 1.7		未報告
46	II	49住		平瓦	10.6 × 15.0 × 1.8		未報告
47	II	49住		平瓦	6.5 × 5.8 × 1.3		未報告
48	II	49住		平瓦	5.5 × 4.6 × 1.7		未報告
49	II	49住		平瓦	9.7 × 12.2 × 1.1		未報告
50	II	49住		平瓦	5.2 × 3.4 × 1.8		未報告
51	II	49住		平瓦	7.3 × 8.2 × 1.5		未報告
52	II	49住		平瓦	7.1 × 5.6 × 1.1		未報告
53	II	49住		平瓦	3.6 × 3.3 × 1.3		未報告
54	II	113住		平瓦	6.8 × 7.4 × 1.3		未報告
55	II	113住		平瓦	6.2 × 4.3 × 1.2		未報告

第1節 特殊遺物集成

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	口径×器高×底径	備 考	報告書掲載頁
56	II	115住		平 瓦	5.3 × 7.0 × 1.5		未報告
57	II	115住		平 瓦	3.3 × 7.0 × 2.0		未報告
58	II	129住		平 瓦	5.8 × 10.7 × 1.4		未報告
59	II	130住		平 瓦	2.7 × 2.5 × 1.2		未報告
60	II	145住		平 瓦	3.6 × 4.5 × 2.2		未報告
61	II	224住		平 瓦	15.2 × 15.0 × 2.2		未報告
62	II	224住		平 瓦	3.7 × 2.0 × 2.4		未報告
63	II	3区5住		平 瓦	5.0 × 5.5 × 1.7		未報告
64	II	3区10住		平 瓦	5.4 × 5.3 × 2.0		未報告
65	II	3区15住		平 瓦	7.0 × 6.9 × 2.3		未報告
66	II	3区17住		丸 瓦	6.7 × 2.6 × 1.3		未報告
67	II	4区12住		平 瓦	3.6 × 5.5 × 1.2		未報告
68	II	1号井戸		平 瓦	5.0 × 3.8 × 1.2		未報告
69	II	2号井戸		平 瓦	6.6 × 5.8 × 1.3		未報告
70	II	2号井戸		平 瓦	5.2 × 7.4 × 1.7		未報告
71	II	4号整穴状		平 瓦	4.1 × 6.0 × 2.2		未報告
72	II	4溝		平 瓦	18.1 × 7.7 × 1.3		未報告
73	II	18溝		平 瓦	3.6 × 4.2 × 1.2		未報告
74	II	3区2溝		平 瓦	2.8 × 2.1 × 0.9		未報告
75	II	3K-22		平 瓦	4.6 × 3.6 × 1.3		未報告
76	II	3K-28		平 瓦	7.0 × 6.6 × 1.4		未報告
77	II	3 P 11グリッド		平 瓦	5.4 × 4.6 × 1.6		未報告
78	II	3 P 11グリッド		平 瓦	4.7 × 5.7 × 1.9		未報告
79	II	3M-31		平 瓦	5.0 × 6.9 × 1.2		未報告
80	II	3M-31		平 瓦	7.1 × 5.6 × 1.3		未報告
81	II	3M-31		平 瓦	6.0 × 6.1 × 1.1		未報告
82	II	3M-34		平 瓦	3.3 × 4.8 × 1.3		未報告

第5章 資料集成

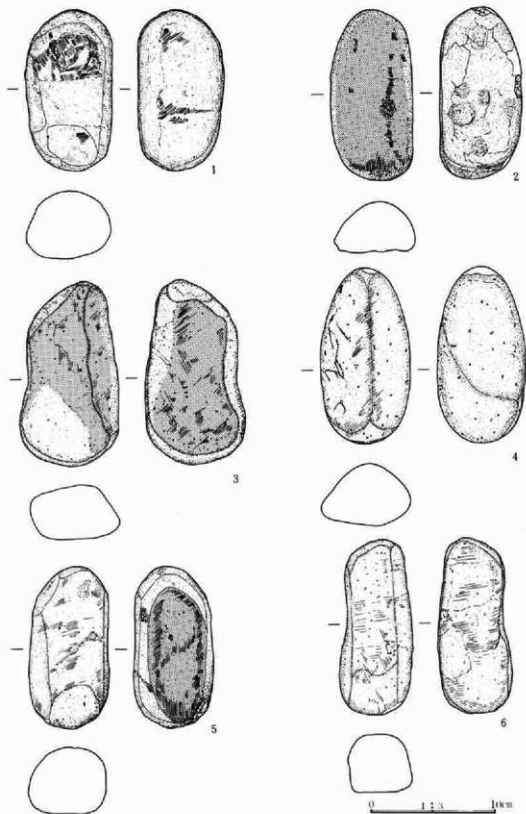
No	地区名	遺構番号	遺物番号	器 種	長さ×幅・直径×厚さ	備 考	報告書掲載頁
83	II	4 L-06		平 瓦	4.8 × 3.3 × 1.3		未報告
84	II	4 L-08		平 瓦	6.1 × 7.8 × 2.0		未報告
85	II	4 L-30		平 瓦	5.9 × 6.2 × 1.5		未報告
86	II	1区表土		平 瓦	10.1 × 11.6 × 1.6		未報告
87	II	1区表土		平 瓦	10.0 × 10.1 × 1.5		未報告
88	II	1区表土		平 瓦	3.3 × 4.1 × 1.6		未報告
89	II	1区表土		平 瓦	8.8 × 6.7 × 1.5		未報告
90	II	3区表土		平 瓦	4.7 × 4.6 × 1.7		未報告
91	II	3区表土		平 瓦	2.9 × 4.6 × 1.3		未報告
92	II	3区表土		平 瓦	4.4 × 3.7 × 1.0		未報告
93	II	3区表土		平 瓦	6.6 × 10.4 × 2.0		未報告
94	II	3区表土		平 瓦	6.2 × 5.0 × 1.7		未報告
95	II	3区表土		平 瓦	4.7 × 3.5 × 0.8		未報告
96	II	3区表土		平 瓦	2.9 × 4.3 × 0.9		未報告
97	II	表土		平 瓦	3.2 × 3.2 × 1.4		未報告
98	II	3区表土		平 瓦	4.0 × 5.2 × 1.1		未報告
99	II	3区表土		平 瓦	2.9 × 3.1 × 1.1		未報告
100	II	3区表土		平 瓦	2.3 × 2.7 × 1.0		未報告
101	II	4区東拡張		平 瓦	7.5 × 4.3 × 1.9		未報告
102	II	表土		平 瓦	8.2 × 12.2 × 1.6		未報告
103	III	1住	4	平 瓦	5.1 × 7.2 × 1.7		熊3 P-61
104	III	12住	2	丸 瓦	24.4 × 10.4 × 1.7		熊3 P-64
105	III	12住	3	丸 瓦	23.6 × 13.2 × 2.0		熊3 P-64
106	III	12住	4	平 瓦	(16.8) × (10.4) × 1.9		熊3 P-64
107	III	15溝	1	平 瓦	11.0 × 11.0 × 1.4		熊3 P-74
108	III	遺構外	42	軒 丸 瓦	5.1 × 7.2 × 2.7	推定瓦当径14.0	熊3 P-105
109	III	遺構外	43	平 瓦	7.5 × 9.6 × 2.4		熊3 P-105



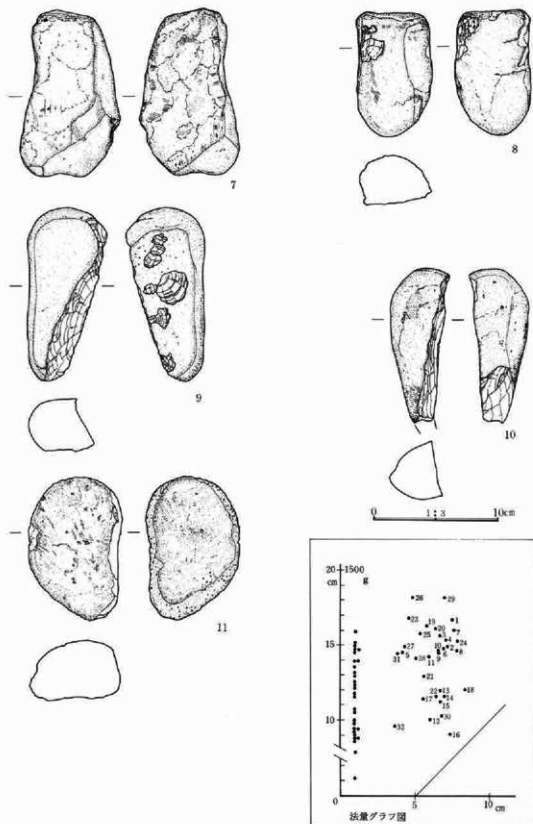
第28圖 礫石集成圖

第8表 熊野堂遺跡 基石一覧表

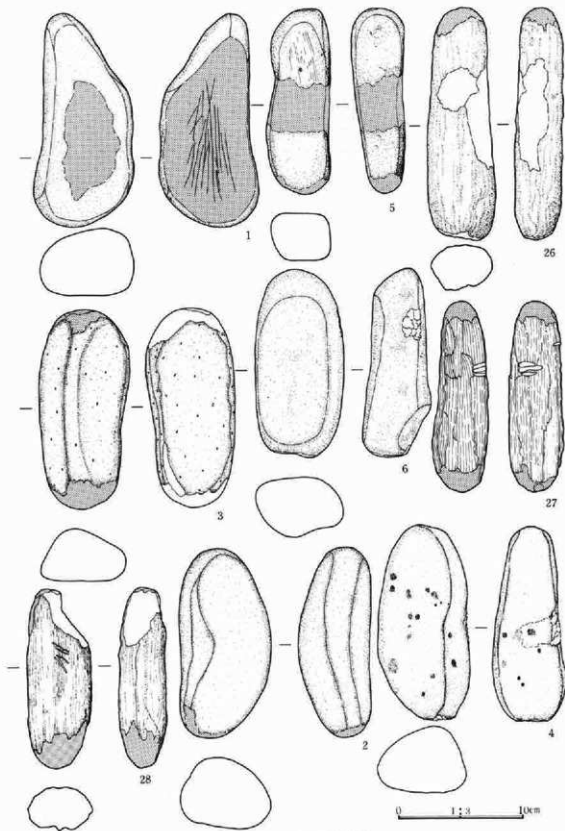
器種	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材 質	特 徴	出土位置・写真図	
基石	1	1.6	1.1	0.6	1.6	石英	白石。やや楕円。	P106	
基石	2	1.6	1.3	0.6	2.2	細粒安山岩	黒石。三角に近い楕円。		
基石	3	1.9	1.6	0.7	3.66	石英	白石。		P 3
基石	4	1.9	1.5	0.6	3.28	石英	白石。		
基石	5	2.0	1.25	0.5	2.37	石英	白石。長楕円形。		
基石	6	1.8	1.7	0.7	3.51	石英	白石。		
基石	7	1.9	1.7	0.8	4.73	石英	白石。		P 7 P30 P31
基石	8	1.9	1.6	0.8	4.16	石英	白石。		
基石	9	2.0	1.0	0.7	3.72	石英	白石。		
基石	10	1.8	1.5	0.7	3.34	石英	白石。		
基石	11	1.8	1.4	0.8	3.50	石英	白石。		
基石	12	1.7	1.4	0.8	3.46	石英	白石。		
基石	13	1.8	1.3	0.9	2.95	石英	白石。長楕円形。		
基石	14	1.8	1.5	0.5	2.58	珸質頁岩	黒石。		
基石	15	1.8	1.5	0.6	3.22	チャート	黒石。		
基石	16	2.0	1.5	0.9	4.57	チャート	黒石。		
基石	17	2.3	1.7	0.6	3.86	蛇紋岩	黒石。		
基石	18	2.0	1.5	0.6	3.09	蛇紋岩	黒石。		
基石	19	1.9	1.6	0.5	3.30	黒色安山岩	黒石。		
基石	20	1.9	1.6	0.7	3.71	頁岩	黒石。		
基石	21	1.8	1.7	0.6	3.66	蛇紋岩	黒石。		
基石	22	1.7	1.6	0.7	3.18	チャート	黒石。		
基石	23	1.9	1.4	0.6	2.87	ホルンフェルス	黒石。		
基石	24	1.7	1.3	0.7	2.93	チャート	黒石。		
基石	25	1.5	1.4	0.7	2.61	珸質頁岩	黒石。		



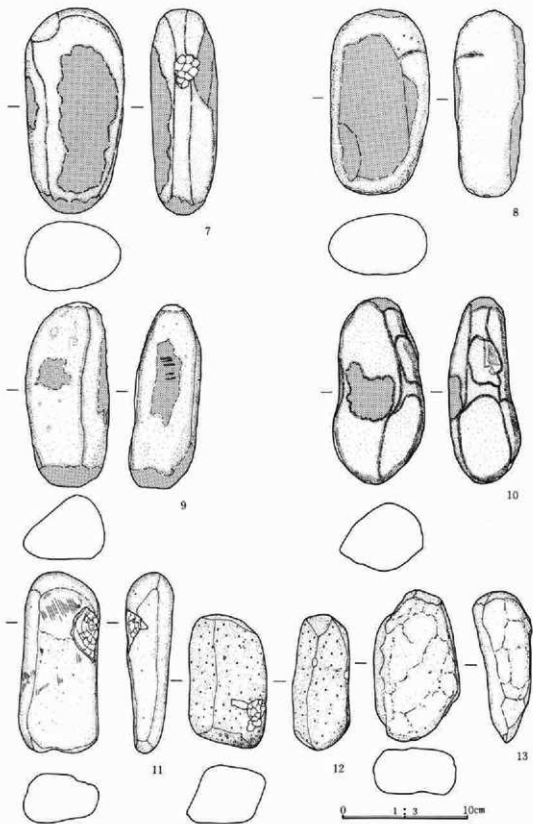
第29図 こも欄み石集成図



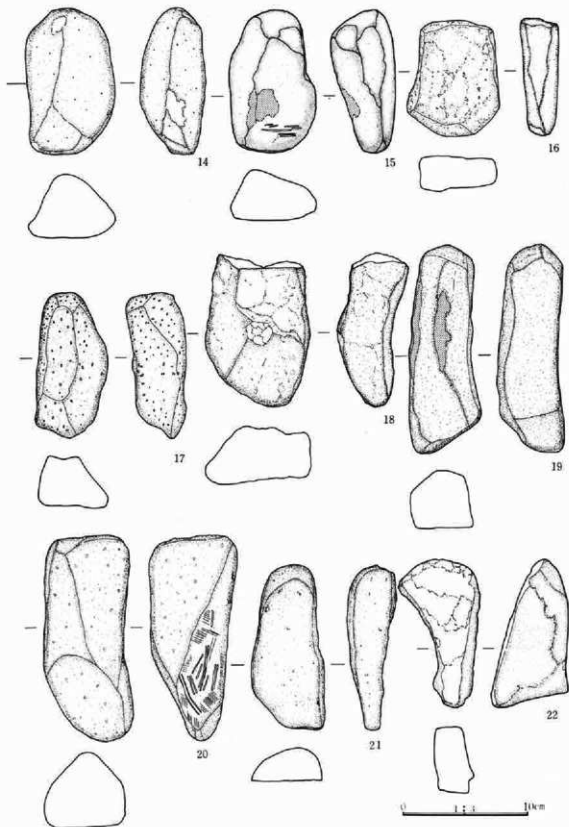
第30図 こも編み石集成図



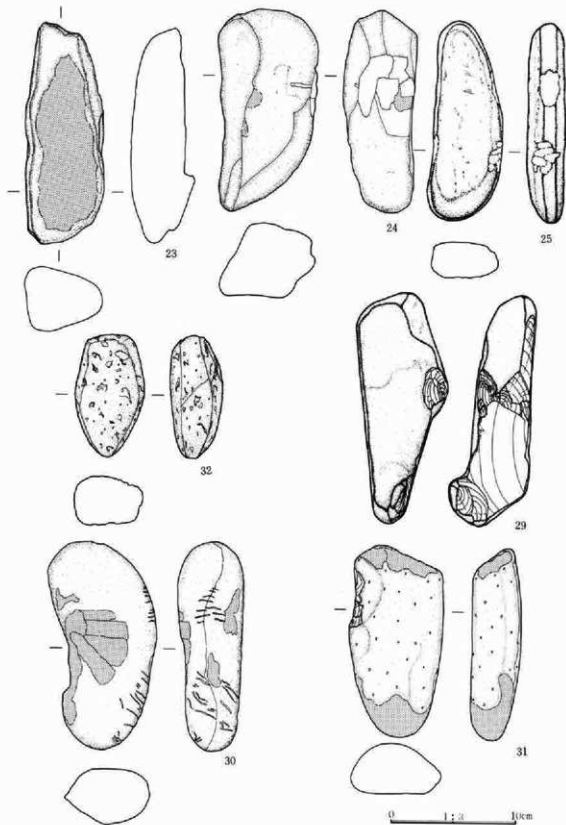
第31圖 こも羅み石集成図



第32図 こも編み石集成図



第33図 こも編み石集成図



第34図 こも編み石集成図

第9表 熊野堂遺跡第II地区 75号住居址出土 こも編み石計測表

遺物番号	長さ×幅×厚さ	重量	石質	使用痕の状況
1	12.5 × 6.8 × 5.3cm	670g	粗粒安山岩	全体に磨耗、表裏平坦面に磨痕を持つ、すり石の用途
2	13.4 × 6.5 × 4.1	580	#	凸面にすり面、上端敲打痕、側面うち欠きがある
3	14.3 × 7.2 × 4.3	750	#	全体に磨耗、斜交する線条痕がわずかにある
4	13.8 × 7.1 × 4.9	670	#	全体に磨耗、側面に斜交する磨痕がある
5	12.7 × 6.2 × 5.2	700	#	裏面をすり面とする。側面に敲打痕を持つ
6	13.8 × 5.2 × 4.6	570	#	下端面に敲打部、側面に固定用うち欠きを持つ
7	12.6 × 6.8 × 6.8	560	#	一部に磨痕、側面凸部に敲打痕を持つ
8	9.8 × 5.7 × 4.0	330	#	下端と両側面に敲打部を持つ
9	13.6 × 6.2 × 4.1	450	砂岩	10と接合する、裏面に敲打痕を持つ
10	12.1 × 4.7 × 4.7	280	#	9と接合する
11	11.3 × 7.3 × 4.7	320	粗粒安山岩	表裏両面が磨耗する、側面をうち欠いている

第10表 熊野堂遺跡第II地区 197号住居址出土 こも編み石計測表

遺物番号	長さ×幅×厚さ	重量	石質	使用痕の状況
1	16.7 × 7.5 × 5.3cm	1,020g	粗粒安山岩	表裏面にすり面と長軸方向の細く浅い条痕がある
2	14.9 × 7.3 × 5.7	890	#	下端部全体が磨耗、すり石の用途
3	15.7 × 6.8 × 4.1	740	#	上端部は磨耗と敲打痕、下端部は磨耗している
4	15.3 × 7.1 × 5.2	990	#	下端部に敲打痕、側面中央に敲打によるうち欠きを持つ
5	14.5 × 4.7 × 3.7	550	#	上端敲打、下端すり面、中央全体磨耗している
6	14.5 × 7.0 × 4.7	780	#	下端部全体と側面上方に敲打痕を持つ
7	16.1 × 7.7 × 5.5	1,090	#	表裏のすり面は長軸方向で複数の単位、砥石の用途
8	14.6 × 7.9 × 4.8	990	#	表裏平坦面にすり面を持つ、すり石の用途
9	14.5 × 6.6 × 5.0	720	#	上端敲打痕、側面のすり面は長軸に直交する筋状
10	14.7 × 6.7 × 5.3	730	#	側面全体にすり面、下端に敲打痕を持つ
11	14.2 × 6.0 × 3.8	480	#	側面にうち欠き、部分的に弱い磨痕と帯状のすり面がある
12	10.4 × 6.1 × 4.5	440	#	側面に軽い敲打痕がある
13	11.9 × 6.7 × 3.7	490	#	下端部に敲打痕、側面は磨耗用の敲打痕を持つ

第5章 資料集成

遺物番号	長さ×幅×厚さ	重量	石質	使用痕の状況
14	11.5 × 7.0 × 5.0	540	#	上下両端頂部、側面頂部に敲打痕を持つ
15	11.1 × 6.8 × 4.0	380	#	表面の側縁と平坦面に長軸と直交する筋状のすり面がある
16	9.1 × 6.3 × 2.8	290	#	明瞭な敲打やすり痕はない
17	11.4 × 5.5 × 4.1	380	#	上端側縁頂部に軽い敲打痕がある
18	12.0 × 8.4 × 4.3	590	#	表面縁線頂部に強い敲打集中箇所がある、台石の用途
19	16.3 × 5.7 × 4.5	650	#	下端に敲打痕、側面全体に着柄用の強い磨耗がある
20	16.1 × 6.3 × 5.8	1,000	#	側縁が磨耗、裏面の凹面に刃物痕らしい条痕がある
21	12.8 × 5.8 × 2.6	340	#	割れ口は軽く敲打されている、23と接合
22	11.6 × 3.2 × 5.2	390	#	表面平坦部に軽い敲打痕がある
23	16.8 × 6.2 × 5.0	810	#	21と接合 表面平坦部にすり面がある
24	15.8 × 7.6 × 5.9	950	#	側面はうち欠かれ、すり面と紐かけ条痕を持つ
25	15.7 × 5.4 × 2.8	440	雲母石英片岩	全体に磨耗、両側面に2対の紐かけ痕を持つ
26	18.2 × 4.9 × 3.5	600	#	上下両端にすり面と敲打痕、側面敲打による紐かけ調整
27	14.9 × 4.1 × —	410	黒色 片岩	上下両端にすり面、側面に紐しばり痕を持つ、赤色顔料付着
28	14.1 × 5.2 × 3.4	370	#	上下両端にすり面、側面に紐しばり痕を持つ
29	18.2 × 6.7 × —	850	黒色 頁岩	割れ口の頂部に敲打痕がある
30	16.3 × 6.8 × 4.4	890	粗粒安山岩	全体に磨耗、すり面は帯状で複数方向、すり石と砥石で併用
31	14.4 × 7.2 × 4.0	670	#	上下両端にすり面、側面凹部にうち欠きを持つ
32	9.6 × 5.5 × 3.8	110	軽石(二ツ岳)	亀甲状の軽石製品、砥石の用途

まとめ・分析編

第6章 ま と め

第1節 熊野堂遺跡の集落変遷について

1 はじめに

熊野堂遺跡は、第I地区から第III地区までの3つの地区からなり、縄文時代から平安時代の住居総数396軒を始めとして数多くの遺構が確認された、中世にも及ぶ集落跡である。遺構の内訳は、下記である（ここで遺構編第1節P-24に掲載した数字を訂正する）。

縄文時代 住居1軒、土坑7基

弥生時代 住居66軒、土坑10基、井戸6基、溝8条

古墳時代 住居89軒、井戸3基、溝15条、方形周溝墓1基、水田2面、畠1箇所

奈良時代 住居47軒、掘立柱建物29棟、溝5条

平安時代 住居179軒、土坑12基、溝22条、井戸6基、墓坑2基、竪穴状遺構7基、道路状遺構2箇所、水田1面、畠2箇所

中世 館1、土坑2基、溝4条、竪穴遺構4基

近世 土坑、溝、畠

時代不明 住居14軒、土坑、溝などに特定できないものが多い。

この内容は、この地域にあって本遺跡のみが卓越したものではなく、周辺に位置する融通寺遺跡や三ッ寺II遺跡などでも住居総数が300軒を越しており地域全体での遺構密度の高さを示しているといえる。その中において、集落としての特徴をあげると以下になる。

- 1 集落の形成は、縄文時代にもみられるが弥生時代中期以降、平安時代11世紀代までほぼ継続的に推移した伝統的な集落である。
- 2 集落は、居住域と生産域とが確認され、同一占地の中での時代別の変遷をたどることができる。その様相は、稲作受容で安定を増したであろうこの地域の集落の典型例といえる。ここでは、付図3などに示した住居群の時代別推移を基にして、集落の変遷と特徴をのべる。

2 旧地形の復元と遺跡範囲

遺跡は、標名山中麓に水源を持つ井野川左岸、標高108～115mの台地上にある。付近は、山麓を下り井野川に合流する猿府川、唐沢川、天王川などの支流が南北走向の台地を開析し、台地と低地とで起伏に富んだ地形を形成している。その各台地上には、本遺跡に匹敵する内容を持つ雨壺、若浦北、若浦南、融通寺などの遺跡が接する様に並んでおり、特に弥生時代以降の遺跡密度が高い地域を形成している（付図1参照）。

地形は、井野川の両岸では対称的な景観を持っている。東は、標高120～125m付近で「前橋台地」上に「相馬ヶ原扇状地形」が接し、陣場泥流末端の残丘や扇端が開析された低い崖線と「日高遺跡」に代表される、弥生時代以降に開墾される小さな谷地形とが、地形変換帯として若干の起伏を持って続

いている。西側一帯は、井野川と標名白川との間に主に二ッ岳泥流で形成された「白川扇状地形」が、左岸と対称的な景観をもって一面に広がっている。この中では、平安時代の水田跡が広域に調査されたり、箕郷町の「上芝古墳」や「下芝谷ッ古墳」などの古墳が泥流下に埋没していることも知られ、左岸に対応する様な起伏に富んだ地形が埋没していると推定される。

第1分冊遺構編の第2図は、井野川兩岸の地形を「洪積低地、旧氾濫原、自然堤防」で区分したもので、井野川を中心とした河床や河道自身の変化が、周辺の地形や遺跡の形成に大きな影響を与えたとした(第1分冊「第2節遺跡の立地と周辺遺跡」参照)。すなわち、山麓の末端を形成する洪積低地が、井野川やその支流によって開析されて、「テラス状地形」や「自然堤防」が形成されていく過程が考えられる。この「テラス状地形」や「自然堤防」は、井野川沿いで調査された芦田貝戸、御布呂、同道といった各遺跡の遺構実態からすると、弥生時代以降集落を形成、維持した水田可耕地になったと考えられる。

最近では、これらの遺跡実態を踏まえて流域での水田開発プロセスの視点から、5世紀代には井野川支流の唐沢川河道をつけ替えて水田耕地の拡大をはかったとし、開発上の画期を提起している。そして、三ッ寺I遺跡の「豪族居館」をその開発拠点として性格付けている(能登 健「三ッ寺I遺跡の成立とその背景」『古代文化』第42巻第2号 1990)。

遺跡内の微地形は、現在一面に見える台地部分も第II地区の2～3区を横断する井野川と推定される「河道跡」や第I地区南端の小さな「谷地形」といった起伏があり、遺構占地との関係を窺わせる。河道跡は、現地形で約1mの段差を持ち、トレンチによる確認では南北の幅約30m、深さ現地表下4m以上にも及ぶ規模と北西から東南へ向かう方向が推定される。

遺構が確認された範囲は、南北で約900mあり、なお北へ広がる様相がある。東西は、第III地区の内容からすると、現在の台地幅約250mに及ぶと推定される。この範囲は、付図3で示した様に時代別の動きが特徴的に見られるが、自然地形である南の河道と北の谷地とははさまれた一帯が弥生時代以来絶えず集落の中心にあることがわかる。全体の変遷では、この河道と谷地の埋没と平坦化が居住域と生産域を拡大あるいは再編成させ、遺構の占地を大きく左右している。

3 縄文時代

遺構は、第I地区で前期後半諸磯Ⅱ式期の17号住居、第II地区4区付近で時期不明の土坑7基がある。このほかに、第3分冊遺物編の第149～154図に集成した草創期から後期までの遺物がある。この中には、この地域では報告例が少ない第II地区117号住居掘り方で出土した回転縄文や同じく3～4区の遺構埋没土で出土した摺糸文、条痕文土器がある。これら出土した遺物の量や状態からすると、遺構が存在したとしても台地先端部の小規模な集落であろう。

『群馬町の遺跡』(1986)では、この地域の遺跡について下記の特徴を指摘している。

- 1 標高150m以下では、八幡川・牛池川・染谷川沿岸流域と並んで遺跡の分布密度が高い。
- 2 時期は、中期の中でも加曾利E式期が圧倒的に多い。
- 3 この背景には、相馬ヶ原扇状地縁辺の谷地形の埋没と平坦化が画期となって、居住の場が大きく下流方向へ拡大したことがあげられている。

周辺では、上記の特徴に合致する様に雨壺遺跡で阿玉台式期の住居や土坑、大八木箱田池遺跡で勝板式と加曾利E式期の住居と土坑、若浦北遺跡・若浦南遺跡でも同様な内容が知られている。

4 弥生時代

確認された遺構は、中期後半から後期末葉までの住居66軒、土坑10基、井戸6基、溝8状がある。時期区分では、『新保遺跡II』(1988)の中で示された佐藤明人氏の編年に従うと、住居では中期第1期が6軒、中期第2期が1軒、後期第1期が8軒、後期第2期が28軒、後期第3期が11軒の内訳となる。これを遺構分布でみると次の様になる。

- 1 集落は、中期後半から後期まで継続しているが、大きく第I地区付近の北群と第II・III地区にまたがる南群とに分けられる。
- 2 集落の変遷は、南群では中期後半に集落形成が開始され、後期をへて古墳時代まで移行している。その継続性から、南群が集落内の主導的な位置を占めていたと考えられる。その一例には、磨製石鎌やベンガラ生産・製作があげられる。北群は、後期第1期になって居住域となったもので南群から発展分化したと考えられる。しかし、浅間C層降下時には生産域としての島に転換し、居住域としては6世紀前後まで断絶をしている。
- 3 集落の構成は、中期段階では、住居の規模、方位、重複関係から少なくとも2つの小群があり、4棟前後の数で1小群を構成すると推定される。後期段階では、南群を例にとると同じく住居の規模、形状、方位、重複関係から、中期を踏襲した2群がみられる(第1分冊第7図参照)。
- 4 住居の特徴は、中期が一辺5m前後の方形から方台形、4本主柱穴で中央に炉を持つ、方位はN20~30°Wから東へふれていくのが時期変化としてみられる。後期は、3×4m前後と5×7m前後の大小2形態の長方形か隅丸長方形に発展分化する。大型のものは、主柱穴のほかに入り口施設が明瞭になり、炉が中央だけでなく複数になるなど構造上の変化が見られる。しかし、後期後半では、方形に近ずき古墳時代へのつながりをみせる。方位は、N33°W~N14°Eと大きく幅を持つが微差ではあるが西から東への時期変化が見られる。
- 5 集落全体の最盛期は、数の上から後期第2期に求められる。この後期第2期に遺構数が多いのは、隣接する雨壺遺跡や井出村東遺跡でも同様であるが、中期から継続する本遺跡や雨壺遺跡と後期のみ井出村東遺跡などに分類される。しかし、古墳時代4世紀代の遺構とは、北群で示される様に数、占地上で明瞭な画期が見られる。これは、広範囲にわたる生産域の出現や方形周溝墓の築造からみれば集落の末期的な展開ではなく、むしろ次代への組織的で急速な転換がはかられたものとするべきであろう。ただし、画期の背景は、若狭 徹氏が指摘するうちで、この地域での樽式期の遺跡の多さが外来系要素の導入を容易にした、と現状では考えたい(『群馬県における弥生土器の崩壊過程』『群馬考古学手帳』1 1990)。

5 古墳時代（4世紀）

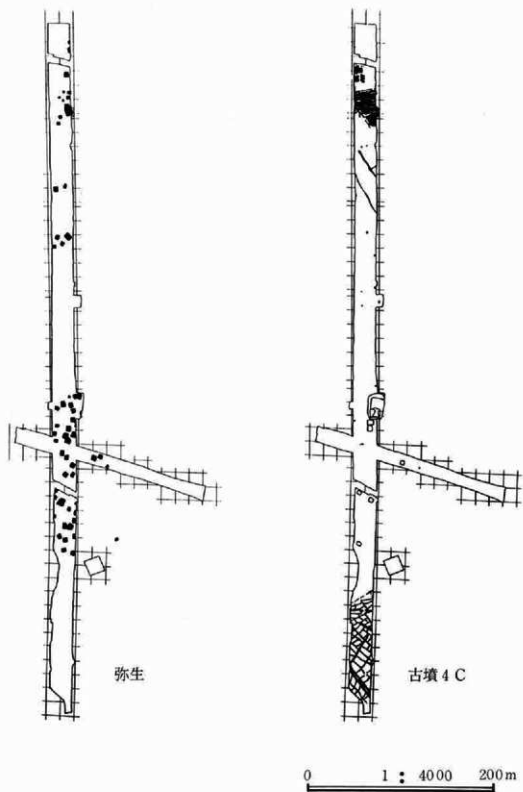
時期は、浅間C層の降下前後をさしている。遺構は、住居6軒、方形周溝墓1基、水田、畠、溝があげられる。集落としては、居住域・生産域・墓が一体的にとらえられるが、浅間C層を鍵層にすると、遺構の構築と廃絶は時間的に微差の中でめまぐるしく行われていることがわかる。前代の弥生時代集落とは画期を持つが、外来要素の導入で急速に再編成され、広範囲におよぶ生産域の形成と第II地区北端の最高所には前方後方型周溝墓が築造されている。その変遷は下記である。

土器の特徴	居住域	生産域	墓 域
外来系土器	136住・173住 209住・4区15住 4区18住・III区8住	水田・畠	1号方形周溝墓
↓ (浅 間 C 層 の 降 下) ↓			
石田川式土器	136住・3区8住		

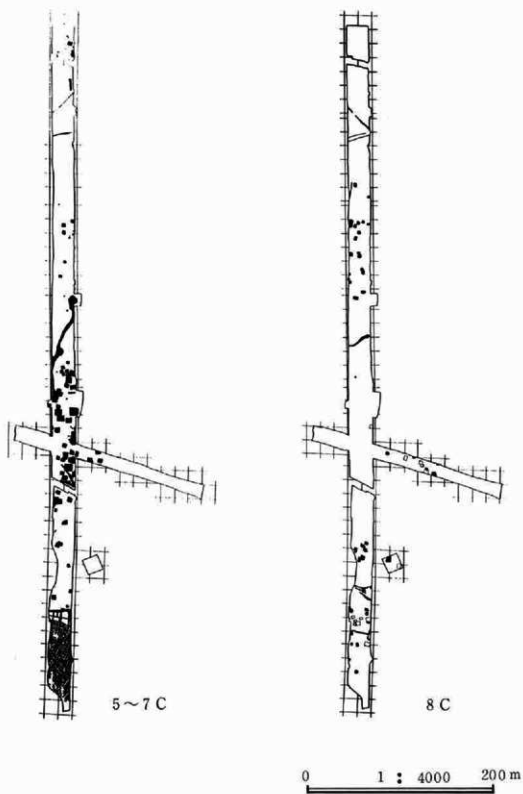
上記の中での特徴は、これまでの集落内で確認できなかった墓の出現である。その築造に際しては、弥生時代後期の住居7軒をこわし、しかも土器の上での型式差が見られない209住を人為的に埋め戻して前方部を作っている。居住域から墓域への転換例は、弥生時代後期ではあるが東対岸にある若浦南遺跡1号方形周溝墓がある（『西裏南遺跡』群馬町教育委員会1988）。地形の上で、ともに居住域から転換した最高所を占地しており、造墓に対して強い規制のあり方を反映したといえる。また、墓の築造後は、南約50m付近で3軒の住居が確認されているが、時期差だけでなく方位や形状にも差異が見られ、墓を意識した居住域の設定がされている。

生産域は、埋没河道跡の低地に区画された水田と集落北方の台地上の畠とがある。その年代観は、第I地区の畠での弥生時代後期の住居との重複関係、第II地区での水田下の弥生土器の出土状態、あるいは同道遺跡での水田形成からすると、弥生時代末から古墳時代初頭とみることができる。本遺跡の例は、水田と畠がセットとして確認されたことに意義があり、遺構としての差異は先にのべた地形区分の占地との関係を示している。基本的に、水田は、同道、御布呂、芦田貝戸の各遺跡の標に河川に面する低地での耕作形態であり、水に乏しい台地上から小河川沿いは本遺跡や三ッ寺I遺跡などの例から畠作地帯と考えられる。

付図4には、C水田について既報のものと同報告のものを並べて掲載した。今報告では、調査時の所見と、静岡県長崎遺跡、宮城県富沢遺跡での重層した水田で確認された『泥炭層の圧密化現象』を参考事例（『長崎遺跡』財・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988）にして、FA水田の痕跡としたものを取り除いた図を新しく報告した。区画は、大畦と基幹導水路を基準とした中に等高線に沿って、一辺が4～6mの長方形を基調としたやや大きいものがみられた。水田は、浅間C層の降下堆積で復旧されてはいないが、大畦の位置は次のFA水田まで踏襲されており、継続性を示すものとされる。



第35図 熊野堂遺跡住居変遷図弥生・古墳時代



第36図 熊野堂遺跡住居址変遷図古墳・奈良時代

6 古墳時代（5世紀）

5世紀前半の遺構は、4世紀前半の浅間C層の降下による影響で占地を転換したのか、遺構は稀薄になっている。重層・継続する水田からは、集落の継続も暗示されている。この空白後に確認されるのが、5世紀後半の集落である。この地域では、特にこの時期北2kmにある三ツ寺I遺跡の『豪族居館』が築造され、その性格と地域全体との関連が注目されている（能登「前掲」、坂口「5世紀代における集落の拡大現象」『古代文化』第42巻第2号 1990）。

遺構は、住居11軒と1号方形周溝基の周溝に投棄された土器溜まりがある。これに、FAで埋没した水田が加えられよう。これらは、『豪族居館』の築造から存続期間に対応するもので、居館を支える周縁の基盤集落の一つとして位置付けられる。住居は、第II地区の1号方形周溝基を取り囲む様に見られ、方位は差があるものの重複をさげ規則性が窺える。

7 古墳時代（6・7世紀）

集落は、6世紀初頭のFAと6世紀中頃のFPの降下堆積で画期を持っているが、5世紀にみられた居住域・生産域を継続、発展させている。時期とすれば、豪族居館の廃絶後を占う資料である。

遺構は、住居72軒、土坑、溝、溜井2基、水田、畠などがある。その特徴は、下記である。

1 分布は、第II地区3～4区一帯が中心で5世紀からの居住域を継続している。さらに第I地区でも8世紀代に継続する2つの住居群が出現し、再度居住域へと転換する。

2 北にあった谷地は、5世紀後半頃からFA水田の灌漑を目的に溜井が築かれ、集落内を画していた自然地形から施設へと変化し、7世紀前後には埋没している。

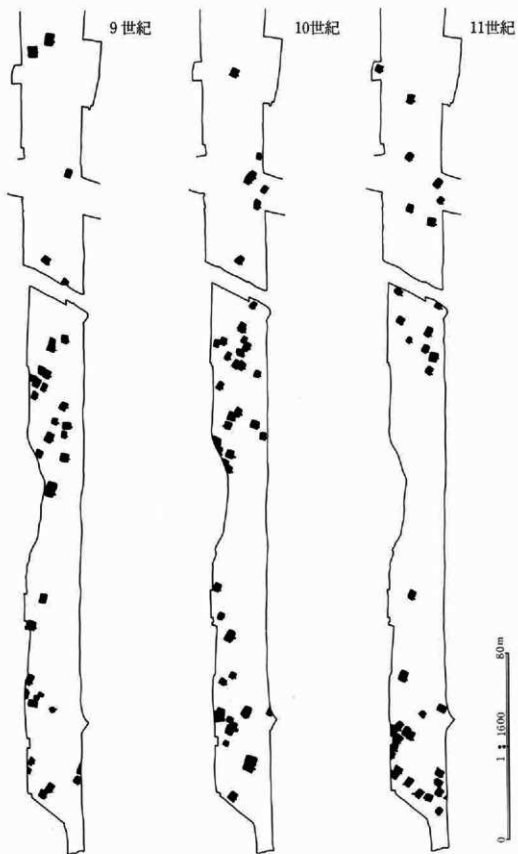
3 北への居住域の拡大は、前代までの畠地を消失させた。それに代わってか、住居群に付設されたミニ畠が推定される。これは、第II地区4区付近でのFAで埋没した小溝をさし、群馬県渋川市中筋遺跡や子持村黒井峯遺跡に類似した景観を復元する。第II地区の2区や3区では、部分的に畠が確認されている。時期は、9世紀以降であるがその先駆形態と考えられる。

4 水田は、C水田の大畦を踏襲しながら重複する。区画の特徴は、小畦で基盤目状に整然と配置された点にあり、C水田の等高線を強く意識した配置との間に灌漑技術の向上と乏水土壤に対する工夫の跡が見られる。しかし、水田は、FAの降下後は復旧されず、さらにFP泥流の2m近い堆積で生産域としても廃絶される。

5 そして早くも6世紀末から7世紀にかけては、河道跡南の低地部分への住居の進出がはじまり、新たに居住域へと転換している。これまでの変遷が、台地を居住域、低地を生産域として二分してきたものが、始めて置換もしくは大幅な転換をはかり集落の画期となっている。

8 奈良時代（8世紀）

遺構は、住居47軒、掘立柱建物29棟、溝5条などがある。この時期は、『推定東山道』に象徴される様な律令体制と無縁ではなく、上記の遺構もそれを背景とした特徴を持っている。北の三ツ寺II遺跡の井戸からは、この時期の習書木簡や墨書土器が出土しており、『道』で結ばれた国府や国分寺などとも往来が可能な周辺集落としての性格も考えられる。それが、『和同開珎』や『碁石』といった特殊な



第37図 熊野堂遺跡II地区住居変遷図平安時代

遺物の出土背景にもあろう。

分布は、7世紀の胎動をうけて居住域と生産域の大幅な転換が見られる。これまで居住域の中心であった第II地区3～4区付近は、あたかも「広場」のごとく遺構が極端に稀薄になっている。その反対に稀薄であった調査区の南北で住居群が出現する。この背景には、この時期での存在を確定できないが「推定東山道」の本遺跡内の通過とそれに伴う集落全体にわたる再編成があったものと考えられる。その動きは、掘立柱建物が群構成を持って出現したこと、その中でも外周を区画したと推定される溝を付設した建物群の存在が顕著なものである。掘立柱建物は、分布からすると竪穴住居群とセットをなし、機能上の使い分けをしていたと考えられる。区画溝を持つ一群は、南北約50mの規模を持ち、重複関係から8世紀中頃から9世紀前後の時期と軸方向から2時期にわたる変遷がある。その一面は、9世紀代の遺構占地でもしばらく空白域として意識されていることから、集落機能全体をあずかる中枢施設としての性格を持つものであろう。しかし、公的な背景に依存するあまり、集落本来の変遷の中では長期にわたって維持されずに、8世紀代の一時的な存続である。その関連で注目されるものに、ほぼ磁北で縦断する道路状遺構がある。これは、既報の「雨壺古道」(『熊野堂遺跡第III地区・雨壺遺跡』財・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984)と平行するもので、この地域一帯の基準として設けられ、集落の占地に対しても規制であった可能性がある。

9 平安時代(9～11世紀)

遺構は、住居179軒、土坑12基、溝22条、井戸6基、墓坑2基、竪穴状遺構7基、道路状遺構2箇所、水田1面、畠2箇所などがある。

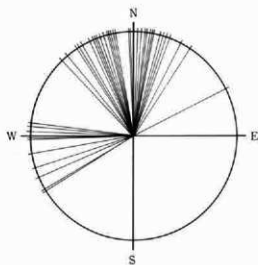
分布は、北の第I地区での遺構数が極端に減少するのにたいして、それまで稀薄であった第II地区3～4区への集中が再開される。これは、8世紀にみられた律令体制にかかわる村が、その体制が衰退していく中で、本遺跡本来の居住域へ回帰していったことを示している。この背景には、井野川の河床が大きく変化し、新たな水田可耕地の出現と耕地の整理を余儀なくされたことが大きな理由として一方にあったと考えられる。居住域の移動は、それに連動したもので河川寄りの耕作地との位置関係でもある。また、10世紀後半以降の住居で出土する瓦や埴輪は、それ以前での遺構を周辺に暗示するものであるが、耕地の拡大と集落の編成が大規模かつ革新的であったことも示している。その遺構は、瓦や飾り金具、奈良三彩などの特徴的な遺物からすると「寺院」と推定され、9世紀代の時期である。住居の時期別変遷では、7世紀後半から8世紀後半、9世紀後半から10世紀後半、11世紀後半、の3つ時期に増加傾向が指摘されているが(第6章第4節参照)、先の遺物の出土背景や推定される遺構からみて集落としての画期に相当する。

10 中世・近世(12～18世紀)

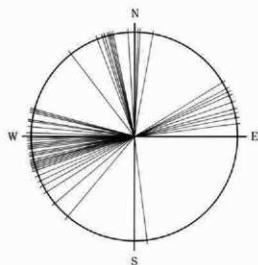
遺構は、第III地区の唐沢川沿いに中世の「熊野堂館」がある。第II地区南端の平行する溝は、館の広がりを示す関連遺構と推定される。この時期は、井野川沿いに「長野氏」に関する館が集中しており南対岸の融通寺遺跡でも同時期頃の「融通寺館」が確認されている。

近世の遺構は、畠、区画の溝、イモ穴らしい土坑などがある。景観は、陶磁器などの遺物の出土量や分布を見ても、住まいに関する遺構は推定できず、江戸時代以来耕地が一面に広がっている。

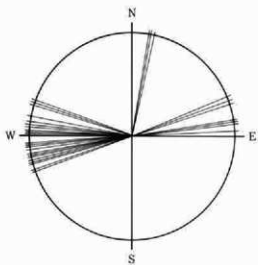
弥生時代



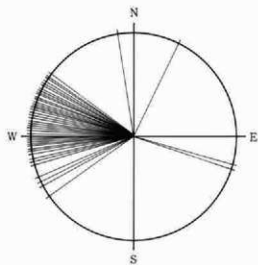
古墳時代



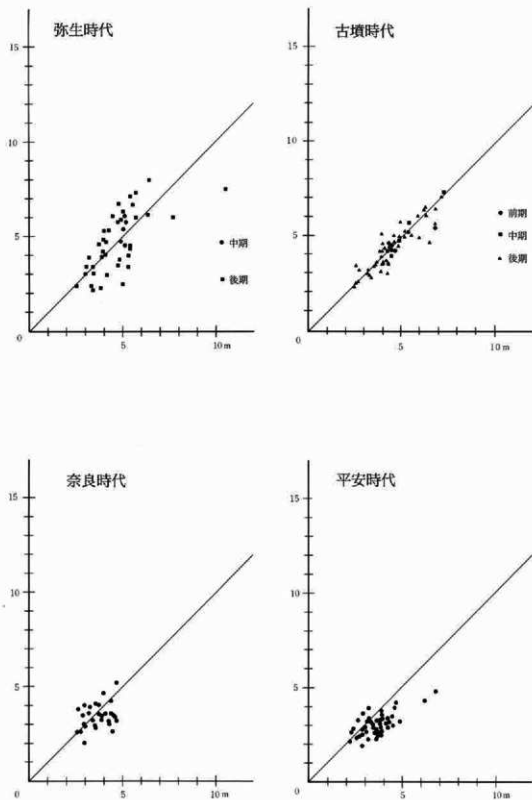
奈良時代



平安時代



第38図 熊野堂遺跡II地区時代別住居方位図



第39図 熊野堂遺跡時代別住居規模

第11表 熊野堂遺跡弥生時代住居一覧表

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 4住	隅丸 長方形	250×500	N 32°W	無	2	北西柱穴の やや東側	—	後期	東側半分は調査区域外
I地区 7住	隅丸 方形か	300×不明	N 25°W	無	0	中央やや北 寄り	—	後期	東側半分は調査区域外 床面に焼土と炭化物分布
I地区 8住	隅丸 方形	600×570	N 10°W	無	4	無	—	後期	西壁近くで炭化物層検出
I地区 9住	隅丸 方形	390×390	N 19°W	無	—	中央北寄り	無	後期	中央西側の床面で赤色顔 料が出土
I地区 10住	不整隅丸 方形	300×300	N 16°W	無	0	中央北寄り	無	後期	南西隅の床面で赤色顔料 が出土
I地区 11住	不整隅丸 長方形	330×240	N 23°W	無	0	中央やや北 寄り	—	後期	炉内北側に厚さ2～3cm の焼土層確認
I地区 12住	隅丸方形	380×330	N 16°W	有	0	ほぼ床の中 央	—	後期	北壁周溝上面と埋没土中 から赤色顔料が出土
I地区 13住	略正 方形	250×240	N 30°W	無	0	中央やや北 寄り	無	後期	3ヶ所焼土堆積、北壁際 中央の床面には粘土堆積
I地区 14住	不明	不明×200	N 62°E	無	0	無	無	後期	12住の東南隅下面で北壁 隅の一部だけを確認する
I地区 15住	長方形	400×480	N 15°W	無	4	ほぼ中央	無	後期	北壁東側の床面が一段高 い
I地区 16住	不整 長方形	1050×750	N 22°W	全周	6	2基	無	後期	赤色顔料が柱穴や埋没土 中から出土
I地区 18住	長方形	320×390	N 46°W	無	4	中央北の柱 間	無	後期	
I地区 19住	方形	400×400	N 17°W	無	0	ほぼ中央	無	後期	床面近くまで削平され炉 の位置から推定する
I地区 21住	長方形	490×590	N 25°W	無	4	中央東の柱 間	—	後期	中央北の柱穴間に焼土と 灰、炭化物が分布
I地区 22住	隅丸 長方形	530×340	N 4°E	無	0	中央やや北 寄り	無	後期	
I地区 36住	隅丸 長方形	770×600	N 33°E	無	4	北西やや中 央寄り	無	後期	48住の改築住居か
I地区 37住	隅丸 長方形	480×380	N 9°E	無	4	北東やや中 央寄り	無	後期	
I地区 39住	隅丸 長方形	530×400	N 88°W	無	4	北西やや中 央寄り	無	後期	南東側に38住が重複し削 平される

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 48住	隅丸 長方形	540×450	N 27°E	有	4	北西側主柱 穴の中間	—	後期	36住床下で確認、東南側に入口施設
I地区 67住	長方形	不明×350	N 11°W	—	4	住居中央東 寄り	北西中央	後期	西壁側は調査区域外
II地区 96住	台形	510×455	N 44°W	無	4	中央	東壁寄り	中期	96→98→88住→14溝
II地区 114住	方形か	—×408 東側欠	N 92°W	有 全周	—	—	—	後期	
II地区 115住	長方形	470×350	N 30°W	—	4	中央ほぼ北 寄り	—	後期	115→112、87→99住
II地区 117住	方形	490×476	N 32°W	無	4	中央	無	中期	117→110→85→86住 焼 失住居か
II地区 137住	—	—	N 85°W	無	無	—	無	後期	137→136→135住
II地区 144住	長方形	370×460	N 0°W	無	3 (4)	中央北寄り	無	後期	3区12、144→3区10→ 145→3区9住
II地区 147住	方形	345×306	N 91°W	無	無	—	無	後期	160→151→147→89住
II地区 151住	方形	—×462	N 85°W	無	無	—	無	後期	162→155→151→147→89 住
II地区 155住	隅丸 長方形	445×605	N 2°W	無	4	中央北と中 央の2基	無	後期	162→155→151→237住
II地区 160住	長方形	415×295	N113°W	無	—	—	無	後期	160→151→147→134→6 壁穴
II地区 162住	—	—	N 80°W	—	—	—	—	中期	162→155→132住
II地区 164住	隅丸 長方形	410×470	N 2°W	有 全周	4	中央北寄り	南壁中央東	後期	164→163→161→158、 159、142住
II地区 171住	隅丸 長方形	340×440	N 2°E	無	4	北の柱間	無	後期	171→4区9住→106、107 土坑
II地区 172住	隅丸 方形	304×340	N 4°E	無	2	中央北寄り	無	後期	172→4区14住→112土坑
II地区 173住	隅丸 方形	396×414	N 4°W	無	2	中央	無	後期	119、120土坑→173住→ 114土坑
II地区 175住	長方形	—×295	N 90°W	—	(2)	—	無	後期	175住→22溝
II地区 177住	方形か	—	—	無	4	中央北寄り	無	後期	177→4区16→174、176住

第6章 まとめ・分析編

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	伊・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 186住	隅丸 長方形	—×312	N 83°W	無	2	中央北寄り	無	後期	186→191→185住
II地区 192住	—	西辺のみ	—	無	1	—	—	後期	192→193住
II地区 193住	—	南西隅のみ	N 20°E	無	1	—	—	後期	194→192→193住
II地区 194住	方形	506×540	N 13°W	無	4	ほぼ中央	無	中期	194→193→4区15住→1方周
II地区 210住	長方形	—	N 33°W	有	3	中央北側	—	後期	210住→1方周
II地区 211住	不明	不明	—	無	2	焼土あり	—	後期	211住→1方周
II地区 212住	方形か	— 北東隅のみ	N100°W	無	2	中央に地床 炉2基	—	後期	155土坑→212住→1方周
II地区 213住	長方形	518×630	N 4°E	有	3	中央北	—	後期	213住→1方周
II地区 218住	隅丸 長方形	360×— —	N 10°E	無	2	—	—	後期	218→4区28→219→200住
II地区 220住	長方形	400×530	N 11°E	無	4	中央北柱間	無	後期	220→4区28→215→221住
II地区 224住	不整 方形	—×355 西辺側のみ	N121°W	無	—	—	—	後期	
II地区 225住	不明	不明	不明	無	無	—	—	後期	225住→1方周
II地区 228住	隅丸長方 形か	— 北辺の一部	N122°W	—	(1)	—	—	後期	228→209住→1方周
II地区 229住	長方形	—×576 西側片	N108°W	無	2	中央	—	中期	229住→160土坑
II地区 232住	方形	—×474	N 21°W	無	4	中央部	無	中期	236→232住
II地区 236住	方台形	462×—	N 18°E	無	4	中央部	—	中期	236→232住→174土坑
II地区 238住	隅丸 長方形	422×532	N 3°W	無	4	中央部2基	無	後期	238→237→235→158土坑
II地区 240住	隅丸 長方形	—×606	N 6°E	無	3	中央北寄り	無	後期	240住→3区2溝→182土坑
II地区 3-6住	隅丸 長方形	540×710	N 14°E	有	4	中央部	無	後期	3区6→4区28→3区1 →3区5→3区2、7住

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 3-12住	隅丸 長方形	640×800	N 7°E	有	6	中央部と北 中柱間	不明	後 期	3区12→3区10→145→ 3区9住
II地区 4-6住	隅丸 長方形	512×634	N 22°W	無	6	中央北	無	後 期	4区6→4区8→4区7 住
II地区 4-12住	隅丸 長方形	570×730	N 12°W	無	6	中央北 中央西	無	後 期	
II地区 4-18住	隅丸 方台形	635×615	N . 6°W	無	無	中央部	南壁中央か	後 期	4区19→4区18→199→ 198住
II地区 4-19住	隅丸 長方形	558×670	N 2°E	無	6	中央北と中 央西の2基	無	後 期	4区19→4区18→4区17 住
II地区 4-23住	隅丸 長方形	472×672	N 14°W	無	4	中央北と中 央西の3基	不明	後 期	
II地区 4-29住	長方形	478×578	N 17°W	無	3 (4)	中央部か	無	後 期	4区29→4区26→4区24 →4区30→31住→27住
III地区 5住	隅丸 長方形	520×580	N 2°E	無	4	中央地床炉		中 期	5→6→4住
III地区 8住	隅丸 長方形	340×220	N 16°E	無	無	北東側 地床炉	—	後 期	8住→16溝→4掘立
III地区 21住	内反 長方形	540×440	N 83°W	—	4	中央地床炉	—	後 期	21→19住→7溝→16溝→ 3土坑

第12表 熊野堂遺跡古墳時代住居一覧表

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	伊・カマド	貯蔵穴	時期	備考
1地区 1住	方形	490×490	N 81°W	全周	無	北壁中央	南西隅 楕円形	後期	7→1住
1地区 2住	方形	320×300	N 12°W	有	—	北壁やや東寄り	—	後期	4→2→5住 東側は調査区域外
1地区 3住	方形	260×250	N 21°W	有	有	東壁やや南側	—	後期	4→3住 東側は調査区域外
1地区 5住	不明	270×250	N 12°W	—	—	北壁中央やや東寄り	—	後期	4→2→5住 東側は調査区域外
1地区 6住	不明	300×不明	N 38°W	有	—	東壁中央やや南寄り	—	後期	4→6住 北西隅付近を 確認
1地区 28住	隅丸 長方形	390×310	N 80°E	—	無	東壁	無	7世紀後半	29→28住
1地区 32住	隅丸 長方形	400×360	N 80°E	無	無	東壁	—	7世紀後半	32→31住
1地区 35住	長方形	410×370	N 88°W	—	—	東壁南寄り	—	7世紀後半	35→34住
1地区 42住	隅丸 方形	270×320	N 67°E	無	無	東壁やや南寄り	—	7世紀後半	4号掘立・5号掘立→42住
1地区 45住	隅丸 方形	320×320	N 77°E	無	無	東壁中央部分	—	7世紀後半	
1地区 51住	長方形	380×350	N 65°E	—	—	東壁やや南寄り	南東隅	後期	52→51住 埋没土中に多量の焼土と灰を含む
1地区 52住	長方形	330×290	N 18°W	—	—	北壁中央	—	後期	52→51住
1地区 53住	長方形	430×360	N 63°E	—	—	東壁南寄り	南東隅	後期	
1地区 54住	長方形	630×610	N 75°E	—	4	東壁南寄り	—	後期	55→54住
1地区 55住	長方形	480×450	N 71°E	全周	4	伊があるかもしれない	—	後期	55→54住
1地区 56住	長方形	不明×600	N 15°W	—	(4)	東壁中央南寄り	南東隅	後期	
1地区 57住	長方形	400×350	N 59°E	—	—	東壁南寄り	南東隅	後期	埋没土中に多量の焼土と灰を含む
1地区 58住	不整形 方形	350×340	N 83°E	—	—	東壁中央やや南寄り	南東隅	後期	上面にF Pで埋没した鳥跡がある

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	伊・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 59 住	隅丸 長方形	430×350	N 14°W	無	無	南東隅	無	後 期	埋没土上面に F.A が堆積する
I地区 60 住	不 明	不 明	N 14°W	—	—	有	—	後 期	カマド確認のみ
I地区 61 住	—	不明×450	N 12°W	—	1	東壁中央や 南寄り	—	後 期	住居址全体の約半調査区 域外で上面に F.A が堆積
I地区 70 住	不整形	360×350	N 83°E	無	無	東壁中央や 南側と隅	南東隅	7世紀後半	
I地区 72 住	不 明	不 明	N 3°E	—	—	東壁	—	7世紀後半	カマド及び周辺部のみ の検出
II地区 6 C 住	長 方 形	495×576	N149°W	無	3	東壁南寄り	南西隅	7 世 紀	6 C→12→6 A→7、6 B 住
II地区 10 住	長 方 形	423×305	N 76°W	無	—	東壁中央南 寄り	北西隅か	7世紀第4	10→8・9→5住
II地区 57 住	長 方 形	650×463	N 97°W	有 全周か	4	東壁中央	南東隅 北東隅	7世紀第4	61→57→63→50→51→45 住
II地区 60 住	方 形 か	340×— 東壁側確認	N 76°W	—	—	東壁	—	7世紀中頃	60→61→59、43→49住
II地区 61 住	方 形 か	325×—	N 96°W	無	無	—	—	7世紀第3	61→57→63→50→51→45 住
II地区 67 住	方 形	520×525	N122°W	有 全周	4	東壁ほぼ中 央	無	7世紀第2	67住→4溝
II地区 68 住	隅丸 方 形	—×455	N104°W	—	—	東壁南寄り	—	7世紀後半	68→79住→7竪穴
II地区 75 住	方 形	460×505	N101°W	無	無	東壁南寄り	東南隅外	7 世 紀 末	
II地区 116 住	方 形	515×495	N 94°W	無	4	東壁中央	東南隅	7世紀第4	119→116→116→112、86 →88、98住
II地区 118 住	方 形	×520	N 2°E	無	無	—	無	中 期 5世紀後半	96→119→118→116→86 住
II地区 119 住	方 形	465×425	N 3°E	有 全周	4	無	無	前 期 4世紀後半	118住に同様
II地区 134 住	方 形	540×515	N 93°W	有 全周	4	東壁南寄り	—	7世紀第3	160→134→129→143→ 127住
II地区 136 住	方 形	450×455	N 82°W	無	4	ほぼ中央	南西隅	前 期 4世紀後半	137→136→135住
II地区 145 住	方 形	—×690	N 13°W	有 全周	4	北壁中央	南壁中央	後 期 6世紀前半	3区12、144→3区10→ 145→3区9住

第6章 まとめ・分析編

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 146住	方形か	—×410	N 85°W	無	不明	東壁南寄り	無	後 期 6 世紀	145→146住
II地区 153住	方 形	423×424	N 94°W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	後 期 6世紀後半	153→152→120住
II地区 166住	方 形	430×432	N 96°W	有 全周	4	東壁中央	東南隅と北 東隅の2基	後 期 6世紀前半	4区4→166→4区5→ 167住
II地区 168住	方 形	590×600	N91°W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	後 期 6世紀前半	170→4区5→168→167 住→17溝
II地区 170住	方 形	590×—	N 95°W	無	2	北カマドの 可能性	南西隅	後 期 6世紀前半	170→168→169住→17溝
II地区 174住	方 形	—×424 片確認	N101°W	有 全周か	2	東壁中央	東南隅	後 期 6世紀前半	177→174住
II地区 176住	方 形	—×472 片確認	N109°W	有	(2)	東壁南寄り	東南隅	後 期 6世紀前半	177→176住
II地区 178住	方 形	336×280	N 3°E	無	3	北壁中央	北東隅	後 期 6世紀前半	
II地区 179住	方形か	—×350 西壁のみ	N110°W	—	—	—	—	後 期 6 世紀	180→179住
II地区 180住	方形か	—×408 片確認	N107°W	有 全周か	2	—	—	後 期 6世紀前半	181→180→179住
II地区 181住	方 形	484×476	N118°W	有 全周	4	東壁中央	東南隅	中 期 5世紀後半	145土坑→181→180→179 住
II地区 185住	方 形	—×620 西側片	N100°W	無	2	北壁に推定	南壁中央	中 期 5世紀後半	186→185→197→184→ 190住
II地区 191住	—	—×250 西辺のみ	—	有 全周か	—	—	—	中 期 5世紀後半	186→191住
II地区 197住	方 形	—×540	N 81°W	有 全周か	3 (4)	—	—	後 期 6世紀前半	185→199→197→190→ 198→184住
II地区 199住	方 形	626×654	N106°W	有 全周か	4	—	東南隅	後 期 6世紀前半	4区18→199→197→198 →188住
II地区 208住	方 形	—×550 西辺側のみ	N 95°W	無	2	—	—	後 期 6 世紀	208住→3区1、3溝
II地区 209住	隅丸 長方形	—×433	N 75°E	有 全周か	4	中央部 中央北	北東隅	前 期 4世紀中頃	228→209住→1方溝
II地区 214住	方 形	620×640	N 88°W	無	4	不明	北東隅	後 期 6世紀初頭	214→202→189→182、 196、187、195、201住
II地区 215住	方 形	—×578	N112°W	有	2	東壁側	—	後 期 6世紀前半	220→215→221住→32、33 溝

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
Ⅱ地区 219住	方形	710×710	N 90°W	無	4	東壁南寄り	—	後期 6世紀後半	218→219→195、200→ 203住
Ⅱ地区 221住	方形	362×359	N 95°W	有 全周か	4	東壁中央か	東南隅	後期 6世紀後半	220→215→221住
Ⅱ地区 234住	長方形	257×346	N 97°W	無	1	東壁南寄り	東南隅	7世紀第3	
Ⅱ地区 241住	方形か	—×382	N108°W	無	無	不明	不明	7世紀第4	241→247住→7溝→2区 島跡
Ⅱ地区 242住	方形	246×233	N106°W	無	無	東壁中央	東南隅	7世紀第4	
Ⅱ地区 244住	長方形か 西側片	—×304	N104°W	無	無	不明	不明	7世紀前半	244住→7堀立
Ⅱ地区 246住	方形	395×424	N130°W	無	無	東壁南寄り	無	7世紀第4	3井戸→246→243、245住
Ⅱ地区 259住	長方形	592×496	N 54°W	無	無	不明	不明	7世紀第3	202土坑→261→259→258 住→37溝
Ⅱ地区 261住	長方形		N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	7世紀後半	261→259→258住→1溝
Ⅱ地区 3-1住	方形	552×505	N 99°W	無	2	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀	3区6→3区1→3区2 住
Ⅱ地区 3-3	方形	402×436	N 88°W	有 全周	3	東壁中央	東南隅	後期 6世紀前半	4区28→3区3住
Ⅱ地区 3-4住	方形	443×422	N107°W	有	3	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀前半	206→3区4住→3溝 二ツ高FA埋没
Ⅱ地区 3-5住	方形	390×390	N103°W	有 全周	4	東壁やや南 寄り	東南隅	後期 6世紀後半	3区6→3区5→3区7 住
Ⅱ地区 3-8住	方形	435×460	N 10°E	有	(4)	ほぼ中央部	南西隅	前期 4世紀後半	3区8→239住→3区2 溝 石製模造品出土
Ⅱ地区 3-10住	方形	—×478	N108°W	有 全周か	3 (4)	東壁中央	東南隅	中期 5世紀後半	3区12→3区10→145→ 3区9住
Ⅱ地区 4-2住	不整形	448×396	N 92°W	有 全周	無	東壁中央	東南隅	中期 5世紀後半	
Ⅱ地区 4-4住	方形	—	N100°W	無	(4)	東壁側か	—	中期 5世紀後半	4区4→4区5→166→ 4区3→167住
Ⅱ地区 4-5住	方形	460×478	N187°W	有 全周	1	北壁中央	北東隅	後期 6世紀後半	4区4→168—4区5→ 167、4区3住
Ⅱ地区 4-9住	長方形	394×466	N 99°W	無	無	東壁中央	東南隅	後期 6世紀後半	171→4区9住→171土坑

第6章 まとめ・分析編

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 4-11住	方形	682×666	N107°W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀前半	4区14、4区11→4区10住
II地区 4-14住	方形	675×644	N106°W	有 全周か	4	東壁南寄り	南東隅	後期 6世紀前半	172→4区11、4区14住 二ツ品FA埋設
II地区 4-15住	長方形	680×542	N106°W	有 全周	5	中央東寄り 中央	不明	前期 4世紀中頃	194→4区15住→132土坑
II地区 4-16住	方形	542×512	N108°W	無	4	東壁南寄り	東南隅か	中期 5世紀後半	177住→4区7土坑→4区16住
II地区 4-22住	方形	425×423	N 93°W	有	4	東壁南寄り	東南隅	中期 5世紀後半	
II地区 4-24住	方形	413×—	N 93°W	有	無	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀前半	4区29→26→24→30→31 →4区27住
II地区 4-25住	方形か	—	N 77°W	有 全周か	2	東壁南寄り	—	後期 6世紀前半	11、12土坑→25住→2井戸
II地区 4-26住	方形	540×570	N105°W	有	4	東壁南寄りに 推定	北東隅寄り	中期 5世紀後半	4区29→4区26→4区24 →30→31→4区27住
II地区 4-28住	方形	726×732	N115°W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	中期 5世紀後半	218→4区28→3区3住
II地区 4-30住	方台形	380×420	N 17°W	有	3 (4)	北壁中央	不明	後期 6世紀後半	4区29→4区26→4区24→ 4区30→4区31→4区27住
III地区 2住	推定 方形	500×不明	N105°W	—	2	東壁南側 粘土袖	東南隅	後期	2→II地区24→II地区 196住
III地区 3住	不明	不明×610	N 4°W	—	—	北壁東側 粘土袖	無	後期 6世紀後半	北壁だけを確認
III地区 6住	推定 長方形	不明×500	N106°W	—	4	東壁南側 粘土袖	東南隅	後期	5→6住 南壁は調査区 域外
III地区 9住	不 整 方 形	430×460	N 3°E	無	4	中央西側 地床炉	—	前期	9→10住→7溝
III地区 19住	隅丸 長方形	390×510	N109°W	有	—	北壁か	無	後期	21住→16溝→19住 北側は調査区域外

第13表 熊野堂遺跡奈良時代住居一覧表

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 20 住	長方形	470×320	N 95°W	無	無	—	—	8世紀後半	20住→11土坑
I地区 27 住	隅丸 長方形	280×260	N 88°W	無	無	東壁中央や や南寄り	—	8世紀第2	27→26住
I地区 29 住	隅丸 方形	300×200	N 87°W	無	無	東壁	—	8世紀第2	29→28住
I地区 30 住	隅丸 長方形	350×290	N 9°E	無	無	東壁	無	8世紀第1	
I地区 31 住	隅丸 長方形	380×350	N 10°E	無	無	東壁	無	8世紀後半	32→31住
I地区 33 住	隅丸 長方形	430×300	N 84°W	無	無	東壁	東南隅	8世紀第1	
I地区 34 住	正方形	300×300	N 87°E	—	—	東壁中央や や南寄り	—	8世紀第2	35→34住
I地区 38 住	隅丸 長方形	450×350	N 88°W	無	無	東壁	無	8世紀第1	39住・21溝→38住
I地区 40 住	隅丸 長方形	290×300	N 70°E	無	無	東壁中央	—	8世紀第2	41→40住 北東隅に張出部を持つ
I地区 41 住	長方形	450×260	N 81°E	無	無	東南中央	—	8世紀第1	41→40住 契口前に床下土坑がある
I地区 43 住	隅丸 長方形	390×320	N 82°E	無	無	東壁中央	—	8世紀第2	44→43住
I地区 44 住	長方形	410×350	N 73°W	無	無	東壁南寄り	カマド左側 南東隅	8世紀第1	44→43住→12井戸
I地区 49 住	長方形	430×310	N 67°E	無	無	東壁	—	8世紀第2	北東隅全体が張り出す
I地区 50 住	長方形	440×320	N 89°W	無	無	東壁中央や や右寄り	東南隅	8世紀第2	50住→28土坑 北東隅が張り出す
I地区 63 住	隅丸 方形	350×300	N 84°W	—	無	東壁南寄り	東南隅	8世紀第2	南西隅は調査区域外
I地区 64 住	長方形	440×350	N 87°E	全周	無	東壁南寄り	東南隅	8世紀第2	
I地区 65 住	方形	370×400	N 82°E	無	無	東壁中央や や南寄り	—	8世紀第2	65→66住
I地区 66 住	隅丸 長方形	400×460	N 79°W	—	—	東壁中央や や南側	東南隅	8世紀後半	65→66住

第6章 まとめ・分析編

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 71住	やや 隅丸	不明	N 83°E	—	—	東壁	南中央	8世紀第1	72→71住 東壁カマド付近だけを確認
I地区 73住	隅丸	不明×320	N 72°E	無	無	東壁南寄り	—	8世紀第1	72→71→73→74住 西側は調査区域外
I地区 74住	—	—	—	—	—	調査区域外	—	8世紀後半	72→71→73→74住 カマド部分だけを確認
II地区 11住	方形	320×352	N 90°W	有 全周	無	東壁中央南寄り	南東隅	8世紀第2	
II地区 42住	長方形	265×380	N110°W	無	無	東壁南寄り	東南隅の隅か	8世紀第2	
II地区 58住	不明	—	N 95°W	無	無	東壁	無	8世紀後半	58→53→44→26、40住
II地区 63住	方形か	325×—	N101°W	無	無	無	無	8世紀	60→61→57→63→47→59住
II地区 71住	方形	330×390	N101°W	有	無	東壁南寄り	無	8世紀第3	77→71住
II地区 77住	方形か	365×—	N105°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀第2	77→71→78住
II地区 79住	方形か	—×438	N102°W	無	—	東壁南寄り	東南隅か	8世紀第1	68→79住→7壁穴
II地区 80住	隅丸 長方形	300×440	N103°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀第1	80住→6、7溝
II地区 82住	方形	445×425	N 88°W	有 全周	無	東壁中央	無	8世紀	111→109→101→82→100→83住
II地区 85住	方形	390×340	N 85°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀中頃	117→85、110→86住
II地区 101住	長方形	—×347	N 72°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀	82住に同様
II地区 105住	方形か	—×367	N 88°W	有	無	東壁	東南隅	8世紀末	106→105→104→103住 和岡岡崎出土
II地区 106住	不明	—	N109°W	無	—	不明	不明	8世紀	106→105→104→103住
II地区 108住	方形	360×408	N100°W	無	—	東壁中央	無	8世紀第4	108→87、102→203住
II地区 109住	長方形	330×—	N 70°W	有	無	東壁南寄り	無	8世紀	111→109→101→82→100→83住
II地区 110住	長方形	460×345	N 87°W	有 全周	6	東壁やや南寄り	—	8世紀第3	117→110→86、102住

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 111住	長方形か	60×— 北壁のみ	N 75°W	—	不明	—	不明	8世紀	109住に同様
II地区 243住	長方形	283×343	N 98°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀第1	3井戸→246→243, 245住
II地区 245住	長方形	—×294 東側片	N 94°W	無	無	—	無	8世紀後半	3井戸→246→243, 245住
II地区 247住	方形か	—×256 西辺側のみ	N 82°W	無	無	不明	不明	8世紀	241→247住→7溝→2区 品
II地区 KT-3 住	方形	470×520	N104°W	無	4	東壁南寄り	無	8世紀	3住→1溝
III地区 4住	正方形	300×300	N103°W	無	無	東壁南側	無	8世紀後半	5→4住 埋没土中から 鉄押約40点出土
III地区 13住	推定 方形	不明×330	N 96°W	—	—	東壁南側	無	8世紀後半	18→13→12住 北側は調査 区域外
III地区 14住	正方形	260×260	N 12°E	無	無	—	—	8世紀	17住→4掘立→14住
III地区 15住	推定 方形	不明×400	N105°W	—	—	東壁南側	無	8世紀	15住→14溝
III地区 16住	隅丸 正方形	不明	N106°W	有	—	東壁南側	—	8世紀	16住→14溝

第14表 熊野堂遺跡平安時代住居一覧表

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	伊・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 23 住	長方形	330×260	N 82°E	無	無	東壁中央や や南寄り	東南隅	9世紀前半	
I地区 26 住	隅丸 方形	340×不明	N 0°W	無	—	調査区域外	—	9世紀前半	
I地区 68 住	不明	不明	N 9°W	有	—	東壁南寄り	—	10世紀前半	
I地区 69 住	—	—	—	—	—	東壁	—	9世紀前半	
II地区 1 住	方形	325×310	N 90°E	無	無	西壁南寄り	—	11世紀	
II地区 2 住	長方形	295×385	N108°E	無	無	南西隅	無	11世紀	17→2住
II地区 3 住	長方形	335×390	N 72°W	—	無	東壁南寄り	無	9世紀第4	3→4住
II地区 4 住	長方形	290×415	N105°E	無	無	南西隅	無	11世紀第2	3→4住
II地区 5 住	方形	380×390	N 85°W	無	無	東南隅	無	平安時代	10→5住→無名土坑
II地区 6 A住	方形	425×465	N 26°E	無	無	東壁南隅	—	平安時代	6 C→6 A→6 B住
II地区 6 B住	長方形か	—×470	N 75°W	無	有	東壁南寄り	東南隅	11世紀	6 C→6 A→6 B住
II地区 7 住	不整 方形	340×315	N 76°W	—	—	東壁南寄り	—	11世紀前半	6 C→12→6 A→7、6 B住
II地区 8 住	長方形	480×680	N 85°W	無	4	東壁中央北 より	南東隅 2基	10世紀第1	10→8住、三彩小皿出土 9住は8住と同一住居
II地区 12 住	方形か	—×345	N 77°W	無	無	東壁南寄り	無	9～10世紀	12→6 B、7住
II地区 13 住	長方形	270×385	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀	21→13住
II地区 14 住	方形か	—×335	N 69°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀	19→14住
II地区 15 住	方形	395×320	N 78°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	30→23→15住
II地区 16 住	方形	315×330	N 73°W	無	5	東壁中央南 寄り	—	9末～10初	17→16住

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	野底穴	時期	備考
II地区 17住	方形	324×360	N 68°W	無	無	東壁中央	東南隅	10世紀	17→16住
II地区 18住	方形か	—×200	—	—	—	—	—	平安時代	北東隅から約2mの範囲を 確認
II地区 19住	方形か	—×340	N 66°W	無	無	東壁中央北寄り	無	9～10世紀	19→14住
II地区 20住	方形か	—×335	N 71°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀	38→30→20住
II地区 21住	長方形	265×368	N 78°W	無	無	東南隅	無	11世紀	55→52→25→21→13住
II地区 22住	長方形	275×385	N 60°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	39→34A・B→22住
II地区 23住	長方形	—×340	N 59°W	—	—	東壁南寄り	カマド右下 か	11世紀第2	30→23→15住
II地区 24住	方形	215×215	N 125°W	無	無	東壁中央	無	9～10世紀	
II地区 25住	長方形	345×420	N 82°W	無	無	東壁南寄り	北東隅	10世紀第4	55→52→25→21→13住
II地区 26住	長方形	295×355	N 89°W	有 全周	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	56→53→44→26住
II地区 27住	方形	325×315	N 79°W	無	無	無	無	11世紀第1	55→48→41→27住
II地区 28住	不明	195×150 北東隅のみ	不明	無	有	—	無	平安時代	全体図で位置だけを報告
II地区 29住	方形	285×240	N 93°W	無	無	無	無	9世紀第3	57→50→46→36、35→29 住
II地区 30住	隅丸 長方形	—×375	N 89°W	無	無	東南隅	無	11世紀	30→20、23→15住
II地区 31住	方形か	235×255	N 53°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀後半	33→32→31住
II地区 32住	不明	不明 南壁の一部	不明	—	—	—	—	平安時代	33→32→31住
II地区 33住	長方形	320×490	N 81°W	無	無	東南隅	南西隅 円形	10世紀	33→32→31住
II地区 34住	方形か	290×—	N 80°W	無	無	—	無	11世紀第1	39→34→22、15住
II地区 35住	方形	270×280	N 83°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀第4	57→46→35、36→29住

第6章 まとめ・分析編

No	形状	規模(cm)	方位	高濶	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 36 住	方 形	255×230	N 92°W	無	無	無	無	平安時代	57→50→46→36→29住
II地区 37 住	長方形	315×425	N 85°W	不明	不明	無	不明	10世紀前半	54→37→20、23→15住
II地区 39 住	不 明	—	不明	無	無	東壁南寄り 痕跡あり	無	平安時代	54→39→34住
II地区 40 住	方形か	100×100	—	—	—	—	—	平安時代	58→53→44→40住
II地区 41 住	長方形	260×—	N 76°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第4	55→48→41→27住
II地区 43 住	長方形	255×305	N 76°W	無	無	東壁南寄り	無	10 世 紀	60→47→59、43→49住
II地区 44 住	方形か	—×320	N116°W	無	無	東壁	無	10 世 紀 か	58、56→53→44→26、40住
II地区 45 住	方形か	—×265 東壁能確認	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀中頃	57→51→45住
II地区 46 住	長方形	255×350	N 68°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀後半	57→50→46→35、36→29住
II地区 47 住	長方形	300×450	N 80°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀後半	60→47→59、43→49住
II地区 48 住	長方形	395×455	N 66°W	無	無	不明	無	平安時代	55→48→41→26、27住
II地区 49 住	長方形	345×445	N 80°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	60→59→49住 金銅製飾金具出土
II地区 50 住	長方形か	425×—	N 92°W	無	無	無	無	9世紀第2	57→50→36、35→29住
II地区 51 住	—	— 東壁能確認	N 75°W	—	—	東壁中央	—	9世紀中頃	57→51→45住
II地区 52 住	長方形	250×385	N 81°W	無	無	東壁南寄り	南西隅	10 世 紀	52→25住
II地区 53 住	長方形か	—	N 71°W	無	無	—	東南隅	10 世 紀 か	56→53→44→26、40住
II地区 54 住	不 明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	平安時代	54→39→38→25→23→21 →15→13住
II地区 55 住	不 明	不明 北東隅のみ	N 95°W	無	無	—	無	10世紀第2	55→25→48→41住
II地区 56 住	長方形か	310×	N 86°W	無	無	—	無	10世紀初頭	56→53→44→26住

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炬・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 59 住	方形	290×300	N 77°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀前半	60→61→47→59、43→49住
II地区 64 住	方形	265×300	N 90°W	無	4	東壁南寄り	東南隅 槽円形	10世紀第1	66→65→64住
II地区 65 住	長方形	255×375	N 91°W	有 全周	無	無	—	10世紀	66→65→64住
II地区 66 住	長方形	325×380	N 78°W	不明	不明	東壁南寄り	不明	10世紀第1	66→65→64住
II地区 69 住	長方形	305×415	N118°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀前半	
II地区 70 住	方形	255×305	N 79°W	無	無	東壁南寄り	東南隅 円形	10世紀前半	76→70住
II地区 72 住	長方形	305×385	N 80°W	無	無	東壁南寄り	東南隅 円形	10世紀第2	
II地区 73 住	長方形	255×360	N 81°W	有 全周	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	74→73住、規模は周溝基部で計測
II地区 74 住	長方形	280×390	N 92°W	無	無	無	無	9世紀第2	74→73住
II地区 76 住	方形	360×390	N 90°W	無	無	東壁南寄り	東南隅 槽円形	9世紀後半	76→70住
II地区 78 住	方形か	—×320 カマドのみ	N105°W	—	—	—	—	9世紀前半	77→71→78住
II地区 81 住	長方形	430×620	N 87°W	有	無	東壁南寄り	東南隅	9世紀後半	
II地区 83 住	長方形か	不明	N 90°W	無	無	東壁南寄り か	無	10世紀第2	111→109→101→82→100 →83住
II地区 84 住	方形	290×340	N 93°W	有 全周	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀前半	堀出土
II地区 86 住	長方形	345×415	N 81°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀前半	117→119→118→115→ 110→86住
II地区 87 住	長方形	360×290	N106°W	無	無	東壁南寄り	東南隅 方形	9世紀前半	115→87住 銅棒出土
II地区 88 住	長方形	250×375	N 90°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀前半	96→116→90→98、88住→ 52土坑
II地区 89 住	長方形	245×375	N 84°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	151→147→89住
II地区 90 住	長方形	225×355	N 81°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀第4	

第6章 まとめ・分析編

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 91 住	長方形	270×350	N 78°W	—	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀前半	113→93、94→91住
II地区 92 住	不明	310×350	不明	—	—	東壁	—	9世紀か	カマドのみ残存
II地区 93 住	長方形	265×350	N 76°W	無	無	不明	無	9世紀第3	91住に同様
II地区 94 住	方形	250×285	N 79°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	9世紀	91住に同様
II地区 95 住	方形	320×380	N 79°W	不明	不明	東壁中央	不明	9世紀後半	95住→14溝
II地区 97 住	方形	305×345	N 91°E	無	無	西壁南寄り	無	10世紀第2	119→118→116→86→97住
II地区 98 住	方形か	×250	N 74°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第1	116→112→98→88住
II地区 99 住	長方形	275×355	N 79°W	無	無	東壁中央	東南隅	10世紀後半	115→112→98→88→99住
II地区 100 住	長方形	274×360	N 85°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第1	111→109→101→82→100→83住
II地区 102 住	長方形	225×317	N 94°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀か	110→108→87、102住
II地区 103 住	方形か	—	N 80°W	無	無	東壁	無	10世紀第2	106→105→104→103住
II地区 104 住	方形か	350×—	N 89°W	無	無	—	無	10世紀	103住に同様
II地区 107 住	不明	—	N 83°W	無	無	—	無	9世紀第2	106→105→107→103住
II地区 112 住	方形	245×272	N 90°W	無	無	東壁中央	東南隅	9世紀第1	115→116→112→87→98 88→99住
II地区 113 住	長方形	×270	N 85°W	無	無	東壁中央	無	9世紀後半	113→93、94→91住→51土 坑
II地区 120 住	長方形	258×334	N 82°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀第2	153→152→120住
II地区 121 住	長方形	270×435	N 75°W	無	無	東壁中央	無	10世紀第2	121→126、165住の中で最 も新しい
II地区 122 住	方形	248×258	N 81°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	123→122→121住
II地区 123 住	長方形	298×377	N 98°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	123→122→121住

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炬・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 124住	長方形	283×342	N116°W	無	無	東壁中央	無	平安時代	126→125→124→123→ 122→121住
II地区 125住	長方形か	190×—	N 60°W	不明	不明	不明	不明	平安時代	124住に同様
II地区 127住	長方形	280×337	N 69°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第4	134→129→143→127住
II地区 129住	長方形	295×330	N 81°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	9世紀第4	160→134→131→130→ 129→143→127住
II地区 130住	方形	377×400	N 80°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	129住に同様
II地区 131住	長方形	250×365	N 72°W	無	無	無	無	9世紀	129住に同様
II地区 132住	長方形	270×347	N 74°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀第1	237→132住
II地区 135住	長方形	330×245	N 64°W	無	無	東壁南隅寄 り	無	11世紀第2	137→136→135住
II地区 138住	長方形	221×283	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀第1	150→149→138住
II地区 139住	方形	278×276	N 88°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀	148→139住→58→57土坑
II地区 140住	方形か	—	N103°W	無	無	—	無	平安時代	140→131→130→123,129 →143住
II地区 141住	長方形	285×330	N 70°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第3	164→142→141住
II地区 142住	方形	287×290	N 71°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀前半	141住に同様
II地区 143住	長方形	250×373	N 71°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第3	134→129→143→127住
II地区 148住	長方形	337×230	N 85°W	不明	不明	—	不明	10世紀	148→139住
II地区 149住	長方形	332×265	N 85°W	—	—	東壁南寄り	東南隅	9世紀第3	150→149→138住
II地区 150住	長方形	270×—	N 96°W	無	無	—	無	9世紀前半	149住に同様
II地区 152住	長方形	247×336	N 93°W	無	無	東壁中央	無	10世紀第1	153→152→120住
II地区 156住	長方形	257×375	N 70°W	無	無	東壁南寄り	東南隅か	11世紀第1	157→148→156住

第6章 まとめ・分析編

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 157住	長方形	—×405	N 73°W	無	無	—	無	10世紀前半	161→158→157→148→156住
II地区 158住	方形	328×330	N 80°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀第3	164→163→161→158→157住
II地区 159住	長方形	285×403	N 69°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	164→163→159住
II地区 161住	長方形	328×370	N 80°W	無	無	東壁中央	東南隅	平安時代	164→163→161→158→157住
II地区 163住	長方形	295×335	N 93°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀第2	164→163→161→158、159住
II地区 167住	長方形	400×525	N 104°W	無	無	東壁中央	東南隅	9世紀第3	4区4→166、168→4区5→167住
II地区 169住	方形	290×340	N 81°W	無	2	東壁南寄り	東南隅	11世紀	170→169住→118土坑
II地区 182住	長方形	290×406	N 61°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	11世紀第1	31溝→147土坑→182住
II地区 183住	方形	—×306 西側片	N 102°W	無	無	不明	東南隅	平安時代	
II地区 184住	方形	198×296	N 91°W	無	有	東壁中央	東南隅	10世紀前半	186→185→197→184住
II地区 187住	方形	180×248	N 85°W	有	無	東壁南寄り	東南隅	平安時代	214→187住
II地区 188住	隅丸 長方形	294×372	N 73°W	有 全周か	—	東壁南寄り	東南隅	10世紀	197→198→4区21→188住
II地区 189住	長方形	240×330	N 65°W	無	無	東壁南寄り	—	10世紀第3	214→189住
II地区 190住	長方形か	—×380 西辺のみ	—	—	—	—	—	平安時代	185→197→190住
II地区 195住	長方形	264×204	N 89°W	無	無	東南隅	無	11世紀前半	214→202→201→195住
II地区 196住	方形	238×260	N 63°W	無	2	東壁南寄り	南西隅	11世紀前半	214→196住
II地区 198住	長方形	288×352	N 79°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀第3	199→197→198→4区21→188住
II地区 200住	方形	333×380	N 91°W	無	1	東壁南寄り	東南隅	11世紀前半	218→4区28→219→200住
II地区 201住	長方形	270×360	N 70°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	219→202→4区31→201→195住

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 202 住	長方形	282×394	N 86°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀前半	201住に同様
II地区 203 住	不明	—	N100°W	—	—	東壁	—	平安時代	カマドのみ確認 219→203→202住
II地区 205 住	不明	— カマドのみ	N110°W	—	—	東壁	—	平安時代	206→205→3区15住
II地区 222 住	不明	— 東南隅のみ	—	—	—	—	—	平安時代	
II地区 223 住	方形	285×—	N 75°W	無	無	東壁南寄り	西南隅	11世紀第2	227→226→223住
II地区 226 住	方形	300×300 西辺隅のみ	N 69°W	無	無	不明	不明	平安時代	227→226→223住
II地区 227 住	方形か	— 西辺側のみ	N 73°W	無	無	—	—	平安時代	227→226、239→223住
II地区 230 住	方形	—×350	N 91°W	無	(2)	東壁南寄り	東南隅	10世紀第3	108→87→230住
II地区 231 住	方形	260×340	N102°W	有 全周	3	東壁南寄り	東南隅	10世紀第2	
II地区 233 住	長方形か	—×325 東側片	N 83°W	無	無	東壁中央	無	平安時代	
II地区 235 住	方形	376×392	N 83°W	無	無	東壁中央寄 り	無	11世紀前後	238→235住→158土坑
II地区 237 住	方形	250×295	N 91°W	無	無	東壁南寄り	南西隅	10世紀	155、238→237→132住
II地区 239 住	長方形	212×306	N 65°W	有 全周か	無	東壁南寄り	無	10世紀第4	3区8→227→239住→3 区2溝
II地区 248 住	長方形	396×316	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀第1	257→248住→39溝→206 土坑
II地区 249 住	長方形か	—×450 西辺側のみ	N 84°W	—	無	—	無	9末～10初	256→249→250住
II地区 250 住	長方形	342×288	N 63°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	11世紀第1	256→249→250住
II地区 251 住	方形か	— 南西隅のみ	N 65°W	無	無	南西隅	不明	11世紀前半	259→251住
II地区 252 住	方形か	—×370 西辺側のみ	N 68°W	不明	不明	南西隅	不明	平安時代	252→256→249→250住→ 1溝
II地区 253 住	長方形	336×302	N 73°W	無	無	東南隅	南壁カマド 寄り	11世紀第2	252→256→250→253住

第6章 まとめ・分析編

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 254住	長方形	273×320	N 66°W	無	無	東壁南寄り	不明	11世紀	38溝→254住→1溝
II地区 255住	長方形か — 南西隅のみ	—	N 80°W	不明	不明	不明	不明	10世紀後半 以降	255住→196土坑
II地区 256住	長方形	242×283	N 72°W	無	無	東壁南寄り	不明	9世紀第4	252→256→250→253住
II地区 257住	長方形	264×328	N 74°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第2	257→248住→39溝→206 土坑
II地区 258住	長方形	—×318	N 60°W	無	無	不明	不明	11世紀第1	261→259→258住→37溝
II地区 260住	方形か — 西辺側のみ	—×336	N 70°W	無	不明	不明	不明	平安時代	260住→40溝
II地区 262住	不整 長方形	—×310	N 55°W	無	無	—	—	平安時代	262住→40溝
II地区 3-2住	長方形	260×320	N 56°W	無	無	東壁南隅 新田2基	南西隅	10世紀	3区6→3区1→3区2 住
II地区 3-7住	方形	290×305	N 74°W	無	4	東壁南隅	無	9末～10初	3区6→3区5→3区7 住
II地区 3-9住	長方形	342×304	N 72°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前後	3区12→3区10→145→ 3区9住
II地区 3-15住	長方形	273×—	N 58°W	有 全周か	不明	不明	不明	9世紀か	206、3区4住→3区3 溝、3区16→3区15住
II地区 3-16住	方形か — 北西隅のみ	—	N 58°W	—	—	—	—	平安時代	206、3区4住→3区3溝 →3区16→3区15住
II地区 3-17住	不明	—	N 73°W	—	—	—	—	平安時代	3区3溝→3区17住→2 溝
II地区 4-3住	長方形	367×498	N 95°W	無	2	東壁南寄り	東南隅	9世紀第3	4区4→4区5→4区3 住
II地区 4-7住	長方形	293×387	N 83°W	有 全周	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀第3	4区6住→1方周墓→4 区8→4区7住
II地区 4-8住	隅丸 方形	235×259	N113°W	無	3	無	北東隅	平安時代	4区6→4区8→4区7 住
II地区 4-10住	長方形	295×428	N 95°W	無	2	東壁南寄り	無	11世紀第1	4区14、4区11→4区10 住
II地区 4-17住	長方形	255×395	N 84°W	無	無	東南隅寄り	東南隅	11世紀前半	4区19→4区18→4区17 住
II地区 4-21住	長方形	246×394	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀後半	199→4区21→188住

第1節 熊野堂遺跡の住居変遷について

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
Ⅱ地区 4-27住	長方形	265×348	N 97°W	有 全周	無	東壁南寄り	南西隅	11世紀前半	4区29→4区26→4区24 →4区27住
Ⅱ地区 4-31住	方台形	390×420	N 90°W	無	1	東壁中央	無	10世紀第4	4区29→4区26→4区24 →4区30→4区31→4区 27住
Ⅱ地区 KT-1 住	方 形	395×365	N 92°W	無	無	無	無	10世紀前半	KT-3住→1溝→KT -1→KT-2住
Ⅱ地区 KT-2 住	長方形	320×245	N 85°W	無	無	東南隅	東南隅	10世紀後半	KT-3→KT-2住→2 溝→5土坑
Ⅱ地区 KT-4 住	方 形	310×272	N 73°W	無	2	東壁南寄り	北西隅	10世紀後半	
Ⅲ地区 1住	不 整 長 方 形	240×330	N 89°W	無	無	東壁南側	無	10世紀後半	
Ⅲ地区 10住	推 定 長 方 形	不明×280	N 97°W	—	—	東壁北側 袖無、石組	無	10世紀後半	
Ⅲ地区 11住	不 明	不 明	N 82°E	—	—	—	—	10世紀	
Ⅲ地区 12住	推 定 方 形	不明×280	N 83°W	—	—	東壁南側 粘土地、瓦 石による補 強	—	10世紀後半	

第15表 熊野堂遺跡時代不明住居一覧表

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 24 住	不整隅丸 長方形	320×225	N 22°E	無	無	東壁中央に ピットあり	無		ピット内に炭化物と焼土 灰が堆積する
I地区 25 住	隅丸 方形	×310	N 65°E	—	—	—	—		27→26→25住 東側は調 査区域外
I地区 46 住	隅丸 長方形	390×310	N 20°E	—	—	東壁南寄り	東南隅か		
I地区 47 住	—	318×300	N 82°E	無	1	東壁中央	—		
I地区 62 住	—	—	—	—	—	—	—		62住→2号特殊井戸、カ マド先端部のみ確認
II地区 126 住	—	東壁一部確 認	—	—	—	—	—		126→125→124→123→ 122→121住
II地区 165 住	—	—	N110°W	—	—	—	—		165→126→125→124→ 123→122住
II地区 206 住	—	— 東壁のみ	—	—	—	—	—		206→205→3区15住
II地区 207 住	—	北西隅のみ	—	—	—	—	—		3区3溝→207住
II地区 216 住	—	南壁の一部	—	—	—	—	—		218→216→219住
III地区 17 住	推定 長方形	290×230	N 8°E	—	—	南壁中央に 焼土がある	—		17住→5掘立→14住
III地区 18 住	推定 方形	不明×480	N105°W	—	—	推定東壁南 寄り	—		18→13→12住 北側は調 査区域外
III地区 20 住	—	不 明	—	—	—	—	—		20住→3井戸 南西隅を 確認
III地区 22 住	—	—	N 89°W	有	—	—	—		北東隅付近だけを確認

第2節 弥生時代磨製石鏃の製作工程について

女屋和志雄

1 はじめに

熊野堂遺跡からは、弥生時代中期から後期の住居跡が66軒確認されている。今回報告したII地区では中期7軒、後期36軒の合わせて43軒があり、集落の中で南の一群を構成している。

II地区の弥生時代の遺構からは、磨製石鏃の製作に関する未製品や素材となりうる剥片、加工の跡を示す微細な剥片類が合わせて約40点出土している。出土状態は、5軒の住居で製品や剥片がみられ工房と判断したが、製作した場を示す加工台や敲打具、砥石などを必ずしも共存するものではない。また、その数は、砥石や礫器だけの住居を含めると10軒を超す可能性が高い。製作は、資料や道具組成からみて専業とする程ではなく、住居数軒の小群単位で集落内への供給を目的としたものと考えられる。ここでは、関連した資料を集成して製作工程を復元する。

2 製作工程について

製作工程は、遺跡への素材搬入後、「1、分割→2、研磨→3、穿孔・仕上げ」の大別3つの工程に復元される（第40図）。以下、工程別にその特徴をのべる。

「素材」は群馬県西南部を東西に横断する古生代末から中生代の地質構造線である「三波川帯」中に産出する緑色～灰緑色を基調とした緑色片岩や珪質準片岩が使用されている。この石材は、該期の高崎市新保遺跡・前橋市清里庚申塚遺跡・甘楽町白倉下原遺跡（註1）にてらしても、ほぼ同様であることから凡その時代性、地域性として理解される。選材の理由は、「結晶質片岩特有の簡単に剝離しやすく板状に割ることができ、軟質であるために加工が容易なこと」にある。その供給は、遺跡内の砥石や礫器の中でも、同じ三波川帯から産出する「緑色片岩類」が多く用いられていることからすると、石器自身の素材と合わせた供給ルートを通じて搬入されたものである。

搬入時の形状は、加工等の痕跡からすると「板状に剝離された手のひら大のもの」で、既に加工意図を持ってある程度の成形をされていたと考えられる。大きさは、最大例が、238住-9（第40図1）の6.2×3.4cmの長方形、厚さ0.6cmで、この半分程で両端に折断面を持つものが150住、34溝（第40図2～4）で出土している。色調や肉眼観察では、製品を含めて少なくとも3種類の石質が認められる。

1 灰緑色系で堆積方向に縦縞がみられるもの

115住-9・10・11、136住-4、150住-1、238住-10、4区12住-14

2 銀灰緑色系

238住、4区19住-17・18

3 青灰色系

115住-8、171住-12、197住-2、218住-4、4区19住-16・19、4区28住-10・11

以上が代表的なものである。上記の観察からわかることは、「遺構毎に素材が特定されず、製品と剥片との関係が一致しないこと、青灰色系のものに有孔の製品が多いこと」がわかる。前者は、115住や4

区19住のように混在した例からすると、分業の可能性よりは限られた素材を有効に利用した結果と考えられる。後者は、製品とした中でも孔の有無により製作段階が異なるか、無孔のものは側面や端部の成形が不十分なことからすると未製品とも考えられる。

【分割】は、素材を割って基本的な剥片をえる工程1から、その剥片の形状を整える工程2の順序で行われる。基本的には、片岩特有の板状に剝離しやすい性質を利用して行われるが「折断技法」と「施溝折断技法」の2つの方法がある。

【折断技法】は、工具や工作台などの角に押し当てて折り取るもので、敲打や分割用の溝を伴う例もあるが石の堆積による目がそのまま利用されている。工程では、主に研磨前段階の基本的な形状を得るための荒割りにみられ、第40図の3～7が該当する。18～20は、その折断された一方の剥片である。

【施溝折断技法】は、本遺跡の製作上の特徴で前者を効率よく確実にしたもので、折断する箇所にあらかじめ溝や筋を施すものである。工程では、主に板状に荒割された剥片の成形を目的とし、第40図の1や2、特に11にはよく痕跡を残している。施溝は、3種類がある。

- 1 「擦切様の直線的で幅広なもの」23住一9（第40図1）を例にとると、端部の厚さ1mm強で直線的な刃部を持つ工具が使用され、針め方向から素材の半ばまで擦り切る様に施溝することで折断をより確実、容易にしている。
- 2 「長さ1cm前後の部分的で分割用の目印痕と考えられるもの」4区19住一7（第40図11）では、両側端と下端部の表裏に深さを異にした筋が施されている。類例は、製品の中にも見られるが概して研磨により消失する。
- 3 「幅1mm以下の細い条痕状のもの」これは、金属の刃先で直線や斜交して切り付けたような状態をさすが、敲打による表面の剝落を防ぐ意図であろうか。

工具は、第41図の9に示した石庖丁の様なものも考えられるが鋭利な痕跡からすると金属器であろう。

【研磨】は、成形と仕上げを目的として全面に施される。第40図8～13資料としたが、8・12・13は製品の可能性がある。順序は、表裏両面を板状に磨き出した後に周縁をめぐる。表裏は、稜線を消すことと厚さを一定にすることが目的で、方向は主に長軸に対して直交から斜交である。周縁は、側面から先端のとき出し、さらに下端面への順序が一般的である。研磨痕は、太くて粗い条痕様のもの（研磨A）と細くて密に平行線状のもの（研磨B）があり、砥石の精粗と工程の違いを示している。

砥石は、第41図の1～5・7などが相当する。石質は、2～4が砂岩、1・5・7は粗粒安山岩である。砂岩系は、研磨A・Bに相当する工具で全体に平滑な研磨痕がみられ、手持ち用でも3と4は長方形に成形されている。安山岩系は、痕跡からすると敲打具の機能が主体の万能具で住居内の道具組成の一つである。

【穿孔】は、片面と両面の双方があり一定はしていない。4区19住一18（第40図25）は、平玉の穿孔途中のものであるが、痕跡からすると径1mm弱の棒錐を使用している。

【工具】本遺跡の住居では、敲打痕や擦痕を持つ礫器の出土頻度が高く、道具組成の特徴といえる。工具は、その中に含まれて機能を共有したと考えられ、区別はわずかしいが第41図に集成したものが

ある。1～5・7は先述した様に砥石、8と9も擦り面を持ち砥石の機能を持っていた可能性がある。6は、下端面に敲打痕と赤色顔料の付着物があり、その生産工具で砕くか擦り潰す用途である。赤色顔料の付着物は、8の擦り面にもみられる。10は、安山岩の工作台で、図示した面に固定のための3ヶ所以上の打ち欠きと表裏に對の凹み穴がある。この穴は、1や8にもみられ、特に8の周縁には敲いた跡が明瞭に残っている。

【製品】の特徴は次のとおりである。

- 1 製作された器種は、鉄鏃か銅鏃を模倣した石鏃と平玉がある。製作工程の復元では、主体は石鏃にあり、平玉はその分割時の剥片を利用している。
- 2 石鏃の形態は、孔の有無と作りの精粗で分類した。
 - A類 有孔・柳葉形で断面が紡錘状の細身のもの（第40図14～16）
 - B類 有孔・変五角形で先端に尖りをもつもの（ // 17）
 - C類 B類に近い形状で無孔のもの（ // 8）
 - D類 無孔・変五角形で下端にえぐりをもたないもの（ // 13）
- C・D類は、穿孔もなく作り方も粗雑なことから未製品とも考えられるが、11と12は同じ4区19住から出土し、I地区16住やその他の遺跡出土例（註2）からみても製品での形態差であろう。

3 遺構について

工房と判断したのは、未製品や剥片の出土を理由とした。明確に遺物が伴う住居は、115住、218住、238住、240住、4区19住、の5軒がある。このほかにも、道具組成の特徴では155住や164住など数軒に可能性がある。時期は、いずれも後期樽式の後半である。この時期は、谷頭をはさんで南北2つの住居群が形成され、中期後半から継続する集落が北へと発展した最盛期といえる。5軒は、工房としての製作の場や特定の道具の出土状態は認められず、形状や規模、内部の様子のみでほかの住居と共通している。遺構分布の上で、南の住居群に限定される点に特徴がある。

- 115 住 長方形 470×350cm 石鏃のA・B類と折断された剥片の各2点が壺・甕・台付甕・高杯などとともに出土。北東主柱穴と脇にあるピット周囲で集中する。
- 218 住 長方形 360×480cm以上 石鏃の研摩工程と剥片が礫器と出土。
- 238 住 限丸長方形 422×532cm 石鏃C類と施溝折断痕を持つ剥片が第40図4・7・8・10と出土。道具組成にまともがみられるが、4を除いて2号炉内から出土したもので8の付着物からすると赤色顔料の生産工具とも推定される。
- 240 住 限丸長方形 360以上×606cm 折断された剥片と礫器が出土。壺が10個体以上と注口土器、土製勾玉、磨製石斧などが共伴する。
- 4区19住 限丸長方形 558×670cm 石鏃A・B類製品と折断された剥片に平玉未製品が砥石とともに出土。高杯が多く、壺などを模倣したミニチュア土器が共伴する。工作の場は南西隅と推定される。

4 まとめ

本遺跡での磨製石鏃の製作は、次の特徴がある。

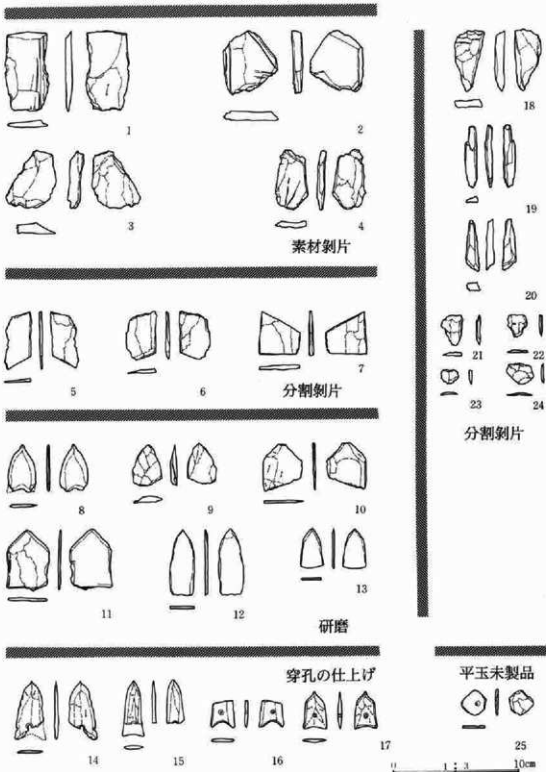
- 1 製作は、専業とする程ではないが集落の南の住居群だけに限定され、集落内部での供給を目的とした小規模なものである。
- 2 時期は、集落の最盛期である後期樽式後半に限定される。
- 3 工程は、「分割→研磨→穿孔、仕上げ」の3つに分けられる。分割には「折断」と「施溝折断」の2つの技法があり、中でも「溝や筋をほどこすこと」に特徴がある。素材は、搬入時にある程度成形された「珪質準片岩や緑色片岩」の結晶質片岩類を選材し、剥片の一部では平玉が製作され、素材の有効利用がはかられている。
- 4 道具組成は、住居内で多くみられる砥石や礫器があり、工具は其中に含まれて機能を共有して製作したと考えられる。同時に、類似した工程や礫器の付着痕からすると、赤色顔料の生産が行われていた可能性がある（註3）。

註1 新保遺跡は、中期後半から後期まで継続する集落で「珪質準片岩や緑色片岩」を使用した磨製石鏃が166・173・289住などで出土している（財・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか「新保遺跡II」1988）。清里・庚申塚遺跡（1981）。白倉下原遺跡は、珪質片岩などを使った磨製石鏃の工房跡が調査されている。熊野堂遺跡と同様に2群のうち、一方の住居群に工房があるという。

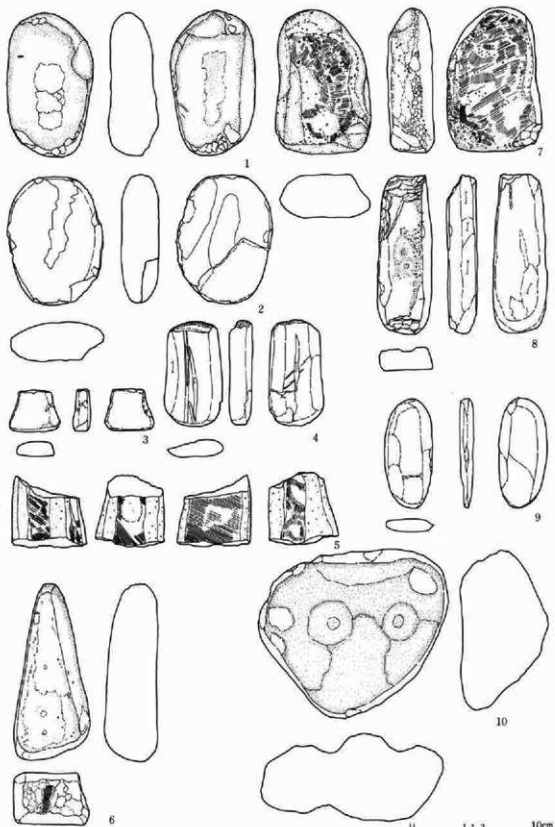
註2 I地区の16号住ではB類とD類が出土し、新保遺跡173住ではC類が出土している。

註3 本遺跡のI地区では、9・10・13・15・16号の各住居で赤色顔料が出土し、その生産と赤色塗彩土器の製作が遺跡内で推定されていた。II地区では、5軒の住居で磨製石鏃が製作され、礫器の付着物や類似した製作工程から、赤色顔料の生産も行っていた可能性がある。これら遺物の生産や製作は、集落内の供給を目的とし集落が南北に発展する後期段階での南の居住域の卓越性と中期後半以来の継続性を背景にして行われたものであろう。

○ 素材の遺跡内搬入



第40図 弥生時代磨製石鏃の製作工程図



第41図 弥生時代磨製石器の製作道具

第3節 古墳時代前期の土器について

友廣 哲也

はじめに

群馬県では古墳時代前期の土器として弥生時代後期樽式土器と全く異なった系譜をもつ土器として石田川式土器という土師器の一群がある。この土師器は東海伊勢地域に祖形をもつ土器群であり、石田川遺跡出土遺物をもって命名された土師器である⁽¹⁾。この外来土師器と在地弥生時代樽式土器の接点はほとんど認められないことが多かった。しかし、近年の発掘事例により樽式土器と土師器の共存する事実が増加してきた。熊野堂遺跡もこの例に漏れず土師器と樽式土器の共存例が認められた。本文では周辺の遺跡を含めた中で出土土師器の位置づけを試みたい。

遺構出土事例（第42図・43図）

熊野堂遺跡では外来土師器が多数検出されている。このうちその系譜が認められる遺構を取り上げてみたい。

熊野堂遺跡Ⅲ地区8号住居址⁽²⁾

No.1 在地樽式土器、No.8 伊勢地域に系譜が求められるS字状口縁台付甕が共存している。No.1 S字状口縁台付甕の特徴は口縁部は直立ぎみで上段・下段とも外反し上段は短く先端はやや尖る、口縁部下段には刺突文が認められる。肩部には横線が施されている。赤塚次郎氏伊勢地域のS字状口縁台付甕編年ではA類に比定されよう⁽³⁾。

熊野堂遺跡Ⅲ地区9号住居址

本住居址からは樽式土器は共存せず土師器の一群である。No.4 パレス壺の破片であり文様の特徴は平行線文、へら描山形文が施される。口縁部は欠損しているが文様構成の特徴は浅井和宏氏分類のE段階にあたる⁽⁴⁾。No.11高環は坏外面下部に弱い稜線をもつ伊勢地域元屋敷式にその系譜を求めることができる。

熊野堂遺跡9号住居址

No.1 樽式土器は頸部に3連止めの縷状文が巡る。樽式土器終末期にあたる。

4区15号住居址

No.6 は伊勢地域では直口壺、No.7、8 は小型の高環No.4 は単口縁台付甕の脚部である。

4区18号住居址

No.6 は樽式土器台付甕と土師器が共存している。

209号住居址

No.1 は畿内系二重口縁壺の系譜が認められる。No.5 は樽式土器高環である。

以上熊野堂遺跡出土遺構を取り上げてみた。県内では樽式土器から変化する土器は認められるものの、大部分は外来に系譜が求められる土師器である。さらに周辺の遺跡をみたい。

熊野堂遺跡の南方烏川沿いに下佐野遺跡がある⁽⁵⁾。

I地区、B区16号住居址

№1、2 S字状口縁台付甕、№3長頸埴が共伴し、小型高坏が出土し、№4は口縁部が直線上に外傾し下部には縦凹線が巡る、頸部は強くくびれ北陸地方月影式に系譜を求めることができる。共伴するS字状口縁台付甕は赤塚氏のB類に比定されよう。

下佐野遺跡Ⅰ地区C区10号住居址

№1、2、3、4、5のS字状口縁台付甕、№6小型埴、№7は口縁部の特徴が北陸月影式に求めることができる。

熊野堂遺跡の土師器は8号住居址出土S字状口縁台付甕は赤塚A類、9号住居址高坏は各々元屋敷式段階に比定される。北陸地方では月影式は畿内庄内式に並行するか、やや先行するとされており、東海、北陸それぞれの出自の地域での並行の関係を指摘することができる。つまり熊野堂遺跡、下佐野遺跡出土土師器は畿内地域庄内式段階との並行が位置づけられる。

次に県内他遺跡での外来土器との共伴関係を比較してみたい。前橋市荒砥島原遺跡A区1号周溝墓から畿内庄内式系布留式の壺が出土している。荒砥北原遺跡⁽⁷⁾1号周溝墓からは二重口縁壺が多数検出されこれの中には元屋敷式に系譜の求められる高坏が共伴している。熊野堂遺跡Ⅲ地区9号住居址出土高坏と並行が認められる。渋川市有馬遺跡⁽⁸⁾82号住居跡、同211号住居跡からは北陸月影式土器が樽式土器と共伴している。再度月影式の年代観を見るまでもなく樽式土器後期段階は月影式土器を媒介として庄内式の段階を当てる事ができる。また庄内式の段階には群馬県に外来の土師器が搬入したことを示している。

上記以外の月影式の土器が検出された遺跡は前橋市内堀遺跡⁽⁹⁾H15号住居跡、高崎市新保遺跡⁽¹⁰⁾70・125号住居跡があり樽式土器と共伴している。内堀遺跡に隣接する上綱引遺跡⁽¹¹⁾周溝墓からは月影式甕の5の字口縁部に樽式土器の文様である波状文が施された土器が検出されている。

筆者は群馬県古墳時代前期の土器群を3期に分けている。詳細は別稿に譲るが略述すると第1期は庄内新段階布留式古段階式に並行する前掲の遺構の土師器である。第2期は小型埴の出現を画期としている。第3期は小型埴を主流とし樽式土器の系譜が消失していく段階を想定している。

下佐野Ⅰ地区C区10号住居址では月影式壺と小型埴の共伴が見られ第1期終末第2期への過渡期にある。県内を見ても月影、元屋敷、庄内式の並行関係が認められ樽式土器後期の段階に外来土師器が搬入したことが理解される。

このように熊野堂遺跡では外来土師器の搬入後樽式土器の系譜の消失が早いことが理解される。では他の地域での樽式土器の変化を見てみたい。赤城村見立瀬井遺跡⁽¹²⁾には樽式土器の系譜を色濃く残しながら土師器化の過程上にある一群の土器が認められる。樽式土器が土師器へと変質する過程の中では土師器の影響を受けることが前提にある。井野川流域では樽式土器の系譜が消失した段階にあたり下佐野遺跡では土師器が盛行する段階にあることが理解される。同様に前橋市堤東遺跡⁽¹⁴⁾1号周溝墓出土遺物にも樽式土器の系譜が強く残る土器が認められる。このように県内では地域を異にして樽式土器の系譜が残る地域と早く消える地域が認められるが、並行関係は堤東遺跡1・2号周溝墓を始めここに上げた遺跡は小型埴の出現以前の段階にある。

S字状口縁台付甕

古墳時代前期に比定される石田川式土器の特徴としてこの器種が上げられ、石田川式土器を特徴づ

けている。S字状口縁台付甕が古墳時代前期の甕の主体をなしてはいる。田口一郎氏は元島名将塚塚古墳報告書考察のなかでS字状口縁台付甕と伊勢型壺の検討の上に伊勢地方に母集団をもつ入植説を提唱された。⁽¹⁵⁾熊野堂遺跡の土師器には単口縁台付甕も出土しており、同様な例は新保遺跡ではS字状口縁台付甕を出土する住居跡と並行する形で155号住居跡での甕はS字状口縁台付甕ではなく単口縁台付甕が主体をなしている。また月影、庄内、元屋敷式と並行する初期段階には量的にはS字状口縁台付甕は勝ってはいない。また石田川遺跡出土土師器にも単口縁台付甕は共伴しており、特にS字状口縁台付甕をもつ人間のみが移動して来たことも理解できない。しかし、群馬県内ではS字状口縁台付甕が比較的長い時間幅をもって使われた事と理解される。ではS字状口縁台付甕の変化を見たい。田口氏はS字状口縁台付甕の肩部の横線の有無に着目され横線の消失する段階を4世紀中葉に設定された。熊野堂遺跡では氏の1類（赤塚氏のA類）S字状口縁台付甕が樽式土器と共伴している。また下佐野遺跡10・16号住居址では月影式と共伴するS字状口縁台付甕が認められ肩部の横線をもつものとともに横線の消失したS字状口縁台付甕が既に共伴出土している。肩部に横線が消える段階は月影式との並行関係の結果では更にさかのぼることが理解される。熊野堂遺跡8号住居址出土S字状口縁台付甕は赤塚氏A類、他のS字状口縁台付甕は高坏等の共伴例から元屋敷式の年代観に並行するものと思われる。さらに、横線の消失の事実は単口縁台付甕と並行して使用しながらも量的にややまざるS字状口縁台付甕が搬入後早い時期、搬入と同時に言えるほど早く変質を始めたことになる。これは伊勢地域の母集団を意識した伝統を維持しているとは解釈できない。S字状口縁台付甕は群馬の地に伝播され、ここで独自の変質をはじめるのである。これは在地の弥生時代の人々の土師器の取り込みの過程の結果生じるものであろう。

まとめ

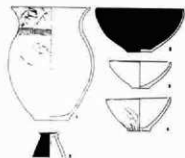
熊野堂遺跡出土土器の位置づけを行ってきたが井野川を中心とした地域では土師器のとりこみが早いことが理解できた。またS字状口縁台付甕の年代観にも触れた。8号住居跡出土S字状口縁台付甕は赤塚A類、横線消失のS字状口縁台付甕の一部は元屋敷、月影式と並行し、従来の編年観はさらにさかのぼることが理解され、この結果熊野堂遺跡出土土師器は庄内新段階、布留古段階、元屋敷、月影式と並行することが妥当であるとしておく。

註

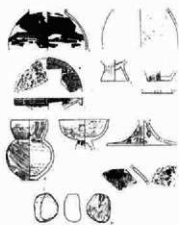
- (1) 尾崎喜左雄 今井新次 松島栄治 「石田川」 石田川刊行会 1968
- (2) 坂井隆 「熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨登遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (3) 赤塚次郎 「『S字壘』 賞書85」 年報 昭和60年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986
- (4) 浅井和宏 「く宮廷式土器」について」シンポジウム欠山式土器とその前後
第3回東海埋蔵文化財研究会 1986
- (5) 飯塚卓二 井川達雄 「下佐野遺跡」 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 東日本旅客鉄道株式会社 1990
- (6) 徳江秀夫 「瓦葺島原遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (7) 石坂茂 「寛政北原遺跡・今井神社古墳群・寛政青柳遺跡」 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (8) 佐藤明人 「有馬遺跡Ⅱ」 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (9) 園部守央 加部二生 「内郷遺跡Ⅱ」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1989
- (10) 佐藤明人 「新保遺跡Ⅱ」 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- (11) 上綱引遺跡 第三回三縣彌生時代シンポジウム彌生終末期の土器 4世紀の土器
群馬県考古学談話会 1982
- (12) 友廣哲也 「群馬県における古墳時代前期の土器標相」 群馬考古学手帳 Vol. 2 群馬土器観会 1991 (5月発行予定)
- (13) 都丸肇、茂木允規 「見立廻井遺跡・見立大久保遺跡」 赤城村教育委員会、群馬県教育委員会 1985
- (14) 松田猛 「境東遺跡」 群馬県教育委員会 1985
- (15) 飯塚恵子 田口一郎 「元島名将軍塚古墳」 高崎市教育委員会 1981



熊野堂遺跡II地区8号住居址



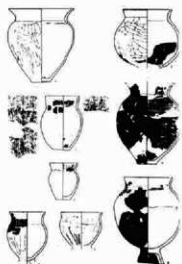
熊野堂遺跡I地区9号住居址



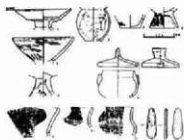
熊野堂遺跡II地区4区15号住居址



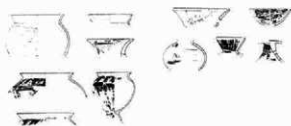
熊野堂遺跡II地区9号住居址



熊野堂遺跡II地区4区18号住居址



熊野堂遺跡II地区209号住居址



下佐野遺跡I地区B区16号住居址

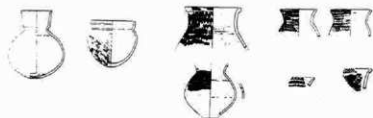
第42図 古墳時代前期の土器



下佐野遺跡I地区C区10号住居跡



荒砥島原遺跡A区1号周溝墓



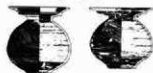
有馬遺跡211号住居跡



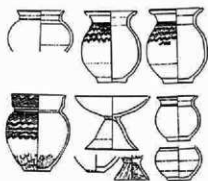
荒砥北原遺跡1号周溝墓



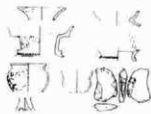
有馬遺跡82号住居跡



堤東1号周溝墓



上綱引遺跡



新保遺跡70号住居跡

第43図 古墳時代前期の土器

第4節 奈良・平安時代の土器

シン航空写真株式会社 三浦京子

本項では、7世紀から11世紀に属する住居跡出土の土器群を中心として考察を行う。当該期に属するものは225軒を数えるが、そのうちほとんど遺物の出土がなく、時期の不明なものが99軒ある。しかし、このうち60軒ほどは、調査所見から9～11世紀に属すると思われる。時期の確定できる遺構の時期別の粗密をみても9～11世紀に集中している傾向は窺える。

また、住居間の重複は多く全体の50%にあたる。そのうち時期の近接した重複は少なく以下の18例であり、全体に土器の出土量も少なく、重複住居間での同一器種の出土があまりないため編年の資料として使えるのはさらに限られる。

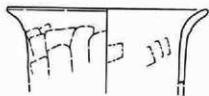
152→120住	134→143→127住	142→141住	189→182住
246→243住	257→248住	256→250・253住	55→52→25→21→13住
48→41→27住	57→50→46→29→35住	39→34→22住	57→51→45住
59→47住	55→48→41・26→27住	61→57→46→29→35住	60→61→57住
100→83住	108・112→87→230住	152→120住	134→143→127住
142→141住	189→182住	246→243住	257→248住
256→250・253住			

7世紀に属する遺構は18軒検出されているが、この中で10・57・68・75・82・116・342・241・246住の9軒は7世紀第4四半期に相当すると考えられ、残りの9軒では出土量も少なく細分にはやや資料不足である。7世紀代の唯一の重複として60・61・57住が見られるが、60住は土師器坏のみ61住には甕、57住は土師器甕・坏、須恵器坏などが出土しており、60・57住の土師器坏ではまったく形態が異なり、57住と61住の甕では、頸部のくびれやヘラケズリ調整など57住→2に後出的要素が見られる。長胴タイプの甕は、胴中央部の多くの遺跡がそうであるように、当遺跡でも8世紀になるとほとんど1種類になってしまうが、7世紀の段階では大きくわけて2つの形式が存在する。まず胴部が直線的で頸部があまりくびれず口縁部が外反するものは、古墳時代中期からの系統にあるもので数種類みられる。もう一方のやや薄手で、胴部に若干ふくらみを持ち、胴部のヘラケズリが斜めとなる甕は比較的青一性が高い。

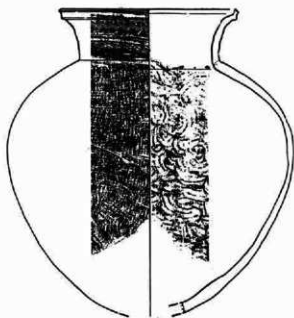
以下に資料の増える7世紀末葉から11世紀中頃までを15段階に分け、各段階の様相を記す。

第1段階（第45図）

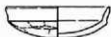
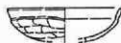
この段階に属する住居は前に述べたように9軒であるが、出土している器種は土師器甕・坏・小形甕、須恵器蓋・坏・台付皿である。土師器甕は長胴タイプと胴部の張るものとあり、前者には胴部が僅かに膨らみを持ち頸部が「くの字」状にくびれ、口縁部が直線的に開くものと、胴部が直線的で器内が厚く、頸部はあまりしまらず口縁部の外反する10住→6、68住→1などがある。後者は246住で2点出土しており、形態は双方とも良く類似している。小形甕はこの段階までバラエティーがあり、246住→5・6、57住→8と3点とも形態が異なる。しかし、8世紀以降小形甕・小形台付甕も、口縁部



6号住居址出土土器



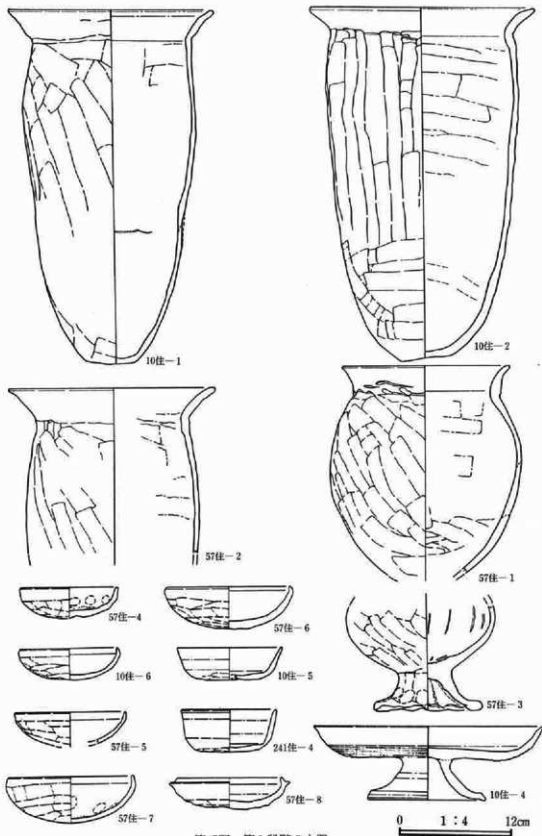
60・67号住居址出土土器



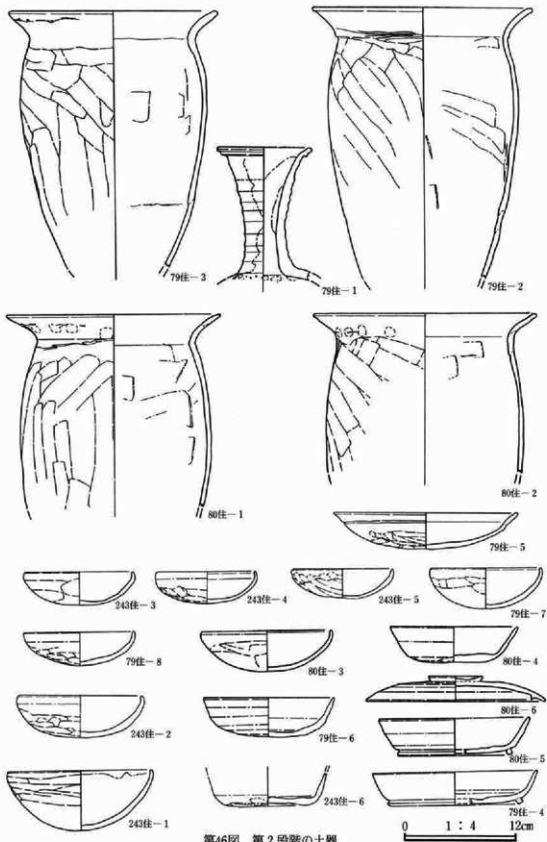
259号住居址出土土器

0 1 : 4 12cm

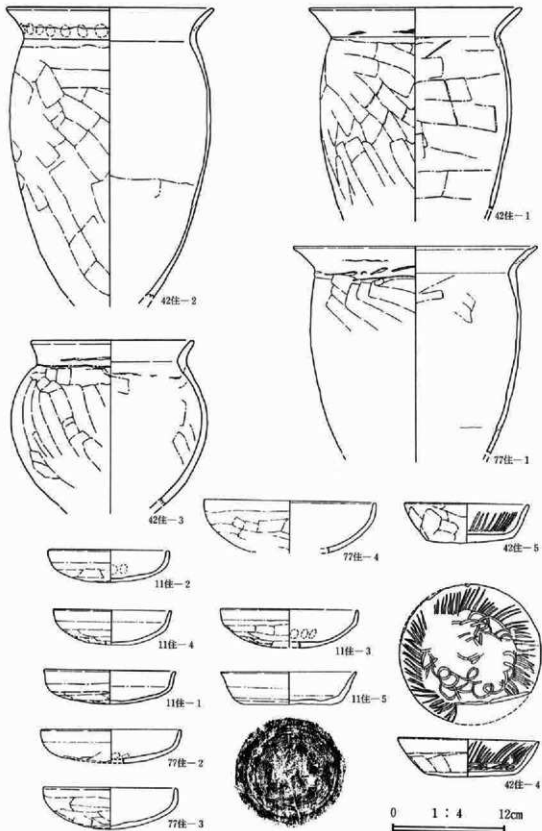
第44図 7世紀代の土器



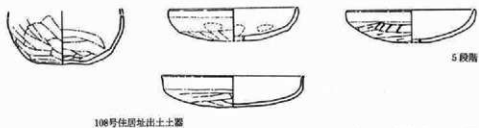
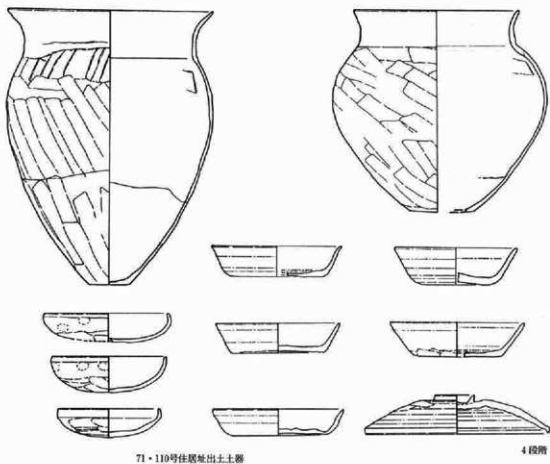
第45図 第1段階の土器



第46図 第2段階の土器

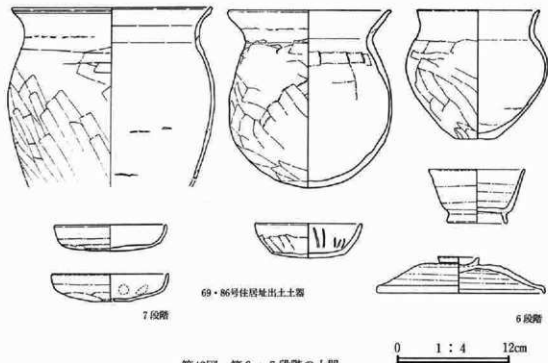


第47図 第3段階の土器



第48図 第4・5段階の土器

0 1 : 4 12cm



第49図 第6・7段階の土器

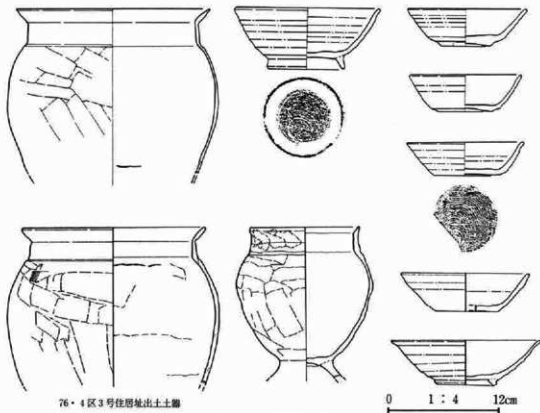
の形態変化が壺に対応する器内の薄手な齊一的なもの出土が圧倒的となる。坏は底部から口縁部まで内湾するもので、法量は口径13cm前後、11.5cm前後、10cm前後の3種類が存在する。須恵器坏で、57住出土のものは口縁部に蓋受けを持ち、鳥羽遺跡k37住に同様の坏が出土しており、相伴している土器器壺もよく似ている。10住には口縁部の直線的な坏が出土しており、口径10.5cmと小形である。他に脚付盤が出土している。最近出土例が増してきており、口唇部の形態には丸く納めるもの、平坦面をもつもの、平坦面に沈線の巡るものなどがある。

第2段階（第46図）

器種のある程度揃っている住居は79・80住のみであるが、その他85・243住がこの段階として挙げられる。土器器壺は4点出土し、前段階よりも胴部の膨らみが若干増す傾向にあり、共に良く類似している。坏は深めで丸底でも底部の中心が張り出すような形態（79住-4・5、80住-3、85住-1、243住-1）と、底部から口縁部まで湾曲するタイプがある。皿は79住で1点出土しており、口径19.5cmの大形品で外面の稜は弱い。須恵器は蓋・坏・高台付坏などが出土している。坏は3点とも形態の異なるもので79住-6は底部丸底で回転ヘラケズリ、体部は直線的に開く。80住-4は底部の器内が厚く平底、体部は薄手で直線的に開く。蓋は80住-6の1点だが口径は19.0cmと大きく、つまみも扁平な大形でかえりが付く。高台付坏は79・80住に2点出土しており、類似するタイプだが79住のほうが器高がやや低く高台のつくりはシャープである。

第3段階（第47図）

この段階では、11・42・77住が挙げられる。土器器壺は前段階と同系列にある壺と、小形壺（42住-3）が1点出土しており、口縁部は短く開き胴部は球形状を呈する。坏は11・77住に見られ、前段



76・4区3号住居址出土土器

第50図 第8段階の土器

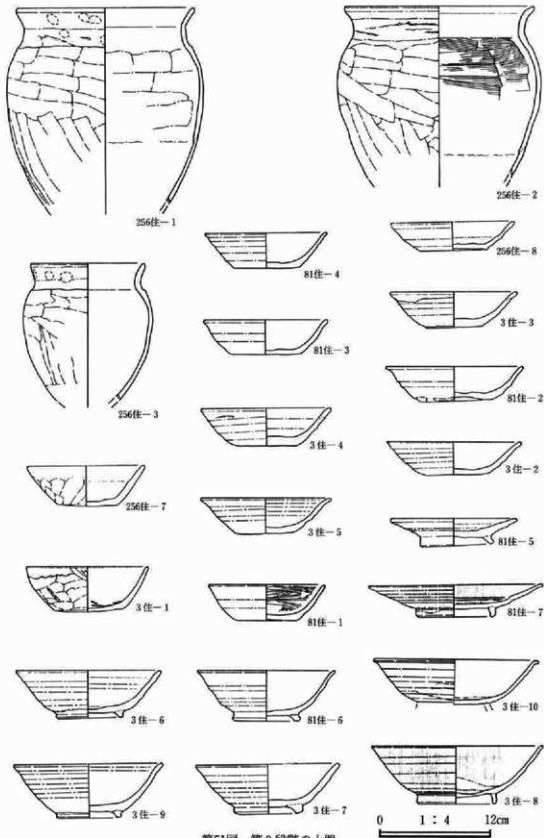
階のように底部中央の出る形態は少なく底部から体部に丸みを持ち、口縁部は外側が若干丸みを持つが内湾しないものが主である。42住には暗文土器が出土しており、1段階82住の暗文土器に比べると平底となり器肉も薄手である。須恵器坏は11住の1点のみであり、底部は回転ヘラケズリ底径は大きく器高は低い。

第4段階（第48図）

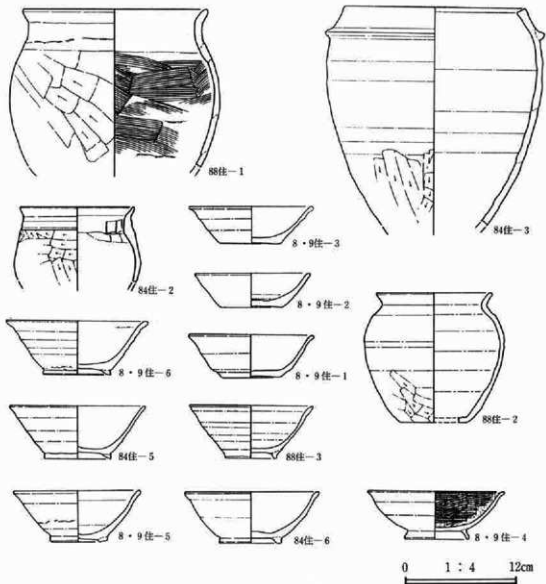
この段階と考えられるものは58・71・110住である。土師器甕は110住のみであるが、前段階に比べ器高が低く胴部の器肉も薄手になっている。また小形甕もあり、胴上位に大きく張りを持ち器肉も薄手胎土や調整など長胴タイプの甕に良く類似している。土師器坏は丸底、口縁部も丸みを持つが器肉が薄手となる。須恵器坏は3種類見られ、器高が低く体部のあまり開かない（71住-4、110住-2・4）やや器高が高く体部の直線的に開くタイプ（110住-5）、体部立ち上がりに丸みを持ち器高が高いタイプである。他に須恵器碗が58住にあるが、高台の断面三角形の細長いタイプでこのような碗は4段階以前から出土しているが出土量が少ないことや、良好なセット関係で捉えられるものが少なくその変遷は不明瞭である。また、5・6段階には同様の高台で器高の高いもの（50住-1・59住-2）が多く出土するようになるが、この58住の碗との関連は不明瞭である。71住-5の蓋はこのような碗に付くものと思われる。

第5段階（第48図）

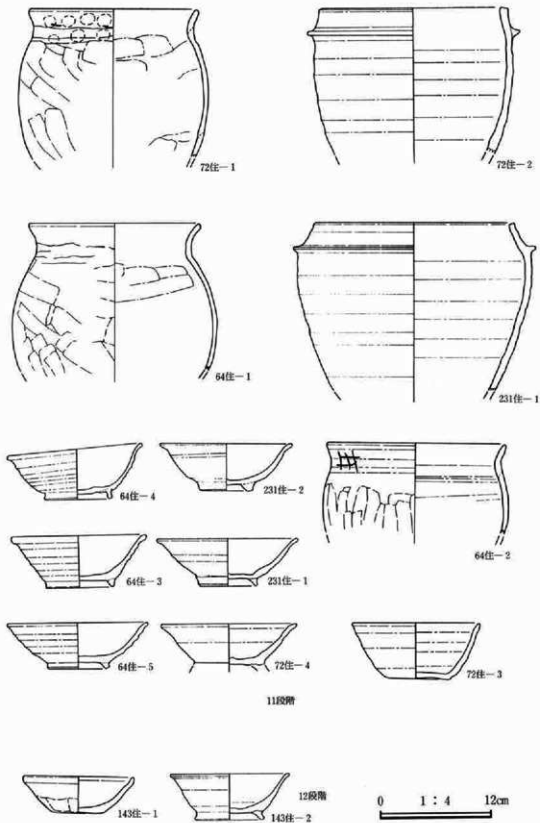
この段階に属するものはほとんど見られない。基準となる土師器甕の出土がなく、坏の形態でこの



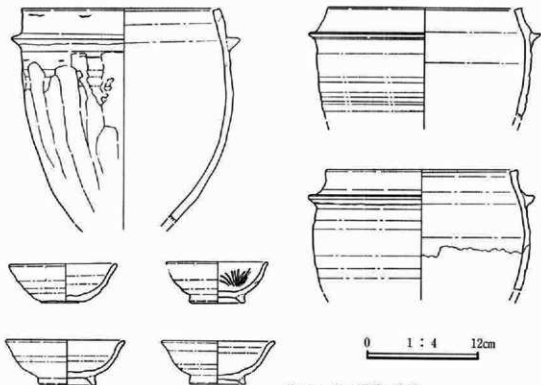
第51図 第9段階の土器



第52図 第10段階の土器



第53図 第11・12段階の土器



127・4区31号住居址出土土器

第54図 第13段階の土器

段階に該当すると思われるのに108住がある。

第6段階（第49図）

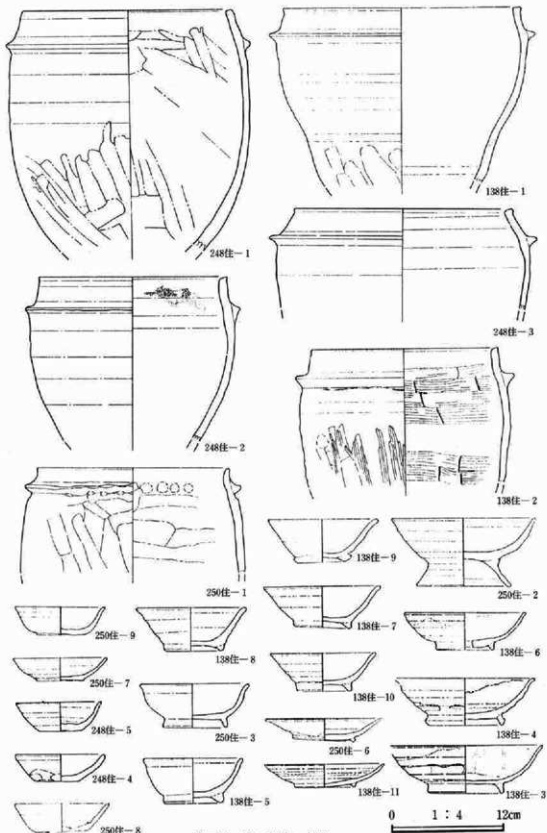
この段階も少なく、器種の揃った住居は見られず69住がこの段階を示すと考えられる。土師器甕はなく、小形甕が2種類存在する。一点は多出するタイプであり、1の甕は胴下半にふくらみを持つあまり見られない形態であるが調整方法は前者と同様である。土師器環は平底で器高が低く、若干外側は丸みを持つ。暗文土器が一点出土しており3段階のものよりも小形化し、暗文の間隔も広がっている。須恵器蓋は大形の椀にセットされると思われるが、伴出しているのは小形の椀である。

第7段階（第49図）

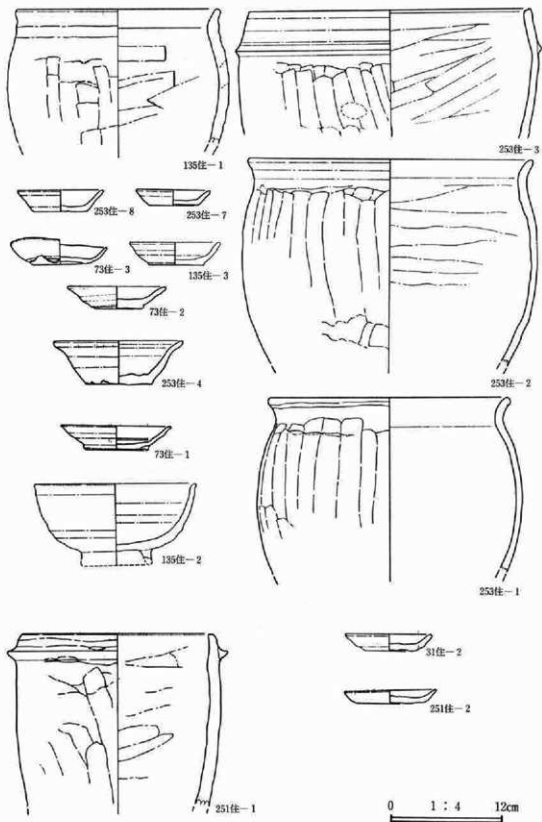
この段階も少なく、86住ほか50・149住が該当すると考えられる。86住の土師器甕がこの段階の代表的なものであり、口縁部が直立気味に立ち上位に変換点を持って外反する「コの字」状口縁に近い形態となっている。伴出している土師器環は平底で立ち上がり丸みを持ち体部は直線的になってきている。50住は須恵器椀が一点、口径16.2cmで体部は深く内底径の広い大形品である。

第8段階（第50図）

土師器甕を出土する住居には76・93・4区3住があり、他にこの段階に属すると思われるものに29・35・78・81・90・167・198住がある。土師器甕は口縁部が完全な「コの字」状である。76住には小形台付甕が出土しているが口縁部の形態は「コの字」のやや崩れた状態で、胴部は上位に張りがあるが前段階よりふくらみが少なくなっている。須恵器環では4区3住-3・4は形態が類似している。体部下半が底部に向かって絞り込まれ、糸切り径が内底径より狭く体部の直線的に開くものである。



第55図 第14段階の土器



第56図 第15段階の土器

9世紀の時期の近接した重複は50→46→29→35住・51→45住・59→47住の3例あるが出土量が少ないうえに、共通してみられる器種は須恵器碗のみである。形態・法量にはある程度相違はみられる。同一組列として捉えられるかはまた疑問のあるところだが、器高が低く底径の小くなる傾向は窺える。

第9段階（第51図）

この段階に属するおもなものは3・16・95・98・256住であり土師器甕が崩れた「コの字」状口縁部を呈するようになった段階である。3・256住に土師器坏が出土しているが、これは従来の坏と異なり体部が直線的に開きヘラケズリが施され、器内が厚いものである。須恵器の坏は焼成に軟質なものが増えてくる。形態は3住の坏のように体部立ち上がりに丸みを持ち、また内面底・体部の変換点もなだらかに立ち上がるものが多くなる。碗は256住-7のように器内がやや薄く、口縁部の外反する灰軸的な器形のもの、3住-6・7・8のように体部に僅かに丸みを持つが、直線的で器内の厚手なものがある。98住は次段階に属する88住に壊されており、須恵器碗からも98住の方が古い様相を持つと思われるが、この住居からは足蓋が出土しており須恵器の中で煮沸土器の生産が始まる頃の資料として注目される。灰軸陶器は3住に碗が2点出土しており、口径17cm以上の大形形で口唇部が外反し高台は弱い三日月高台、施釉は内外面に刷毛塗りである。

第10段階（第52図）

66・88・152住に出土している土師器甕は、前段階よりも器内に厚みを増し、口縁部の作りも雑である。他にこの段階と考えられるものに8・37・56・84・100・187住などが挙げられる。土師器坏はほとんど出土しなくなるが、37住に1点体部ヘラケズリのもので、前段階より若干器高の低くなったものが見られる。小形甕は84住に出土しており、口縁部は崩れた「コの字」状で口縁部下半から頸部は器内が厚く内傾し、上半が小さく開く形態となり、184住にも同様のものが出土している。須恵器坏・碗は器形的にはあまり大差がなく、若干小形になる傾向はある。また焼成には軟質、酸化焰焼成気味のものが多くなる。他の器種として須恵器羽釜・小形甕も見られる。

第11段階（第53図）

土師器甕は口縁部が若干「コの字」の形態を残し、胴部から続いて内湾していき上半部が外反する。器内は全体的に厚手である。この甕の出土している住居は72・83・97・103・230住であり、他にこの段階に属すると思われるものに55・99・121・231住などがある。土師器では甕以外の器種はほとんど見ることはできないが、坏は僅かに続くようであり、10段階と考えられる37住-1よりも底径が小さく後出する要素を持つ坏が46・104住で出土している。須恵器坏は230住に出土しているものは、前段階より器高がやや高いものである。碗は前段階よりも体部が薄く、底径が小さいものが多い。羽釜はロクロ調整であるが形態にバラエティーがあり、胴部から口縁部まで内湾気味のもの、罎の部分を変換点にして内傾するものなどが出土している。

第12段階（第53図）

この段階以降土師器甕の出土が見られず、確実に編年の基準となるものに乏しいが、坏・碗類の法量の変化が目安となる可能性があり、それに準じて段階設定を行った。しかしこの段階に属すると考えられる住居は少なく、143住のみである。土師器坏が出土しており、前段階よりも小形で底径が小さ

くなっている傾向にある。須恵器碗は口径12.4cmとかなり小形になってきている。

第13段階（第54図）

前段階の143住と重複しこれを切っている住居に127住があるが、須恵器碗を比較すると、127住の方が新しい様相を持つと考えこの段階とした。他に4区31住がこの段階と思われる。

第14住段階（第55図）

この段階には土師器はすでにほとんどなく、酸化焰焼成の須恵器と少量の灰釉陶器によって構成される。器種には須恵器杯・碗・羽釜・土釜、灰釉陶器碗・皿などが出土している。煮炊の土器としては羽釜が主体を占めており、その形態にはかなりバラエティーがある。ある程度の器種が揃って出土している住居には、132・138・248・250住があり、他はこれらの住居の土器に類似するものが出ている27・34・156・182・258・4区10住などが挙げられ、この段階には再び住居数が増える傾向にある。250住の杯は口径9.5～10.0cm、器高2.4～3.0cmを測り、形態は体部立ち上がりにやや丸みを持つもの、立ち上がりは比較的直線的に開くもの、上位に僅かに丸みを持って開くタイプとがある。138住は碗が多く出土しており、口径11.0～12.2cm、器高4.0～4.6cmを測り、高台は断面角形で低く貼付の雑なタイプである。132住は杯・碗・羽釜が1点ずつ出土し、碗は138住、杯は250住の法量に類似しているが、杯の形態は異なり体部の直線的なものである。248住は杯が2点出土しており、法量・形態とも250住に類似する。27住は杯が1点、この杯は248・250住の杯に法量が一致している。羽釜は口径19.5cm、22.0cm、25.2cmと3種類あるが、形態には底部に向かってすぼまるものや、下半部まで丸みを持っているものなどあり、容量は必ずしも口径の大きさに一致するものではない。調整方法にはロクロによるナデとヘラナデ、指ナデのものがある。

第15段階（第56図）

この段階に属する住居も比較的多く、4・14・23・26・73・135・159・223・253・4区27住などが挙げられる。器種としては、須恵器杯・碗・羽釜・土釜・小形壺、灰釉陶器碗・皿など前段階と同様である。杯は小形品が口径8.0～10.1cm、器高1.7～2.5cm、大形品は口径12.2～14.0cm、器高4.5～4.6cmを測り双方とも前段階より口径が小さく、器高が低くなる傾向にあるが、また前段階には見られないような口径16cm以上で器高も高い大形の碗（135住一）も出土している。羽釜・土釜ではこの段階に口径30cm近い大形品が多く見られる。調整は大半のものがヘラナデにより、縦方向が多い。

以上、検出されたすべての奈良・平安時代の遺構に時期を与えることはできないが、少なくとも出土している土器全体からは下記のような遺構の消長は窺える。まず7世紀末から再び遺構が増え始め、8世紀後半から9世紀前半は少なく、9世紀後半から増加していき、10世紀後半には減少し、11世紀前半に最後のピークを迎える。土器の様相は泉央部の主な遺跡と同様な傾向を示すと言える。

第5節 熊野堂遺跡第49号住居出土の装飾金具

東京国立博物館 加島 勝

熊野堂遺跡第49号住居址から出土した四点の金具は、いずれも鍛造製の銅版に文様を線刻であらわし、鍍金を施したものである。ここでは、これらの金具の製作技法と装飾文様について考えてみたい。まず、それぞれの形状を順に述べることにする。

1. 49住-3 (第57図)

銅版製、鍍金。長10.1cm (現状)、幅3.7cm。

銅版の先端を花形につくり、周縁に細い緑帯をめぐらし、中に宝相華唐草文を蹴彫りであらわし、地は魚々子打ちとしている。花形は中央を瘦形に、両側を弧形とするいわゆる複合瘦形につくる。先端部三箇所に釘留めするための小孔が開けられている。宝相華文は両側にC字形の蕨手を伸ばした花形と葉形を交互に配している。二本の蔓でつながる花形と葉形が文様の一単位を成しているものと思われる。花形は中心を円形の花芯とし帽殿形(斜め上から見た形)にあらわす。先端部に配された花形は五弁で、このうち手前側の四弁には一本の線で葉脈があらわされ、奥の花弁には小細線により緑取りがある。もう一方の花形は四弁で、手前側の花弁は先端部の花形と同様であるが、奥の花弁には水滴形に近い葉脈があらわされ、小細線の緑取りは四弁すべてに施されている。葉形は、小細線で緑取りされ、尖った先端と切れ込みのある輪郭をもち、水滴形を放射状に伸びる線で囲んだ葉脈があらわされている。

2. 49住-4 (第57図)

銅版製、鍍金。長7.7cm (現状)、幅3.7cm。

銅版の周縁に細い緑帯をめぐらし、内側に宝相華唐草文を蹴彫りであらわし、地は魚々子打ちとしている。現状、両先端部を欠失している。一方の切断部に釘留めするためと思われる小孔の一部が半円形に残っている。宝相華文は、花形と葉形を交互に配したものである。葉形は、49号住-3にみられたのと同じものを大きくあらわしたもので、一方の葉形の水滴形は蓮蕾状を呈している。周縁との間隙にはC字形の蕨手が伸びる。花形は側面形(横からみた形)の三弁で、水滴形の葉脈があらわされ、小細線による緑取りがされている。

3. 49住-1 (第58図)

銅版製、鍍金。長12.6cm (現状)、幅2.1cm。

4. 49住-2 (第58図)

銅版製、鍍金。長5.3cm (現状)、幅2.2cm。

49住-1・2ともに、銅版の先端を複合瘦形につくり、装飾文様を蹴彫りであらわしている。49住-1では先端部三箇所と現状中程の周縁二箇所に、49住-2では先端部三箇所に釘留めのための小孔が開けられている。49住-1には三箇所に折り曲げた痕跡が残っている(出土時には中程で折り曲げられていた)が、釘留めの位置との関係から、この金具が隅金具のように曲げて用いられたものではないことがわかる。装飾文様は水滴形の中を魚々子打ちとし、周囲に、先端に魚々子打ちによる小円

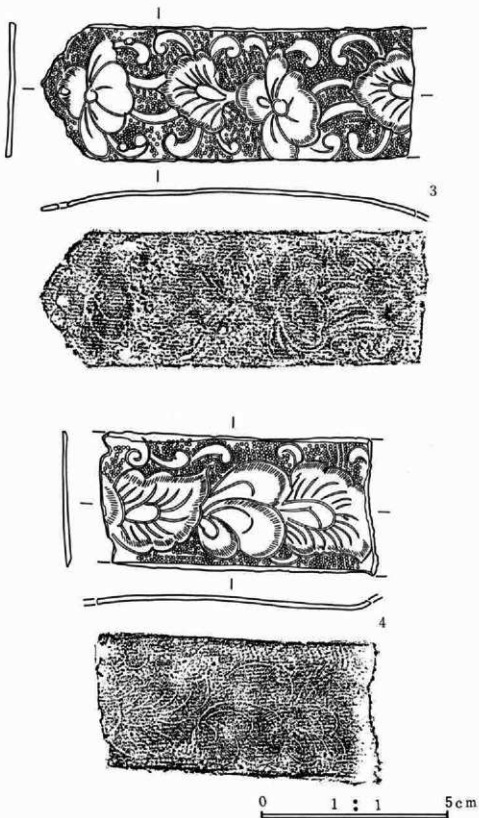
形をもつ放射状線をあらわし、その周囲をさらに小細線で囲んだものを一単位とし、これを連続させ、周縁との間隙にも小円形をもつ放射状線を充填している。この文様に見られる水滴形と放射状線は、49住-3・4の葉形の葉脈によく似ている。また、魚々子打ちした水滴形は蓮華文に見られるような子房と顆粒形をあらわそうとしたものかも知れない。そうであるなら、小円形をもつ放射状線は雄葉をあらわしていると解せよう。いずれにしても、この文様は植物文の構成原理から成り立っているといえるが、もはや空想の花葉形ないし花卉をあらわしたものであるべきものであろう。

これらの金具は、現状ではいずれも一方の先端部ないし両方の先端部を欠失しているのが、当初は両端を花形につくったものであったと思われる。大きさ(幅)からは、49住-3および49住-4と49住-1および49住-2の二種類に分けることができる。これを文様の面からみると、前者ではその要素が花形、葉形、蕨手からなることや地文を魚々子打ちによっている点では共通しているが、49住-3は縦に、49住-4は横に文様が展開しているという違いがある。後者にはまったく同じ文様があらわされているが、その展開の方向からみて49住-2が49住-1のもう一方の先端ではない。このことからこの四点は三種類の金具の残片であることがわかる。このような形の金具は八双金具と呼ばれ、社寺などの扉や建築部材に打たれ、これを装飾するものであるが、本作例の場合、大きさや厚みからみてむしろ厨子、棚、机、卓といった仏具や調度品の装飾金具であったものと思われる。

この種の金具では、周縁に縁帯を線刻でめぐらし、その内側に文様をあらわすのが一般的であるが、49住-3および49住-4の見られる縁帯は線刻によるものではない。これは銅版を金具の形に切つてゆく際に垂直ではなく、やや斜めに切つていった結果、その断面が縁带状になったもので、これが、製作時に縁帯を意識したものかどうかは判然としない。仮にこれを縁帯と認めるにしてもきわめて細いものであり、また49住-1、2の方にはめぐらされておらず、これはこの金具の大きな特徴といえる。文様の線刻は、四例とも毛彫りではなく、鑿をらせながら打ち込み、楔形を連続させて線をあらわす彫りである。49住-3、4の地文の魚々子打ちは、文様の輪郭や周縁に沿って規則的に打っているところと、まばらに打っているところがあって整然としたものではない。これと49住-1、2の水滴形の内部と周囲に放射状線に見られる魚々子打ちは同じ鑿によるものと思われる。

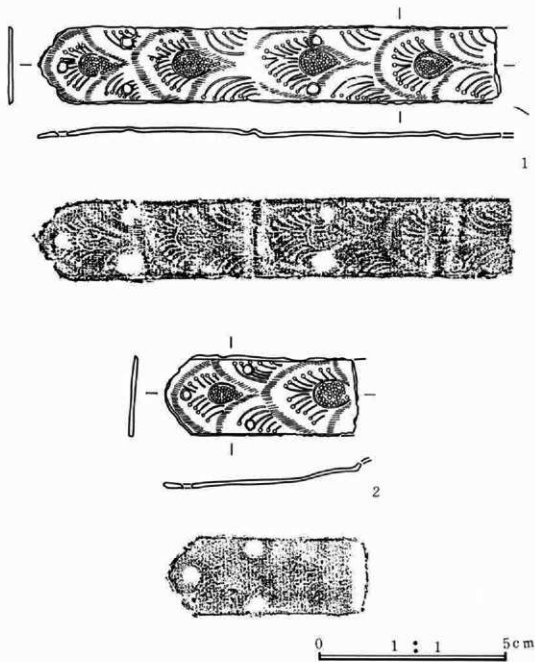
49住-3や49住-4にあらわされているような側面形や俯視形の花形と葉脈つきの切れ込みのある葉形からなる宝相華文は唐朝以来の伝統を引き継ぐ文様で、我国においても天平期以降その影響を受けながら多様な展開を示したことが知られている。宝相華文を線刻であらわした金工品で製作年代を徴証できるものには、天曆11年(957)銘を有する金銅如意(東京国立博物館保管)、長元4年(1031)の製作と考えられている横川根本如法堂址出土の金銅経箱(延暦寺蔵)、天喜元年(1053)の製作と考えられている平等院鳳凰堂天蓋の八双金具(平等院蔵)などがあげられる。なかでも天曆11年銘金銅如意に刻まれた小細線のある五弁の花形をはじめ蓮蕾状の紡錘形を葉脈で囲む葉形や蕨手は49住-3や49住-4のものに近いものである。これと比べてみると49住-3や49住-4の花形や葉形の水滴形、さらに蕨手の形態は精緻さに欠けているとはいえ、その製作年代は同時期すなわち平安時代半ば頃、10世紀後半から11世紀にかけてとみてよいと思われる。また、49住-1と49住-2製作技法が同じであることからみて、本来これと一具をなしていたものであろう。

平安時代にさかのぼるこの種の金具の出土はきわめて稀なことといえ、またそれが堅穴住居跡から



第57図 裝飾金具

出土したことは本来の装飾金具とは違ったものに転用されていたことが窺われて興味深い。こうした意味で本例のもつ資料的価値には高いものがあるといえよう。



第58図 装飾金具

第6節 熊野堂遺跡II地区出土の瓦について

須田 茂

熊野堂遺跡II地区では少量ではあるが、丸瓦・平瓦・軒丸瓦が出土している。以下、瓦類について観察所見をのべたい。

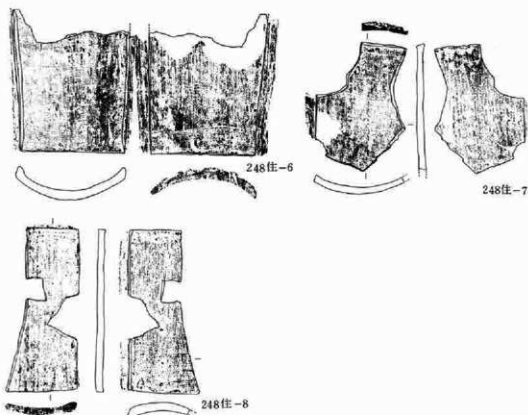
瓦類を分類すると、丸瓦、平瓦、軒丸瓦を通じて2つに分類できる。それをA類、B類と称すことにするが、それぞれの内容は付表のとおりである(第59・60図)。

A類は平瓦のみがあって、半損程度のもの3点のほか破片2点がある。主として248号住居址から出土している。B類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦の3者がある。丸瓦は破片3点、平瓦は破片10点、軒丸瓦は破損品4点があり、それぞれ4号住居址、23号住居址、49号住居址と73号住居址などから出土している。

A類の平瓦は長さ34cm、狭端幅22cm、厚さ1.2~1.7cmをはかる。焼成は還元炎で硬く、明灰色を呈す。形状・規模および焼成は普通の瓦であるが、特徴的な点もいくつかある。まず、凸面の叩きについて全面にタテ方向縄叩きが施され、狭端部付近のみヨコ方向縄叩きが付加されている。また、凸面には人為的とみられる砂粒の付着があるが、これは叩き具の離れを良くするためのものかとみられる。これらの特徴は他の瓦と識別する上で良好な指標になるものである。また、本類の中、具体的には248号住居址№7の資料は側面部に布目痕が付着する部分があり、本瓦が一枚造りによる製作である証とみなされる。そもそもA類の平瓦は凹面にモコツ痕がないことから一枚造りであろうとみなされるのであるが、それ以外にも両側面の形状(平瓦の一枚造りの場合、カマボコ形状の成形台が使用されたと考えられるが、その場合、側面の整形は垂直方向になされるのが自然である。本平瓦はまさにそのような形を呈している。)あるいは叩き具の叩き方などにもその徴候がうかがわれる。いずれにしても平瓦A類は一枚造りであることが比較的明瞭に認識される資料であろう。ちなみに、本類の瓦は、熊野堂遺跡I地区の平瓦2類、融通寺遺跡のA類と同類である。

B類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦ともに酸化炎で焼成され褐色を呈し軟質である。粗質な瓦である。丸瓦・平瓦は厚さが1cm前後と薄手であり、平面形も小規模なものと推測される。ともに凸面はタテ方向のヘラケズリ整形が施されており、薄手の理由はこの整形法に由来するものかもしれない。成形法については、丸瓦・平瓦ともに粘土板を素材とする。そして、一枚造りではないかとみなされる。これは瓦の形態と凸面のタテ方向ヘラケズリという整形法から想定したのであるが、確証はない。この丸瓦・平瓦は融通寺遺跡のF類に対比できるものである。

B類の軒丸瓦は文様が四弁門であって、種類は一種である。その丸瓦部は粘土紐を素材とし、円筒を二分割する技法で作製されている。形態は無段瓦つまり、いわゆる行基瓦である。凸面はタテ方向ユビナデ、凹面はヨコ方向ユビナデであって、凹面に通有の布目痕はない。同類の丸瓦とは全く別個の製作技法である。ここで、本軒丸瓦の製作技法を復元すると、まず軒丸瓦の範を水平に置き、その上に瓦当部の粘土を置く。ついで瓦当の径に合わせて粘土紐を積みあげる。紐は8単位ほどである。そして粘土紐の接合痕を消すために内外面をユビナデ整形する。さいごに円筒を二分割して仕上げと

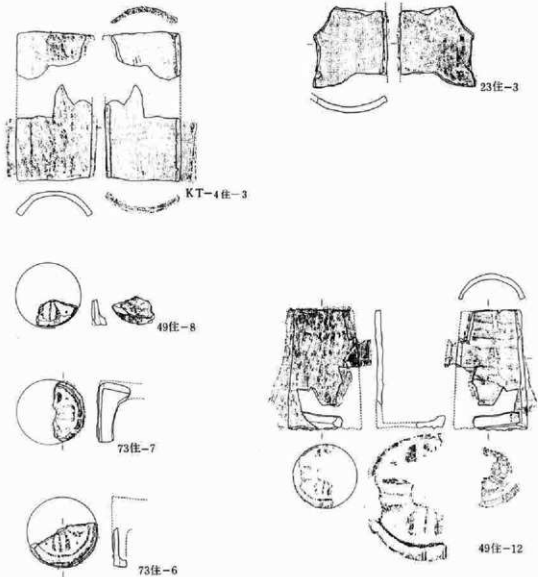


第59図 A類の瓦

なる。なお、丸瓦部の分割は瓦当部までは達せず、そのために瓦当扉面の下半部に丸瓦部の残部が土手状にめぐる。一見、いわゆる一本造り法の軒丸瓦のような形状を呈すが、技法的には明らかに相違しており「熊野堂技法」と仮称できそうな技法である。

B類の軒丸瓦は49号住居址と73号住居址から出土し、前者はカマドに転用されている。またその年代は共に11世紀前半に比定されることから、瓦の下限年代を考える手がかりとなっている。仮に瓦と住居跡の間に年代の大きなへだたりがないものとするれば、瓦の年代は10世紀代おそくとも11世紀前半頃とみなせようが、この問題はなお後日の検討と要すものである。

上野国における古代の瓦は生産技術の低下に伴ってしだいに粗悪化・小規模化する傾向がある。そして、熊野堂遺跡II地区のB類瓦は上野国の古瓦の中で終末期に位置づけられるものの一つである。本類の丸瓦・平瓦は同様なもの中西鹿寺（吉井町黒熊）にあり、このほかにも国分寺跡など県内にあるかもしれないが、軒丸瓦の分布は今のところ本遺跡のみである。このように、本類の瓦は上野国の終末段階の瓦の様相を考える上で重要な意味をもつものである。



第60図 B類の瓦

熊野堂遺跡II地区出土瓦分類表

種別	縦	横	凸	面	西面	側面	端面	胎土	色調	焼成	素材・成形	資料数	図番号	
A類 平瓦	長さ	34	タテ方向隅叩き		布目復	二面	一面	産	明灰色	硬	粘土板	半損3	248住-6	
	狭端幅	22	狭端部付近ヨコ方向隅叩き					砂粒含有		産元焼	一枚造り	破片2	248住-7	
	厚さ	1.2~1.7	表面に砂粒付着										破片1	248住-8
B類 丸瓦	厚さ	0.8~1.3	タテ方向ヘラケズリ		布目復	一面	一面	やや粗	茶褐色	軟	粘土板	一枚造りか	破片3	KT 4住-3
	厚さ	1.0~1.2	タテ方向ヘラケズリ		布目復	一面	一面	やや粗	褐色	軟	粘土板	一枚造り	破片10	23住-3
	軒丸瓦 丸瓦部	長さ 厚さ	25.5 1.2	タテ方向ユビナデ	ヨコナデ	一面	一面	粗 砂粒含有	褐色	軟 酸化炭	粘土織 円筒二分割	4点	49住-12 49住-8 73住-7 73住-6	

第7章 分 析

第1節 熊野堂遺跡出土須恵器胎土分析

群馬県工業試験場 花岡敏一

〃 小沢達樹

シン航空写真株式会社 三浦京子

はじめに

現在では、胎土分析の試料は800点を越え、県内の窯跡群のうち秋間・吉井・乗附・月夜野・笠懸・太田については、その領域をある程度捉えられるようになってきている。当遺跡には、6世紀前半から11世紀までの須恵器が出土しているが、それらすべての時期を対象として供給地を探ることはかなりの点数を分析しなければならず困難である。そこで今回は、比較的出土量の多い9世紀から11世紀の須恵器を中心として分析を行う。

1 分析目的と試料の選択 (第61・62図)

9世紀から10世紀にかけては須恵器の焼成が、還元焰焼成から酸化焰焼成気味に変化していく段階にあり、窯跡の存在も不明瞭な状態である。当遺跡の地理的条件などから考えれば秋間・吉井・乗附窯跡群からの供給が考えられるが、それらの窯跡においても10世紀以降の窯は未確認である。9世紀の須恵器胎土の内視観察では、秋間・吉井・乗附窯跡群に対応できるものが多いと思われるが、焼成の変化したのも従来の領域に分布してくるのかどうか確認したい。試料の選択にあたっては、時間的に同時性が高いと考えられるため、なるべく同一住居の中で類似する試料を数点づつ選び、また9世紀から11世紀まで連続して見られるように1世紀を前後半に分けて各段階から選んだ。

681・682は9世紀中頃の試料であり、還元焰焼成で黒色鉱物を含み秋間の所産と考えられる。9世紀後半のものは683～691で、酸化焰焼成気味の部分もあるが基本的には還元焰焼成である。内視観察では、産地として秋間・吉井・乗附などが推定される。10世紀前半の試料は8・9号住出土の692～694であり、それぞれ焼成が異なる。10世紀後半の試料は695～700であり、大半が酸化焰気味の焼成である。11世紀前半の試料は、701～709の小皿と小碗、710～713の羽蓋・土蓋である。

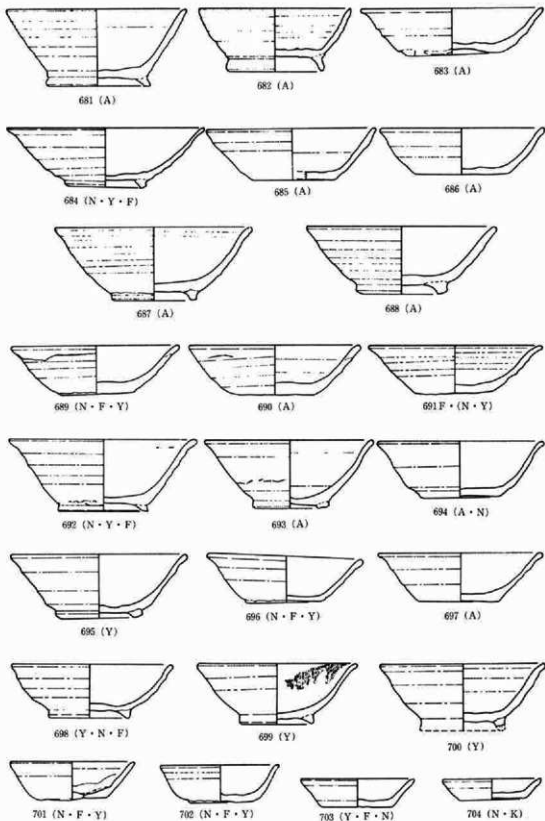
2 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析 分析用試料は各試料を10以下に粉碎し、5～10gを径4cmの円板に成型して使用した。測定条件は次のとおりである。

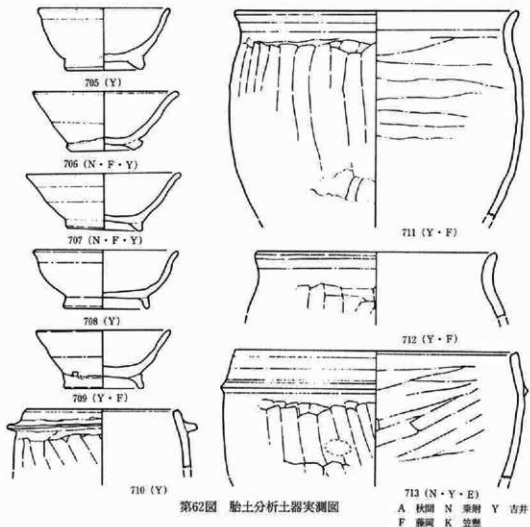
蛍光X線分析装置：理学電気(株)KG-4型

分光結晶：Fe, Sr, RBにはLiF (2d=4.028Å)

Ca, K, Ti, Si, AlにはEDDT (2d=8.808Å) MgにはADDP (2d=



第61図 胎土分析土器実測図



第62図 胎土分析土器実測図

713 (N・Y・E)
A. 秋間 N 栗附 Y 吉井
F 藤岡 K 笠懸

10.648Å)

検出器：LiFを使用したとき、S・C、

EDDT、ADPを使用したとき、P・C、

時定数：1

計数法：Fe、Ca、K、Ti、Sr、Rbはチャートにより、Si、Al、Mgは定時計数法によった。なおチャートは、4とした。

波高分析器：積分方式

測定線：FeK、CaK、KK、TiK、AlK、MK、SrK、RbK、の各1次線を使用した。

X線照射面積：20

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器6点(295、310、336、345、360、380)を化学分析し、標準試料とした。

第16表 熊野堂遺跡第II地区胎土分析資料の肉眼観察表

試料番号	遺物番号 推定年代	種別	胎土の肉眼観察	備考
681	59住2 10世紀前	椀 須恵器	少量の白～灰色細砂粒、黒色鉱物粒を含む。還元焰。灰色。	秋間
682	47住1 9世紀後	椀 須恵器	白～灰色細砂粒を含む。還元。灰白色。	秋間
683	81住2 9世紀後	杯 須恵器	白～灰色細・粗砂粒と黒色鉱物粒を含む。還元焰。灰色。	秋間
684	75住3 9世紀後	椀 須恵器	白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。灰白色。	兼附、吉井 藤岡
685	76住4 9世紀後	杯 須恵器	白色細・粗砂粒、黒色鉱物粒を含む。還元焰。灰色。	秋間
686	81住3 9世紀後	杯 須恵器	白色細砂粒、細礫を含む。還元焰。灰白色。	秋間
687	3住9 9世紀4	椀 須恵器	白色細砂粒、僅かな灰～黒色の細礫。還元焰。灰白色。	秋間
688	3住7 9世紀4	椀 須恵器	白色細・粗砂粒、2～5mmの凝灰岩の岩片のような白色礫を含む。還元焰。やや軟質。浅黄色。	秋間
689	3住3 9世紀4	杯 須恵器	白色細・粗砂粒、僅かな赤褐色細砂粒を含む。還元焰（やや酸化気味）。口縁部灰色、底～体部一明黄褐色。	兼附、藤岡 吉井
690	3住4 9世紀4	杯 須恵器	白色細砂粒、少量の黒色鉱物粒を含む。還元焰。明褐色。	秋間
691	3住5 9世紀4	杯 須恵器	白色細・粗砂粒・細礫を含む。還元焰。灰色。	藤岡、兼附 吉井
692	8・9住6 10世紀1	椀 須恵器	白～灰色細・粗砂粒を含む。還元焼成。黒色、褐色、黄灰色。	兼附、吉井 藤岡
693	8・9住5 10世紀1	椀 須恵器	白～灰色・雷目細砂粒を含む。還元焰。やや軟質。明褐色。	秋間
694	8・9住1 10世紀1	杯 須恵器	白色細砂粒、褐色粗砂粒を含む。還元焰。酸化気味。にぶい褐色。	秋間、兼附
695	70住7 10世紀前	椀	白色細砂粒と少量の小礫・中礫を含む。酸化焰。橙色。	吉井
696	70住5 10世紀前	杯 土器	白～灰色、赤褐色の細・粗砂粒を含む。酸化焰。にぶい褐色。	兼附、藤岡 吉井
697	8・9住3 10世紀1	杯 須恵器	白～灰色細・粗砂粒を含む。還元。灰色。	秋間
698	3区2住5 10世紀	椀	細かい砂粒を多く含む。胎土やや緻密。焼成あまり良くない。黒褐色。	吉井、兼附 藤岡

試料番号	遺物番号 推定年代	種 別	胎 土 の 肉 眼 観 察	備 考
699	Ⅲ区2住2 10世紀	罎	砂粒、φ1～3mmの小石を含む。胎土やや粗密。焼成良。酸化焙焼成。黒斑有。明黄褐色。	吉井
700	3区2住4 10世紀	罎	砂粒、φ1～5mmの小石を含む。胎土やや粗密。焼成良。酸化焙焼成。黒斑有。褐灰、にぶい黄褐色。	吉井
701	250住8 11世紀1	杯	砂粒、φ1～3mmの小石を含む。胎土やや緻密。焼成良。酸化焙焼成。にぶい黄褐色。	栗附、藤岡 吉井
702	250住9 11世紀1	杯	砂粒、φ1～5mmの小石を含む。胎土やや粗密。焼成良くない。酸化焙焼成。(内)黒褐、(外)にぶい褐色。	栗附、藤岡 吉井
703	253住8 11世紀2	皿 土 師 質	砂粒、黒色粒子、φ1～3mmの小石を含む。胎土やや緻密。焼成良くなくザラつく。浅黄褐色。	吉井、藤岡 栗附
704	253住7 11世紀2	皿 土 師 質	砂粒、φ1～2mmの小石を含む。胎土やや緻密。焼成よくなく磨減多い。淡黄色。	栗附、笠懸
705	138住5 11世紀1	罎 須 志 器	φ1～2mmの小石、砂粒を多く含む。灰白色。	吉井
706	138住9 11世紀1	罎 須 志 器	砂粒を多く含む。酸化焙焼成。鈍い褐色。	栗附、藤岡 吉井
707	138住7 11世紀1	罎 須 志 器	φ1～2mmの小石、砂粒を含む。還元焙焼成。灰白色。	栗附、藤岡 吉井
708	250住3 11世紀1	罎	砂粒、黒色粒子を多く含む。胎土緻密。焼成良。還元焙焼成。淡黄色。	吉井
709	4住-2 11世紀2	罎 須 志 器	黒色の軟質な粗砂粒、細礫を多く、白色細・粗砂粒、細礫を多く、白色細・粗砂粒を含む。還元焙。軟質。灰黄色。	吉井、藤岡
710	254住2 11世紀	羽 蓋	砂粒、雲母、φ1～3mmの小石を含む。胎土やや粗密。焼成良。褐色。	吉井
711	253住2 11世紀2	壺 土 師 器	砂粒、雲母、片岩多く含む。胎土やや粗密。焼成良。明赤褐色。	吉井、藤岡
712	254住1 11世紀	壺 土 師 器	砂粒、石英、雲母を多く含む。胎土やや緻密。焼成良。褐色。	吉井、藤岡
713	253住3 11世紀2	羽 蓋	砂粒、雲母、φ1～2mmの小石を含む。胎土やや粗密。焼成良。酸化焙焼成。明赤褐色。	栗附、吉井 藤岡

3 分析結果 (第63図)

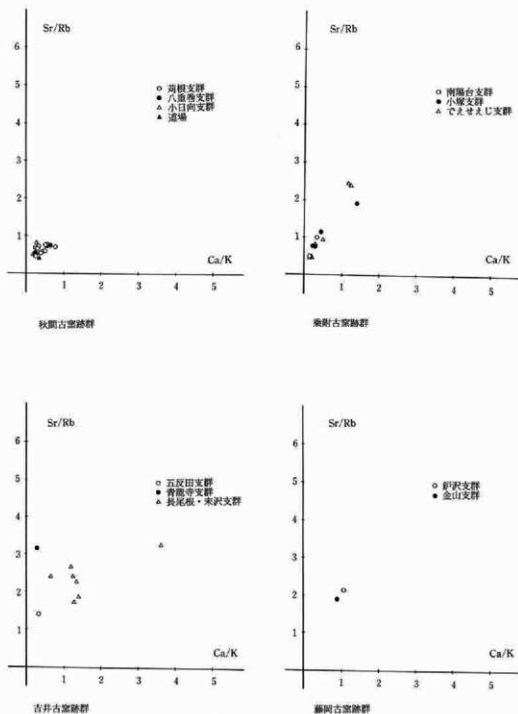
結果は大きく三つのグループと、値の大きく離れて散在する数点に分けることが出来る。681～686は秋間ないし栗附の範囲にまとまりを持ち、肉眼観察でも681～683・685・686は秋間と考えられ、684は栗附の可能性が高い。687～691・693・694・697は吉井もしくは栗附に近い値を示し、9世紀代の試料は大半が、従来の窯跡群試料の分布範囲の中に収まる。しかし、10世紀以降になると既分析の範囲から外れるものが多い。S r / R b値が2～5、C a / K値が1.5～2.5の中に分布する試料のうち

第17表 熊野堂遺跡II地区試料分析値一覧表

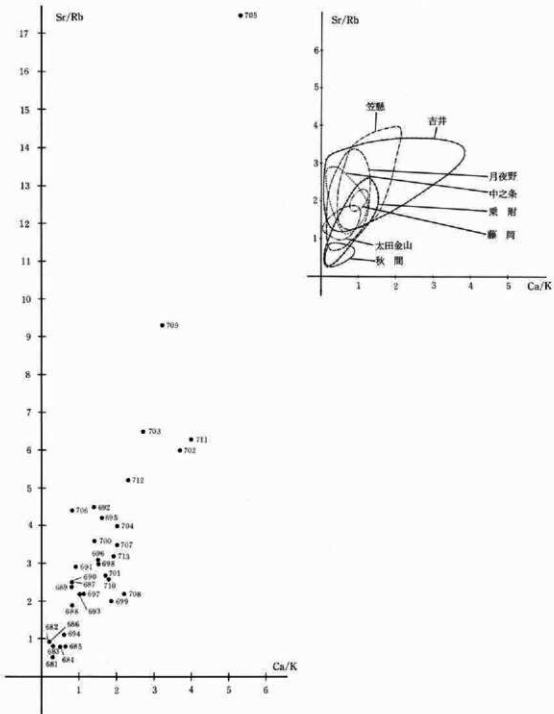
試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiD ₂ (%)	CaO(%)	MgO(%)	K ₂ O(%)	Ca/K(%)	Sr/Rb(%)
681		69.45	18.55	4.73	0.74	0.51	1.32	1.98	0.53	0.28
682		68.56	18.25	5.48	0.79	0.44	1.41	1.89	0.92	0.24
683		72.38	13.47	6.12	0.88	0.50	1.16	1.84	0.80	0.29
684		69.35	20.16	3.48	0.88	0.61	1.38	1.55	0.77	0.45
685		72.67	16.89	4.20	0.79	0.61	1.15	1.10	0.80	0.61
686		69.35	17.75	4.65	0.79	0.48	1.69	2.22	0.88	0.24
687		67.56	16.59	4.54	0.76	1.05	1.25	1.61	2.45	0.81
688		69.64	16.37	4.27	0.71	1.01	1.42	1.65	1.92	0.76
689		66.34	15.61	6.65	0.78	1.03	1.63	1.60	2.44	0.80
690		70.60	14.41	3.75	0.65	1.15	1.48	1.87	2.46	0.78
691		70.02	16.79	4.42	0.78	1.05	1.37	1.54	2.85	0.87
692		68.34	14.28	5.33	0.69	1.57	1.25	1.45	4.50	1.40
693		61.72	16.93	8.80	0.99	1.50	2.52	1.93	2.20	1.02
694		67.35	15.31	7.41	0.76	0.81	0.99	1.67	1.17	0.59
695		62.47	16.78	6.61	0.89	1.89	2.15	1.51	4.17	1.64
696		62.23	17.64	6.09	0.94	1.56	1.87	1.38	3.13	1.45
697		66.54	20.08	7.11	0.84	1.11	1.75	1.28	2.20	1.07
698		70.02	15.23	4.42	0.78	1.98	1.04	1.80	3.00	1.46
699		63.87	21.88	7.14	0.98	1.24	1.22	0.85	2.00	1.77
700		63.79	19.81	7.33	0.93	1.19	0.98	1.08	3.60	1.36
701		64.92	21.12	4.61	0.94	2.09	2.16	1.69	2.67	1.65
702		65.05	18.40	7.33	0.97	2.45	1.62	0.84	6.00	3.72
703		74.54	14.71	4.12	0.62	2.01	0.83	0.95	6.50	2.70
704		73.58	14.52	3.86	0.65	1.84	0.92	1.17	4.00	2.62
705		64.79	21.79	5.48	0.89	2.68	1.22	0.62	17.50	5.29
706		70.29	13.49	5.90	0.79	0.97	1.04	1.59	4.38	0.75
707		67.68	18.93	5.33	0.90	1.74	1.28	1.11	3.50	2.00
708		71.11	16.57	4.42	0.91	1.97	1.46	1.16	2.20	2.19
709		62.48	20.07	7.44	0.95	2.85	1.74	1.19	9.33	3.16
710		62.22	20.07	5.41	1.17	1.86	1.68	1.32	2.60	1.83
711		63.65	14.32	9.03	1.03	2.79	1.76	0.90	6.25	3.97
712		67.94	15.12	7.14	0.82	1.90	0.92	1.06	5.20	2.27
713		62.85	16.57	6.84	0.81	2.13	1.41	1.47	3.20	1.91

696・698・699・701・708・710・713などは、既分析の中に同じ値を示すものはないが、吉井の範囲を大きく見ればその中に分布するといえ、吉井窯跡の支群の可能性もある。692・695・700・704・706・707は、既分析の試料には見られないが若干まとまる傾向を見せ、胎土の質感は似ているといえる。

やはり、10世紀以降の須恵器の多くは、分析結果から見ても従来の窯跡で製作されたものではないと考えられるが、ある程度集中する傾向も窺われ、産地同定し得ると思われる。今回は、時期的な分布をみるのに主眼をおいており、同一型式のものを十分に選別出来なかったのだが、今後はさらに10・11世紀を対象に、形態・胎土のグルーピングできるような試料を中心として分析を試みたい。



第63図 群馬県内の主な古窯跡のSr/RbとCa/K比率



第64図 熊野堂遺跡のSr/RbとCa/K比率

第2節 熊野堂遺跡II地区出土の馬歯について

群馬県立大間々高等学校 宮崎重雄

I、はじめに

熊野堂遺跡II地区は群馬県高崎市大八木町に所在し、昭和51年～57年に新幹線の建設工事にともなって発掘調査が行われ、弥生時代から平安時代にいたる遺跡であることが判明した。この際、平安時代前期（9世紀前半）の住居址、土坑などから多数の馬歯が出土し、埋存状況は祭祀遺構である可能性の高いことを示している。当時、神聖視されていたとされる馬と人間の関わりを知る上で、重要な遺跡と考えられるので本稿では、個体数、年齢、形態的特徴などを明らかにし、後日の考察の基礎資料としたい。

本報告は、次のような調査方法もちいてまとめたものである。

- ①計測器具は主として1/20mmのノギスを使用した。
- ②馬歯の計測法は Eisenman et al¹ を主に用いたが、下顎白歯については、歯冠幅は前葉、後葉それぞれ計測し、下内歯幅は筆者が追加した。また上顎白歯については、中附歯幅を筆者が追加し、原歯の形は改変した。歯冠高は上顎白歯、下顎白歯とも Levin²の計測法も追加した。一般的に白歯は歯根側へ歯冠長、歯冠幅が減少するので、各白歯とも歯根分岐点から3cm咬合面よりのところでの計測値も記録した。
- ③馬の白歯の咬合面の名称は Simpson (長谷川、原田)³によった。
- ④馬の年齢推定は、切歯については Goubaux⁴に従い、白歯については、Levin²の歯冠高（咬耗度）による年齢推定法を用いてみた。ただし、これはイギリスのポニーを調査対象にしたものであり、これをそのまま応用することには問題があるが、いくつかの日本の古代馬の例で、切歯の咬耗度から得られた推定年齢とこの方法で求めた年齢とも間に大きな隔たりのないことが分かっている。少なくとも、幼駒馬、牡駒馬、老駒馬という大区分よりは、有効な推定年齢が得られるといえよう。しかし、第二前白歯に限っては、他の白歯で得られた推定年齢より、隔たりが大きすぎ、除外した。また、5才以下の幼駒馬では、この方法より歯の萌出期を基準にしたほうが、精度が高く、ここでは対象外とした。歯の萌出期を基準にした場合は Levin²を参考にしている。
- ⑤日本の在来馬の体高による分類は林田⁵にしたがった。
- ⑥ウシの白歯による年齢推定は Ducos⁶の方法を用いてみた。
- ⑦注は引用文献を意味し、本文、表とも共通して使用した。

II、本文

A、3号竪穴状遺構

3号竪穴からは3本分のウマ (Equus caballus) 下顎白歯片が検出されている。バラバラの破片になっていて歯種の判定に困難を伴うが、歯冠高の差、咬合面の傾斜などから判断して、3本の歯は同一個体に属す第4前白歯、第一後白歯、第二後白歯であるとみられ、それぞれの歯の歯冠高から、7～8才の年齢が推定される。第四前白歯の歯冠長は28.1mmと計測でき、もしこの歯種判定が正しいと

すれば、大形の馬であったことが予想される。第四前臼歯、第一後臼歯の舌側面には近縁心方向に溝状の凹みが走っている。歯の形成不全症にかかった可能性も考えられ、あるいは成長期に栄養障害か、重病におかされたことがあったのかも知れない。

B、36号住居址

歯種の不明の1本分のウマの右下顎臼歯の細片からなる。歯冠高が76.0mmあることから6才以下の若齢の馬であると推定される。

C、50号住居址

歯種不明の1個体分のウマの左下顎臼歯からなる。咬耗されている臼歯が1本だけ確認できるが、これ以外の歯は未咬耗である。下後錐谷長や下内錐幅の計測値からして、咬耗されている臼歯は、第一後臼歯の可能性が強い。この歯種判定が正しいとすれば、2～3才というきわめて若い年齢が予想される。

D、69号住居址

この住居址からは、推定7個体分の馬骨が出土している。ここでは、各馬を1号から7号馬と名づける。

1、1号馬

上顎の切歯と左右の各臼歯が残存する。歯槽骨は残存していないものの、上顎骨、切歯骨に植立していた状態を保って、埋存している。もとは頭蓋骨もあったのであろうが、現在は腐蝕してしまっており残っていない。四肢骨など、その他の骨はまったく見当たらず、遺構の大きさ、埋存状況からみて、もともと存在していなかったとみられる。咬合面を下に向け、歯列の方向は北から50°西で、前部を北西に向けている。切歯の咬耗度及び臼歯の歯冠高（咬耗度）から推定して、7才前後の個体と考えられる。犬歯が検出されており、オスと判断される。全臼歯列長の大きさから見ると、中型在来馬の木曾馬相当の馬格が予想される。病変を示すような部位は見当たらない。

2、2号馬

下顎の左の全臼歯と、これと対をなすと思われる右側の臼歯からなる。左側は歯槽骨が残っていないものの、下顎骨に植立していた状態を保っている。歯列の方向は、1号馬とほぼ同じで、北50°西である。しかし、1号馬とは反対に前部を北東方向に向けて横たわっており、咬合面が1号馬に接している。右側の臼歯は、完存しているものはなく、個々の歯は散在しているが、全体的に南北方向に配列している。年齢は7才前後と推定されるが、1号馬の上顎臼歯とは、全臼歯列長の計測値が大きく違っており、同一個体のものとは言い難い。全臼歯列長の大きさは、本馬が小型在来馬のトカラ馬より、やや小形のウマであることを示唆している。

3、3号馬

第二前臼歯を除く、右下顎の全臼歯からなる。歯の大きさ、咬耗度及び色調から判断して、1、2号馬とは別個体であることは明らかである。全体的な歯の配列は1、2号馬とは直角の方向を向き、横倒しになっている。一部の歯が、2号馬の最前位（近心）の歯の上に乗っているため、2号馬より後ろで埋められたものであることが分かる。相接して出土したものの、各歯の配列の順序には乱れがあり、歯槽に植立していた状態で埋められたものではない。あるいは二次的に埋めなおされたのかも

知れない。性別は不明である。歯冠高から9～10才程度の年齢が推定される。歯冠長の大きさは、中型在来馬の木曾馬程度の馬格であることを示している。

4、4号馬

第二、第三前臼歯を除く、左下顎の臼歯からなる。歯の大きさ、左・右及び色調からして、3号馬及び後述の各馬とは別個体であることは明らかである。全体的な歯の配列は、東西方向であり、咬合面を北に、前方を東に向けて、横たわっている。歯槽骨は残存していないものの、下顎骨に植立していた状態を保って、埋存していた。性別を判断できる材料はないが、歯冠高は6～7才前後の年齢であることを示している。各歯の歯冠長から、中型在来馬のなかでも大きいほうに相当する馬格であったと推察される。

5、5号馬

第二、第三前臼歯を除く、左下顎の臼歯からなる。歯の大きさ、咬耗度及び色調からして、どの個体とも別のものであることは明らかである。歯冠高は7才前後の年齢であることを示している。第三後臼歯、第二後臼歯は並列していたが、あとの2本の歯は敷石の南北にそれぞれ離れて埋存していた。二次的に動かされた可能性が高い。歯冠長から中型在来馬相当の大きさのウマであることが予想される。

6、6号馬

幾つかの臼歯を欠く複数の上顎の臼歯で、バラバラに埋存していたが、敷石の北側に右側の臼歯が、南側に左の臼歯が存在し、それぞれある程度のまとまりをもって埋存していた。咬耗は第二後臼歯でわずかに始まり、第三前臼歯にも、咬耗し始めた痕跡がみられる。その他の歯は第一後臼歯を除いて咬耗された様子はない。この様な状況から、3～4才の年齢が推測される。犬歯が確認できず、性別は不明である。また、この個体の年齢に見合う下顎の臼歯が見当たらないため、本住居址のどの下顎臼歯の個体とも別個体である。歯の大きさから見ると、小型在来馬程度の大きさの馬であったであろう。

7、7号馬

敷石の下部から出土した左下顎の全臼歯からなる。右側の臼歯の3号馬とは、咬耗度、計測値、色調などから対でないことは明らかで、どの個体とも別の7号馬とした。第二前臼歯だけは少し離れているが、ほぼ東西方向に配列し、咬合面を南に、前方を東に向けて、横たわっている。歯槽骨は残存していないものの、下顎骨に植立していた状態を保って、埋存していた。性別を判断できる材料はないが、歯冠高は7才前後の年齢であることを示している。各歯の歯冠長から、中型在来馬程度の馬格の持主であったと推察される。

8、8号馬

敷石の西南方向の少し離れた位置に、左下顎の第三乳前臼歯が出土しているが、既述のいずれの左下顎臼歯にも未咬耗のものはなく、これらの下顎骨に植立していた乳前臼歯ではない。一つの可能性として、未咬耗の歯をもつ6号馬の下顎の乳前臼歯とも考えられるが、下顎の臼歯が一つも見つからない6号馬と同一個体とするには、かなりの無理がある。推定年齢は3～4才である。

9、9号馬

敷石の北西側に、東西方向に配列し、前部を東に、咬合面を南に向けて横たわる。全臼歯の残存した右の下顎臼歯が出土しているが、写真鑑定のみで、詳しい観察が困難である。したがって、他の個体との関係や、年齢(咬耗度)、性別、形態などは明らかでない。4号馬あるいは7号馬の左下顎臼歯と咬耗度になっているようであるから、このどちらかと対をなすのかもしれないが、まったく別個体である可能性もあり、ここで仮に9号馬としておく。

10、69号住居址出土馬骨のまとめ

69住居址からは8～9個体分の馬骨が出土しているが、遺存しているのは歯のみで、歯以外の骨は出土していない。歯がもっとも腐蝕されにくく、最後まで残存されやすいのは事実であるが、四肢骨、体幹骨の痕跡が骨粉すら残っていないという状況や遺構の大きさが一体まるまる納めるには小さすぎるなどから、始めから頭だけしか持ち込まれていなかったと考えるほうが妥当のようである。狭い範囲内に8～9頭ものウマを全身埋めるには、その都度、大きく掘り込まなければならないし、すでに埋存している馬骨は、この時、外に掘り出されるか、骨格の配列を大きく乱されるかしたであろう。しかし、歯槽に直立した状態を保って埋存していた歯が多く、歯列に乱れのあるものでも、遠くへ離れ離れになっているというのではなく、比較的小範囲にまとまっていること、後述のように臼歯列がある規則性のある方向をもって埋存していることなども、頭だけしか持ち込まれなかったことを指示している。

埋存していた馬歯で、確実に、上顎歯・下顎歯が対になるといえるものはなく、下顎歯だけでみても左・右が対になっているものは2号馬にその可能性が高い以外は存在しない。上顎骨と下顎骨は別々に切り離されて、そのどちらかが持ち込まれ、しかも下顎歯の場合は、さらに左・右が切り離され、その片方だけが、持ち込まれるということが行われたようである。また、4号馬、7号馬、9号馬の下顎臼歯の配列が、ほぼ、東西方向を向いているのにも何か意味があるように思える。1号馬の上顎歯列と2号馬の下顎歯列が近接して同一方向にならんでいること、3号馬の下顎歯列がこれに直角に並んでいることも意味がありそうである。8～9個体の馬のうち、性別の判るのはオスが1頭だけで、あとは不明である。年齢は3～4才から9～10才にいたる比較的若い個体ばかりで、とうてい老衰で死亡する年ではないし、遺存している歯で見ると、重病におかされて死亡したというような様子もうかがえない。古代に神聖視されていたとされる馬骨がこの様な埋葬をされていたことは、当時の祭祀のありかたについて、多くのことを教えているように思える。

E、遺構外

遺構外からは同一個体のもと思われる臼歯が6本分と、歯種不明の、未萌出の臼歯数本と乳臼歯、切歯の破片が出土している。歯種判定の可能な歯の内訳は、第一後臼歯が上顎、下顎とも左右それぞれ2本づつ・計4本と左上顎第二後臼歯、下顎左第三乳前臼歯である。咬耗は、第一後臼歯ではすでに咬合面の全面に及んでいるが第二後臼歯では、前歯、後歯、次歯、原歯にごくわずかの咬耗が始まったばかりであり、前述の6号馬より本馬の方が少し若いことを物語っている。推定年齢はおよそ3才である。性別は不明である。体高は臼歯の大きさから小型在来馬程度と考えられる。

F、129土坑

家牛(Bos taurus)の下顎骨付きの臼歯6本が咬合面を上に向けて出土している。その内訳は、左・

右の第二後臼歯、第三後臼歯、左の第一後臼歯、右の第四後臼歯である。1 m²余の土坑であり、まるまる一体分を納めるには小さすぎるし、上顎臼歯は検出されてないため下顎骨だけが埋葬されたと考えられる。歯列をほぼ南北に向け、前部が南側にある。右側は咬合面を上に向け、左側は咬合面を東に向けて横たわっていた。当初は、下顎に全部の歯が植立していた状態で埋存していたものと思われる。歯冠高の最大歯冠幅にたいする比（歯冠高指数）は第二後臼歯で約1.8、第三後臼歯で約2.1で、Ducosの歯冠高指数と年齢との関係図に当てはめてみると、9～10才程度の年齢が得られる。Ducosはゾウマ牛を研究対象としていて、品種も飼料の内容も違うこの牛から得られたデータを日本の古代牛に応用するのは、妥当性を欠くが、日本の古代牛あるいは在来牛にこのような研究例がない状況では、一つの目安にするのならば許されるであろう。日本の現世牛と歯の大きさを比べてみると、歯冠長は後臼歯が黒毛和牛⁷よりは大きく、見島牛の雌雄⁸の中間の大きさである。また、他遺跡の古代牛との比較では、長野県佐久市の奈良～平安時代の池畑牛⁹、群馬県前橋市の奈良時代の下東西牛⁹、東京都港区の伊皿子牛⁷のいずれよりも大きい。しかしその割に、歯冠幅の小さい個体であった。性別は不明である。

Ⅲ、おわりに

熊野堂遺跡のようにウマとウシが埋存していて、祭祀跡を思わせる9世紀前後の遺跡が他にもいくつか知られている。群馬県高崎市の田端遺跡、渋川市有馬条里遺跡、長野県佐久市の池畑遺跡などその例である。これらの各遺跡の共通性、相違点等を詳細に分析した当時の動物祭祀にかんする考古学的考察は、考古学分野の人の手によってなされる予定である。

本稿をそうするに当たって、群馬県埋蔵文化財調査事業団の女屋和志雄氏はじめ関係各位には多大なお世話をいただいた。ここに記して衷心よりお礼申し上げる次第である。

引用文献

- 1) Eisenmann, V, Alberdi, M. T, De Giul, C. and Staesche, u. (1988) Studying fossil horses
E. j. Brill
- 2) Levin, Marsha. A (1982) The use of crown height measurements and eruption-wear sequences
to age horses teeth In Wilson, B, Grigson, C and Payne, S. (eds) , Ageing and Sexing
Animal Bones from Archa eological Sites, 223-250. Bar British Series 109
- 3) 長谷川義和、原田俊治 (1979) 馬と進化, どうぶつ社、東京。
- 4) Goubaux, A and Barrier, G. (1892) The Exterior of the Horse, J. B. Lippincott. Phil
adelphia.
- 5) 林田重幸 (1978) 日本在来馬の系統に関する研究, 日本中央競馬会。
- 6) Grigson, C. (1982) Sex and age determination of some bones and teeth fo domestic
cattle: Areview the literature. In Wilson, B, Grigson, C and Payne, S. (eds) ,Ageing and
Sexing Animal Bones from Archaeological Sites, 223-250. BAR British Series 109. より引
用
- 7) 中西川駿、松元光春 (1981) 第2号方形周溝墓西溝出土の家牛 (Bos taurus) 頭骨
「伊皿子貝塚遺跡」、476-485、日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会。
- 8) 宮崎重雄 (1986) 長野県佐久市池畑遺跡の馬と牛の骨について、「池畑」、50-60 佐久市教育委
員会・佐久埋蔵文化財センター
- 9) 大江正直 (1987) 下東西遺跡出土の獣歯、獣骨について、「下東西遺跡」、群馬県教育委員会・
群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 10) 大江正直 (1988) 田端遺跡出土の獣歯、獣骨について、「田端遺跡」、群馬県教育委員会・群馬
県埋蔵文化財調査事業団
- 11) 金子浩昌 (1983) 有馬条里遺跡出土の馬歯・牛歯。「有馬条里遺跡」、280-283群馬県渋川市教育
委員会

第8表 熊野堂遺跡II地区69号住居址馬歯計測値表

I 69住居址

(単位: mm)

左 上 顎 白 歯		E-6	E-2	E-3	E-4	E-5	E-1
		第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯
歯冠長	咬合面	39.6	30.2	29.2	26.0	26.5	23.4
	中央	36.3	27.7	26.7	25.0	24.7	25.8
歯冠長	咬合面	23.6	27.0	26.8	27.0	25.4	19.3
	中央	23.4	27.0	27.7	26.7	25.1	23.0
原歯幅	咬合面	10.4	14.0	13.7		14.8	12.4
	中央	9.4	12.8	13.0	12.7	14.1	13.7
歯冠長	LEVIN EISENMANN	44.0 37.0	58.5 58.0	59.7 67.0	50.6 56.0	61.3 71.0	59.0 69.0
	咬合面の傾斜	103	92	85	90	85	68
エナメル褶曲数		2211	1311	1221	0220	2222	-20-
中附齧幅	咬合面	5.1	4.1	3.7	3.2	3.0	2.2
	中央	4.0	4.2	4.1	3.3	3.6	3.7
原歯型		2	2	2	2	2	4

(単位: mm)

右 上 顎 白 歯		D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6
		第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯
歯冠長	咬合面	33.4+	30.5	29.3	25.3	26.1	22.3
	中央	33.0+	27.9	27.0	24.5	25.0	24.9
歯冠幅	咬合面	24.0	26.6	26.9	26.7	25.2	19.3
	中央	23.4	26.8	27.7	26.9	25.6	22.5
原歯幅	咬合面	19.3	14.0	13.7	12.7	14.9	12.4
	中央	19.0	12.4	13.1	12.2	14.7	13.5
歯冠高	LEVIN EISENMANN	45.0	57.8	48.0+	51.0	50.0+	57.0
	咬合面の傾斜	100	92	85	88	85	65
エナメル褶曲数		2211	1421	1231	1241	1431	00=0=
中附齧幅	咬合面	5.3	4.6	3.4	3.0	3.0	2.2
	中央	5.2	4.4	4.0	3.2	3.3	3.8
原歯型		2	2	2	2	3	4

I 69住居址

(単位: mm)

上顎白歯	B-25	B16-1	B-28	B16-2	B-26	
	第一後臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第二後臼歯		
	L	R	L	R	L	
歯冠長	咬合面 中央	26.0 23.6	29.0 23.8	27.2 23.9	28.0 24.3	
歯冠幅	咬合面 中央	21.9+	24.8 24.6	22.8 24.4		
原歯幅	咬合面 中央		11.2 10.5	12.5 12.4		11.8 11.3
歯冠高	LEVIN EISENMANN	71.0 77.0	71.0 76.3	73.5 81.2	76.1 78.3	71.0
咬合面の傾斜		82	83	73	75	85
エナメル褶曲数		1321	1211			
中臼歯幅	咬合面 中央	3.1 4.1	3.5 4.2	3.0 4.4	3.0 4.5	
原歯型			2	2		

左下顎白歯計測値

(単位: mm)

69住	F-6 第二前臼歯	F-5 第三前臼歯	F-4 第四前臼歯	F-3 第一後臼歯	F-2 第二後臼歯	F-1 第三後臼歯	
歯冠長	咬合面 中央 前葉	29.4 28.8 16.3+	25.0 24.8 13.2	24.4 22.8 12.3	22.6 22.4 12.3	22.4 21.6 11.7	26.4 26.6 10.9
歯冠幅	中央 後葉 中央		13.3 12.5 13.2	12.8 12.5 12.4	13.3 11.8 11.5	11.1 11.1 10.7	10.9 9.7 10.0
歯冠高	LEVIN EISENMANN	39.8 43.0	50.5 52.4	64.5 66.0	53.3 53.7	62.3 64.7	47.0 60.0
下後臼歯長		7.5	9.6	9.4	7.9	8.4	7.6
下内臼歯長		15.0	12.7	11.0	8.3	9.6	10.4
double last長	咬合面 中央	12.3	13.4	11.7	11.9	12.1	10.4
咬合面の傾斜		90	85	82	80	75	65

左下顎臼歯計測値

(単位: mm)

69 住		第二前臼歯	G-3 第三前臼歯	G-1 第四前臼歯	G-2-2 第一後臼歯	G-4 第二後臼歯	G-2-1 第三後臼歯
歯冠長	咬合面		28.7	26.7		26.3	24.8+
	中央		28.9	26.6		25.6	
	前葉		14.9	14.5		13.6	
歯冠幅	中央		14.7	14.1		12.9	
	後葉		14.5	14.2		12.3	
	中央		14.4	14.1		11.9	
歯冠高	LEVIN		38.3	45.5	35.6+	46.0	48.6
	EISENMANN		42.2	55.0		48.5	49.6
下後齶谷長			9.7	9.1		8.7	8.4
下内齶谷長			12.9	12.2		9.5	11.6
double knot長	咬合面		15.7	14.2		13.2	12.0
	中央		16.4	14.7		13.3	12.4
咬合面の傾斜			90	90	80	85	68

左下顎臼歯計測値

(単位: mm)

69 住		B-21 第四前臼歯	B-20 第一後臼歯	B-19 第二後臼歯	B-18 第三後臼歯	B-9 R 第二前臼歯	B-10 R 第三前臼歯	B-36 L 第三前臼歯
歯冠長	咬合面	29.5	28.0	28.6	29.6	28.2+	24.6	28.0
	中央	28.0	27.0	26.6	32.1		24.8	
	前葉	15.2	13.2	14.5	11.0			
歯冠幅	中央	15.3	14.5	12.7	12.1			
	後葉	16.3	13.3	13.0	10.5		12.4	
	中央	16.3	13.5	12.0	11.5		12.8	
歯冠高	LEVIN	71.1	58.0	63.8	48.4+	36.0	50.4	19.0
	EISENMANN	71.4	61.7	68.3	53.8+		52.0	
下後齶谷長		11.8	9.7	9.9	8.8	7.0	9.1	9.3
下内齶谷長		15.2	10.8	11.0	9.3	14.3	13.2	5.4
double knot長	咬合面	17.0	15.2	14.4	14.2	12.2	13.3	10.5
	中央	17.5	14.5	14.6	14.0	12.1	14.0	
咬合面の傾斜		88	80	85	80?	80	83	

左下顎臼歯計測値

(単位: mm)

69 住	B-34 第二前臼歯	B-1 第三前臼歯	B-33 第四前臼歯	B-32 第一後臼歯	B-31 第二後臼歯	B-30 第三後臼歯
歯冠長 咬合面 中央 前葉	28.3+		25.8 24.8 13.7	24.1 23.2 13.4	24.0 23.3 12.5	27.5 28.0 11.5
歯冠幅 中央 後葉 中央			14.0 14.2 14.0	13.1 12.2 11.8	11.9 12.2 11.1	11.3 10.0 10.4
歯冠高 LEVIN EISENMANN	39.8 35.0		65.7 65.0+	57.2 58.5	61.0 61.3	57.2 62.0
下後齶谷長	8.0		9.4	9.5	8.6	8.2
下内齶谷長	12.4		13.3	9.9	10.8	10.2
double knot 長 咬合面 中央	14.5 13.8		13.8 14.7	13.1 13.4	11.7 12.4	11.7 11.6
咬合面の傾斜	95?		86	78	78	69

左下顎臼歯計測値

(単位: mm)

69 住	B-23 P ₄	B-22 M ₁	B17-1 M ₂	B17-2 M ₃
歯冠長 咬合面 中央 前葉	25.5+ 25.2+ 13.1	25.6	23.7 23.9 12.4	24.0+
歯冠幅 中央 後葉 中央	14.4 12.7 13.7	12.8?	12.5 10.8 11.5	
歯冠高 LEVIN EISENMANN	62.6 64.0	54.3 57.0	66.1 73.2	64.5
下後齶谷長	9.7		8.8	
下内齶谷長	14.7		11.6	11.6
double knot 長 咬合面 中央	15.7 15.8	15.8 15.8	12.3 12.7	11.9 12.3
咬合面の傾斜	87	90?	80	75

下顎臼歯計測値

(単位: mm)

	36住居	50住居 M ₁ ? R	3号鑿穴48 P ₁ ? L	3号鑿穴49-1 M ₁ L	3号鑿穴49-2 M ₂ L
歯冠高			28.1		
歯冠高 (LEVIN)		83.9	57.1	53.5	59.0
下後齧谷長		9.9			
double knot 長 (咬合面)	76.0				
咬合面の傾斜			86	75	70

II 遺構外

(単位: mm)

上顎臼歯	第一後臼歯 L	第一後臼歯 R	第二後臼歯 L
歯冠長 咬合面 中 央	28.0 23.7	27.7 24.0	25.0 24.2
歯冠幅 咬合面 中 央	23.2 23.8	23.3 23.8	16.6 24.0
原齧幅 咬合面 中 央	13.4 11.6	13.7 11.9	12.5 13.2
歯冠高 LEVIN EISENMANN	67.3 72.6	67.5 72.9	54.0 65.0
咬合面の傾斜	82	82.0	73.0
エナメル褶曲数	1, =, 2	1, =, 1	
中附齧 咬合面 中 央	2.6 3.4	2.6 3.4	2.6 3.7
原齧型	3	3	4
原齧湾入	2.5	2	2

II 遺構外

(単位: mm)

下顎臼歯	第三乳臼歯 L	第一後臼歯 L	第一後臼歯 R
咬合面 歯冠長 中 央 前 葉	30.0 12.5	30.5 11.2	27.7+ 25.7 10.6
中 央 歯冠幅 後 葉 中 央	12.8	13.8 11.1 12.9	13.1 12.6
歯冠高 LEVIN EISENMANN	12.5 12.3	68.3 73.0	70.0 70.0
下後齧谷長	8.7	10.0	10.0
下内齧谷長	10.9	13.0	12.7
double knot 長 咬合面 中 央	15.5	14.3 13.1	14.4 13.2
原 齧 型	85	80	83

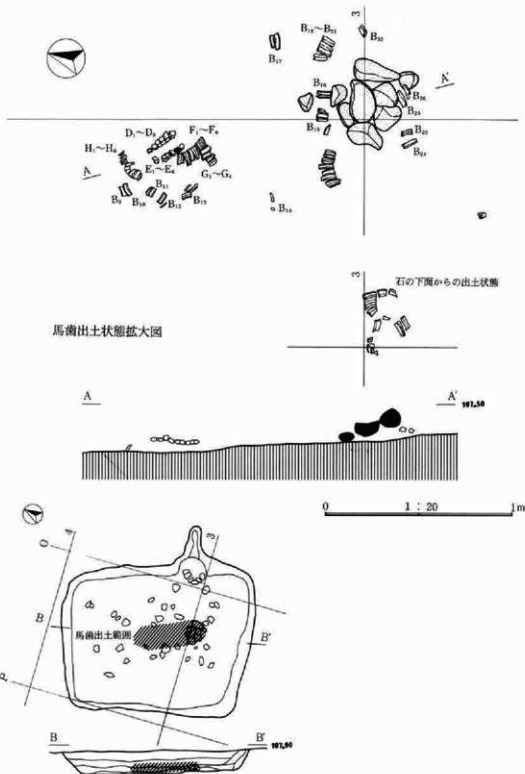
III 牛下顎臼歯計測値・比較表

遺跡名		熊野堂		※池畑*	下東西*	※※伊皿子*	見島牛*		黒毛和牛*	
		雌雄					♂	♀	♂	♀
		時代			奈良末～平安	奈良前期	弥生中期	現生		
第四前臼歯	歯冠長		22.2	20.3	20.8	22.1	21.2	21.1	18.3	19.3
	歯冠幅	咬合面	13.2	10.9		13.5	12.2	14.0	13.5	12.3
		最大	13.2							
歯冠高	舌側	17.6	23.2	8.3						
	頬側	20.4								
第二後臼歯	歯冠長		27.6	27.1	22.3	27.1	28.0	25.6	24.6	25.6
	歯冠幅	咬合面	14.6	14.6			17.0	16.7	16.2	16.0
		最大	16.3							
	歯冠高	舌側	29.0		9.1					
頬側		25.2+	28.4							
第三後臼歯	歯冠長		41.5	38.2	37.8	39.5	42.3	39.6	36.9	37.1
	歯冠幅	咬合面	13.9	14.8			16.3	16.0	15.8	15.2
		最大	17.1							
	歯冠高	舌側	36.8							
頬側		30.8*	23.1	10.1						

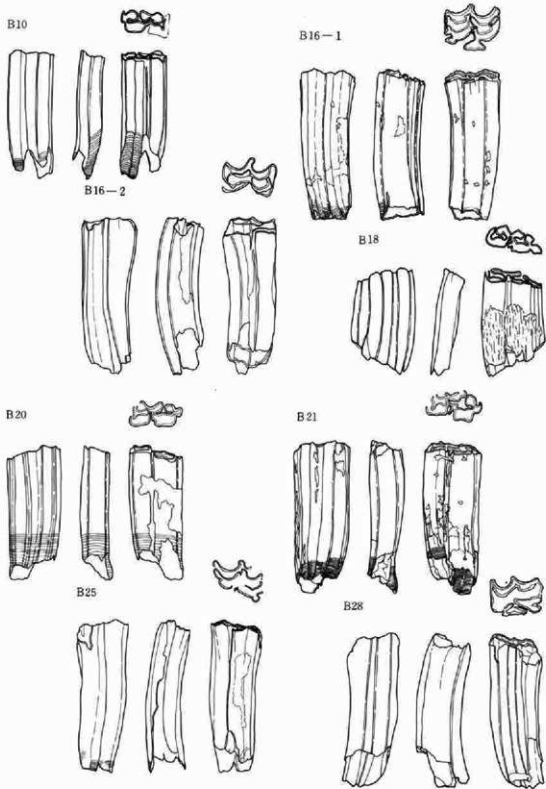
*臨床的歯頸部から

**筆者の算出による左右または複数個体の平均

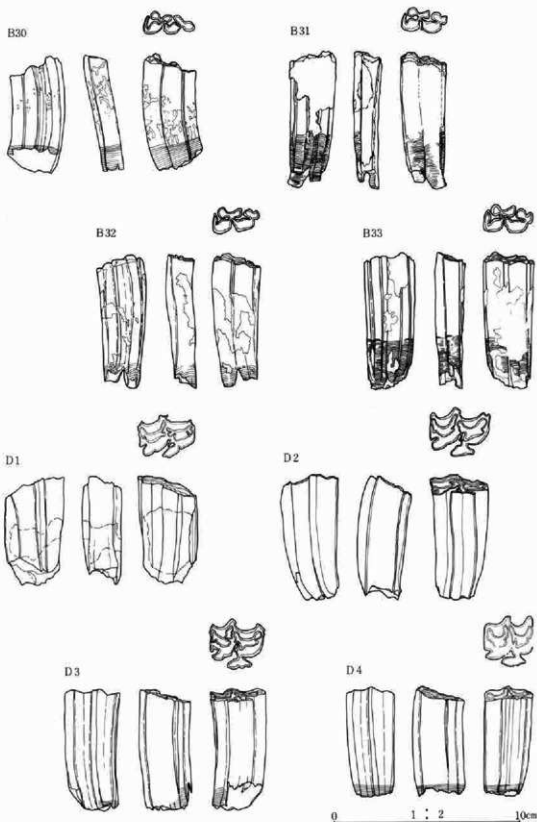
単位: mm



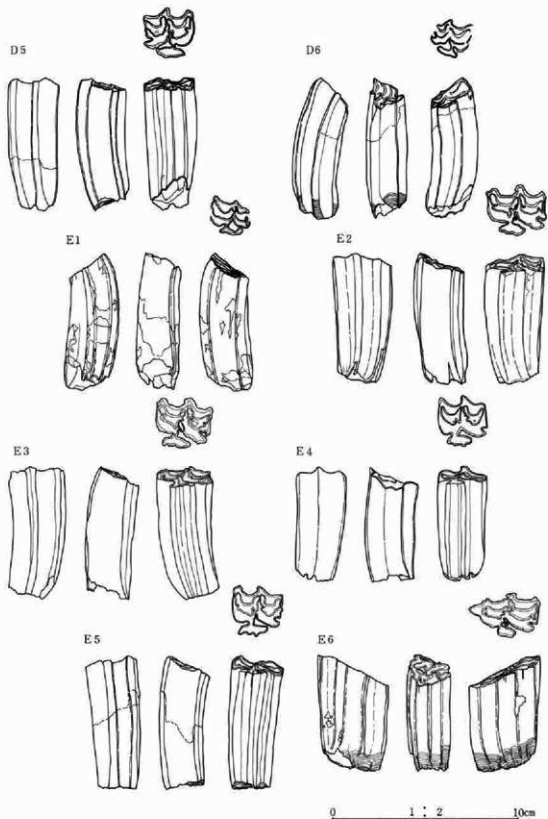
第65図 69号住居址馬歯出土状態図



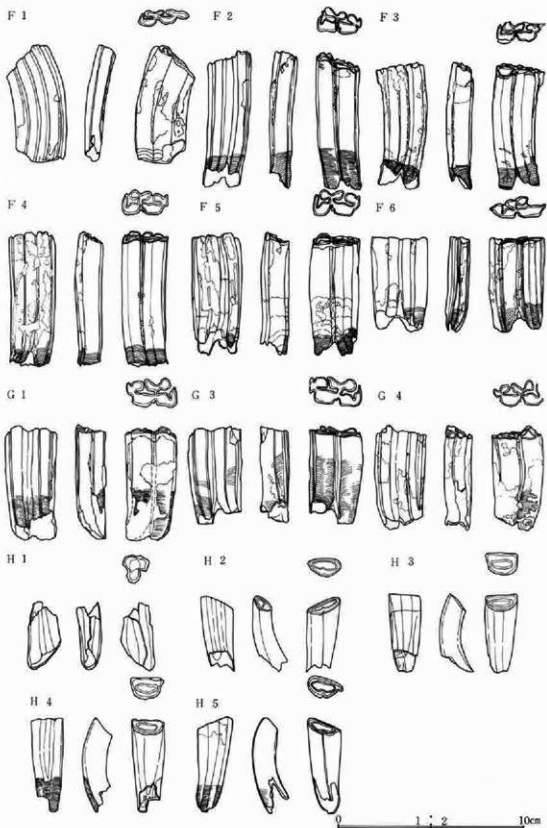
第66図 馬骨集成図69住(1)



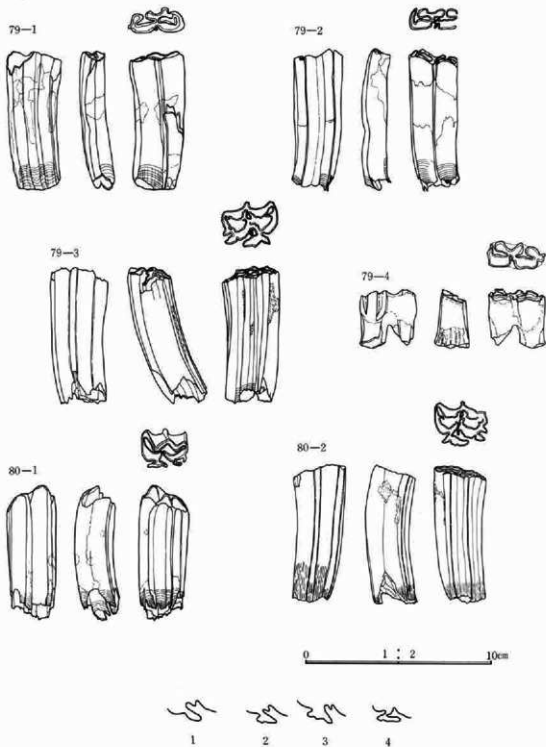
第67图 馬齒巢成虫69住(2)



第68図 馬歯集成図69住(3)

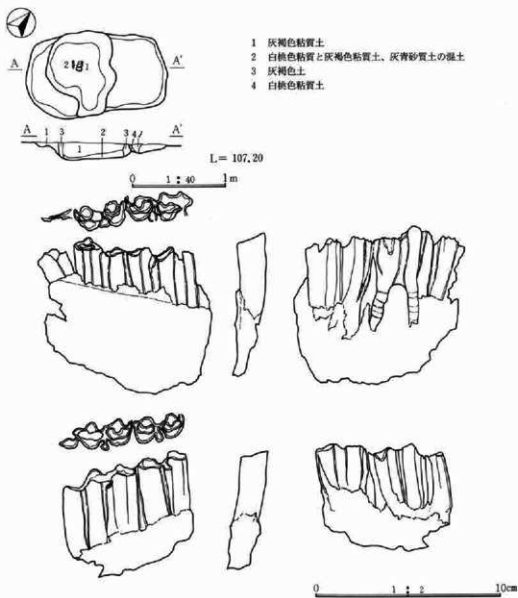


第69圖 馬齒集成圖69住(4)



クマの臼歯原歯型

第70図 馬歯集成図



第71図 192号土坑平面図、牛頭図

第3節 プラント・オパール分析による群馬：熊野堂遺跡水田址の考察

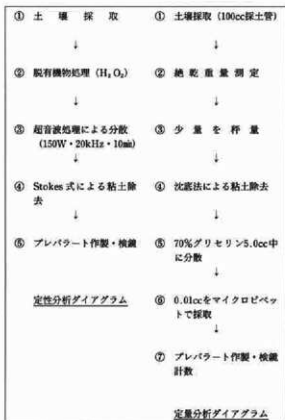
宮崎大学 藤原宏志

熊野堂遺跡は日高遺跡、新保遺跡などとともにも前橋台地における古代水田址様遺構をとまなう遺構として注目されている。これらの古代水田址は他の地域（福岡・板付遺跡、滋賀・服部遺跡）で最近検出された古代水田址とは様相を異にしている。前橋台地における古代水田址様遺構の主な特徴は、①、火山灰の堆積した台地上に立地し、火山灰を耕土にしていること、②、畦畔様遺構に区切られた区画が極めて小さく、その数が多いことである。火山灰台地における開田には高度な水利技術を要するのが通例であり、本遺跡における水田様遺構でイネが栽培されていたとすれば古代における稲作技術を考える上で貴重な資料をもたらすことになるであろう。本分析の主な目的は水田様遺構でイネが栽培されたかどうか、また、その水田様遺構で生産されたイネ穀総量がどれくらいであったかを推量することである。

分析方法および試料

プラント・オパール分析法はイネ科植物を対象とした古代植生分析法である。イネ科植物の葉身には機動細胞珪酸体と呼ばれる厚いガラス質で覆われた特殊な細胞がある。この機動細胞珪酸体は植物種によりその断面形状が異なり植物種判別のkeyになる。また、厚いガラス層でできているため、植物体が土中で酸化分解した後もその形状は変わらず土粒子の一種として長期間残留する。このような植物に起源する土粒子はプラント・オパールと総称されている。プラント・オパール分析は遺跡土壌等に含まれる機動細胞プラント・オパールを検出し、当時のイネ科植生の種類・生育量を推定するものである。

分析過程は右図のダイアグラムでしめしたとおりである。



分析用土壌試料は定性分析試料10点・定量分析試料6点であったが、より詳細な考察を行うため、定量分析点数を11点に増やした。

主な試料採取地点の土柱図と採取位置を第72図に示した。なお、試料は100cc採土円筒を土層に対して垂直に打ち込んで採取し、後日仮比重を計量した。

分析結果

VI層を除く各層にイネ科植物に由来するプラント・オパールが検出された。イネ科植物種はイネ・ヨシ・タケ・ススキ・チガヤであり、古墳時代および弥生時代の水田址様遺構をともなうVIII層およびX層と両層に挟まれるIX層にはイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。検出された植物種のうち量的にも多く、また土層の堆積環境を推定するうえで有用なイネ、ヨシ、タケについて定量分析を行い、その結果をプラント・オパール密度として第72図に示した。

当該遺跡の立地する前橋台地は周辺火山の活動による火山灰の堆積層がある。この火山灰層は遺跡の時代区分に採用されるだけでなく、植物遺物の混合を防ぐフィルターとしても格好の役割を果たしている。図に示した各層のプラント・オパール密度分布をみると、I、II層にはイネ、ヨシ、タケのプラント・オパールが密度高く分布しているのに対し、III層の火山灰（浅間山、Bパミス、1108年）およびVI層の火山灰（榛名山二ツ岳6C後半）にはほとんどプラント・オパールが検出されない。このことは、もしプラント・オパールが重力や地下水の上下動あるいは生物的要因により垂直移動するものであれば、当然起こりえない現象である。すなわちこれらの自然的要因によりプラント・オパールの垂直移動が生じえないことの実証例といえるものであり貴重なデータと思われる。

植物体における機動細胞珪酸体の密度は植物種によって異なる。別にもとめた植物種ごとの機動細胞珪酸体密度と各土層の仮比重データを加え、プラント・オパール密度分析から、各土層に生育した各植物の単位面積（10a）あたり地上部乾物量、イネ乾量を第72図に示した。

第72図でみられるとおり、VIII層以下ではヨシの植物体量が極めて多いことが特徴的である。これはVIII層より下層が堆積した環境が湿潤であったことを示しており、VII層より上層ではかなり乾燥した環境に変化したことを示している。その後、IV層が堆積した時代はやや湿潤な環境であったことが推定される。

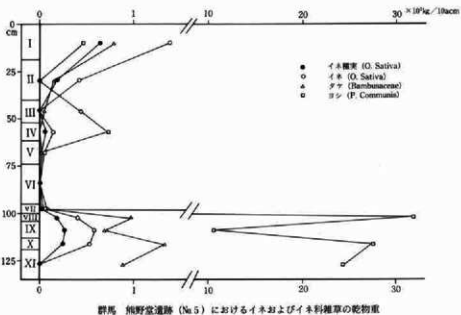
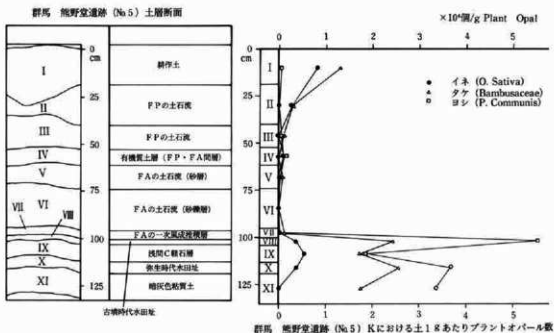
イネの生産量をみても、I層、II層が大きな値を示している。これは、近世以降の陸稲栽培によるものと思われる。VIII、IX、X層には明らかなピークが認められ、この時代にイネが生育したことは明瞭である。IX層はVIII層で検出された古墳時代水田面の作土層にあたるので、古墳時代水田で生産されたイネの総量はVIII層およびIX層に含まれるプラント・オパールの和から推算される。また、弥生時代の水田面はX層で確認されており、VI層ではイネ機動細胞プラント・オパールが検出されていないことから、弥生時代水田のイネ生産量はX層に含まれるプラント・オパール量から算出することにした。試算の結果、古墳時代水田で生産されたイネ乾物総量は3.01 t/10aであり、弥生時代水田では1.51 t/10aであることがわかった。

考察および結論

1. 本遺跡のⅧ層、Ⅹ層で検出された水田址様遺構は前節で述べたとおり、水田址とみて良からう。両水田におけるイネ類の総生産量はⅧ層：古墳時代水田の場合3.04 t / 10 a、Ⅹ層：弥生時代水田の場合1.51 t / 10 aである。ただし、これは次の諸点を前提としていることに留意されたい。①、当時の収穫法が穂刈りであったこと、②、堆肥などの形でイネワラを水田に還元する技術、慣行はなかったこと③この計算にもちいてイネの糶：ワラの比は現在のイネ品種（水稻：ミズホ）の値をもちいており、当時の古い品種より大きな値になっていること、この点については当時のイネ品種の特性に関する知見がない現状ではやむをえないとおもわれるが検討の余地があろう。なお、プラント・オパール定量分析で推定する生産量はその水田層（あるいは土層）が堆積する間に生育した総量を示すものであり、一年あたりの生産量を示すものではない。年あたり生産量は別にその水田層（あるいは土層）が堆積するに要した年数が求められれば算出できることになる。
2. ヨシの生育量が古墳時代および弥生時代の水田で極めて多いことが注目される。この傾向は本遺跡に限らず、両時代における他遺跡水田でもみられるところである。この点については次ぎの二要因が考えられる。一つは、この時代の水田が連続的に活用されず、休耕期があり、その間にヨシが繁茂した結果による場合、他の一つは、水田は連続的に活用されたが、水田雑草としてヨシが繁茂した場合である。両要因のいずれによる結果であるかは即断できないが、他遺跡でも同様な現象がみられることを考えると後者の可能性が大きいのではなからうか。
3. 最後に、本遺跡をはじめ前橋台地上で発見される弥生・古墳両時代の水田（いわゆるミニ水田）形式について触れておきたい。

最近、あいついで発掘された古代水田址を大きく類別すると、福岡：板付（G7 a区）遺跡に代表される大型水路をとまなう方形大型水田と三重：北堀池遺跡にみられる不定形中型水田および本遺跡を含む前橋台地の数遺跡で検出された方形小型水田といっても100m前後であり、現在の水田からみれば極めて小さいものである。しかし、ここでいう小型水田は3～4m²を一区画とする長方形で整然とマトリクス状に配列されている。しかも、不定形中型水田が等高線を配慮して区画されているのに対し、これら小型水田の区画配列形式は等高線だけで説明することが困難である。この点について所有制など社会的見知から検討されるべき側面を残しつつ、栽培管理的立場から若干の検討を加えておきたい。前橋台地には火山灰の互層が堆積している。火山灰土には透水性が高く湛水する必要のあるいわゆる水田には不適な立地である。こうした立地条件のもとで水田を造成し、維持するためには水田土層に不透水層を造ることが必要である。人為的な不透水層造成作業として代掻き作業がある。この作業は水田にまず多量の水を導き満水した後、泥土を攪拌することにより粘土の薄層を造る（この層は代掻き層と呼ばれ透水性が低い）ことにより水持ちをよくする目的で行われる。

このように、代掻き作業を行うためにはどうしても水をためる必要がある。しかし、火山灰土は水持ちが悪く、代掻き以前に大面積を湛水するためには多量の水が必要になる。もともと用水の少ない火山灰台地で大量の代掻き用水を求めることは不可能であろう。この点を解決する方途として小区画水田技術が考え出されたのではなからうか。すなわち、小区画水田であれば一枚の水田に要する代掻き用水は小量で済み、代掻き後ただちに隣の水田へ水を廻し次ぎの代掻き作業を行う。このようにし

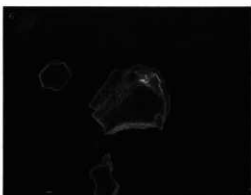
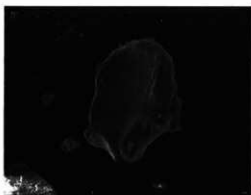
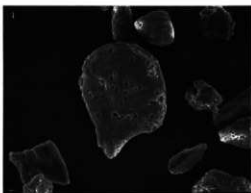
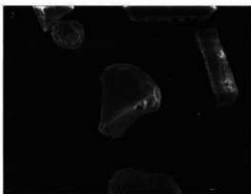
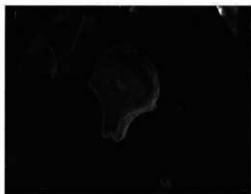


第72図 プラントオパール分析図

て、順番に水を廻せば少量の水でも全体の水田に代掻き作業を施すことが可能になる。

しかし、それにしても、このような立地の水田は平野部の水田に比べ水の消費が大きく常時湛水することはおそらく難しかったであろう。その意味では、常時湛水を原則とする通常水田とは異なり、かなり*畑作的要素の多い水田。だったものと思われる。

(昭和54年3月31日)



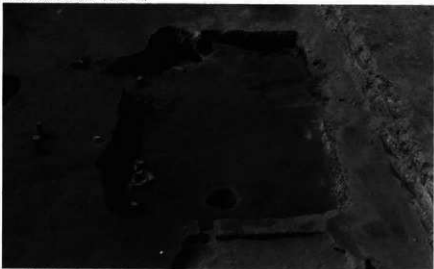
写真説明 (走査型電子顕微鏡×1000)

- | | | | |
|----|---|----------------------|--------------------------------|
| 1. | } | イネ機動細胞プラント・オパール (X層) | 3. ススキ機動細胞プラント・オパール (X層) |
| 2. | | | |
| 4. | } | ヨシ機動細胞プラント・オパール (X層) | 6. タケ (メダケ) 機動細胞プラント・オパール (X層) |
| 5. | | | |

写 真 图 版



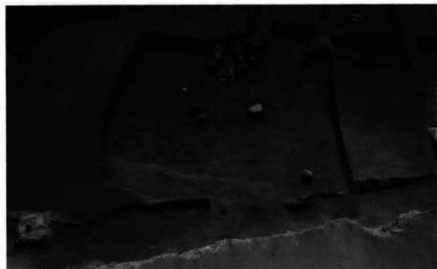
233号住居址全景（北より）



234号住居址全景（北より）



234号住居址遺物出土状態（東より）



235号住居址全景（西より）



235号住居址カマド（西より）



237号住居址全景（西より）



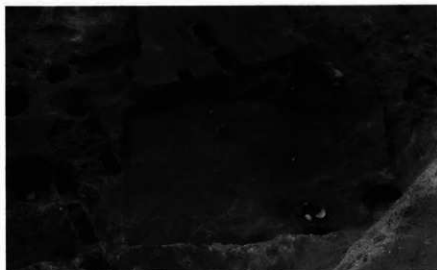
237号住居址カマド遺物出土状態（北より）



238号住居址全景（西より）



238号住居址遺物出土状態（東より）



239号住居址全景（西より）



239号住居址カマド（西より）



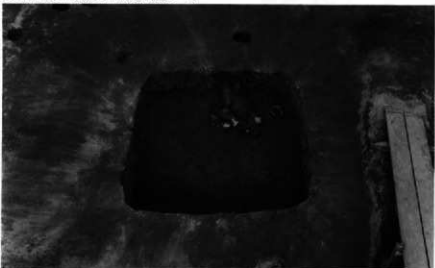
240号住居址全景（西より）



241号・246号住居址全景（西より）



241号住居址遺物出土状態（南より）



242号住居址全景（西より）



242号住居址遺物出土状態（西より）



246号・243号・245号住居址全景（西より）



243号・246号・245号住居址全景（南より）



243号住居址遺物出土状態（西より）



243号住居址カマド（西より）



245号住居址全景（西より）



246号住居址遺物出土状態（西より）



246号住居址遺物出土状態（西より）



244号住居址全景（西より）

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第100集

熊野堂遺跡(2) まとめ編 —上越新幹線関係埋蔵文化財
発掘調査報告 第14集—

平成3年3月8日印刷

平成3年3月15日発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

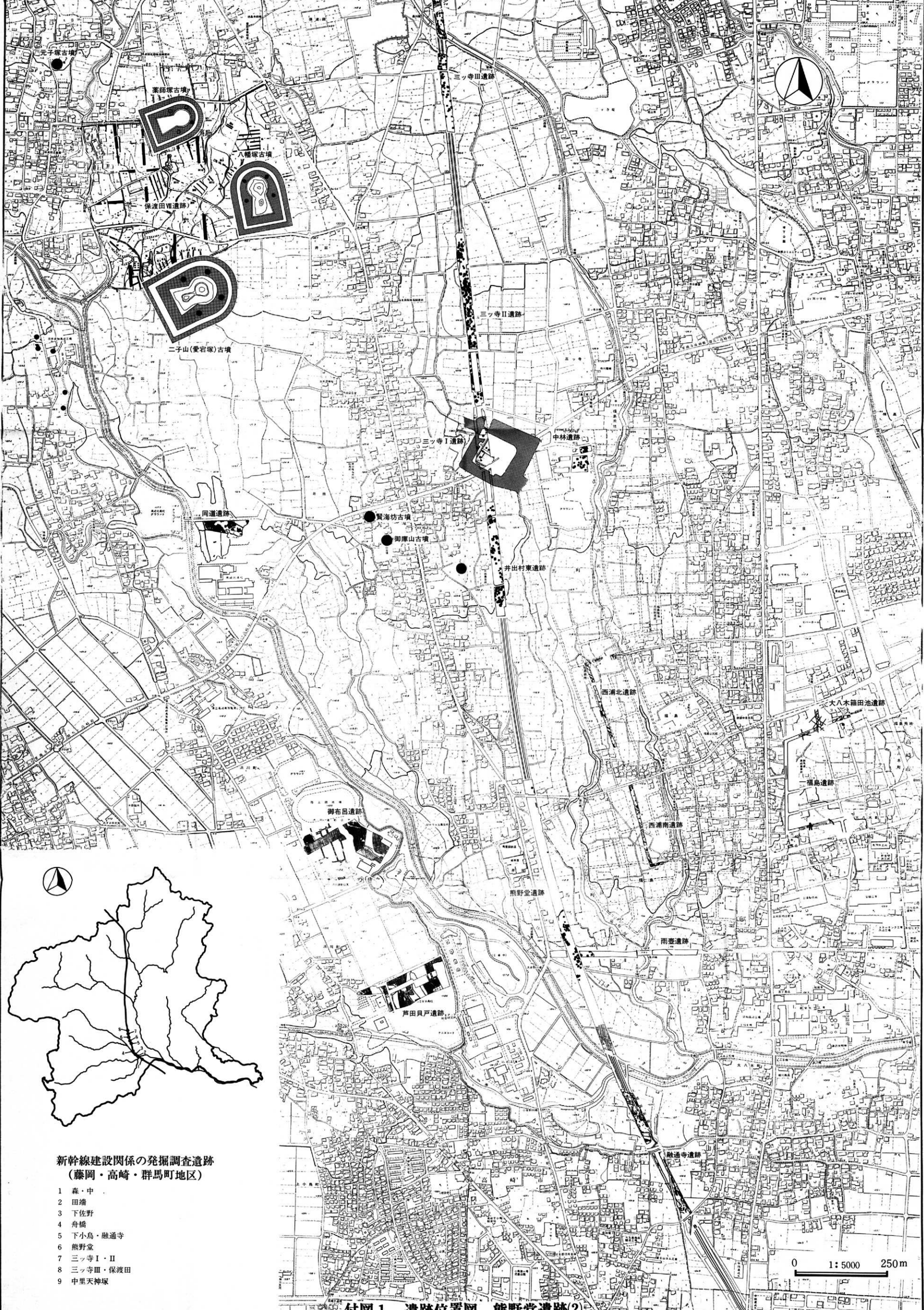
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

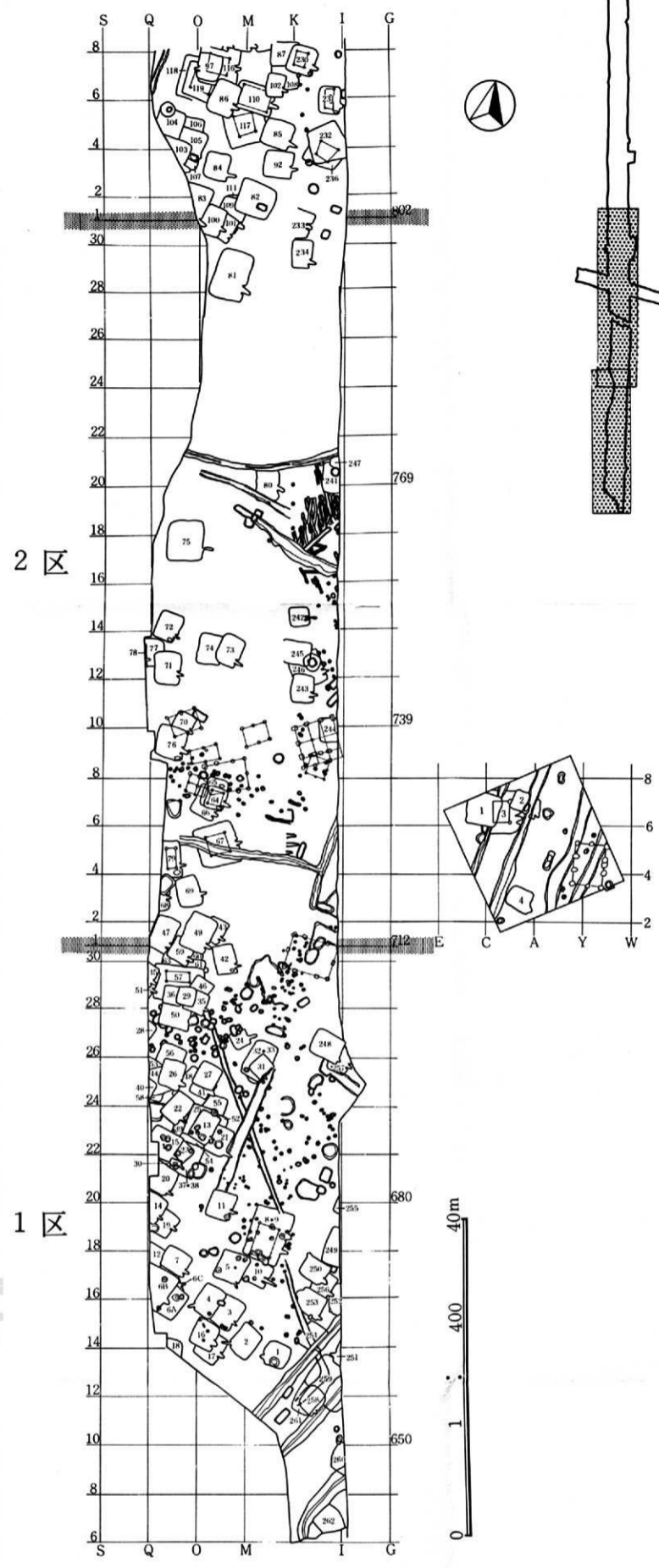
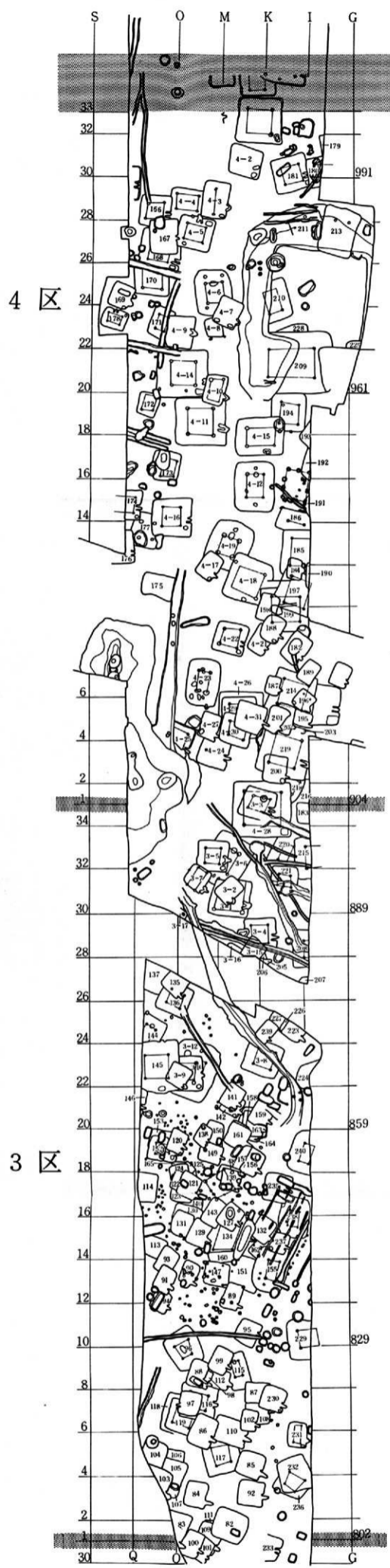


新幹線建設関係の発掘調査遺跡
(藤岡・高崎・群馬町地区)

- 1 森・中
- 2 田端
- 3 下佐野
- 4 舟橋
- 5 下小島・融通寺
- 6 熊野堂
- 7 ミッ寺Ⅰ・Ⅱ
- 8 ミッ寺Ⅲ・保渡田
- 9 中里天神塚

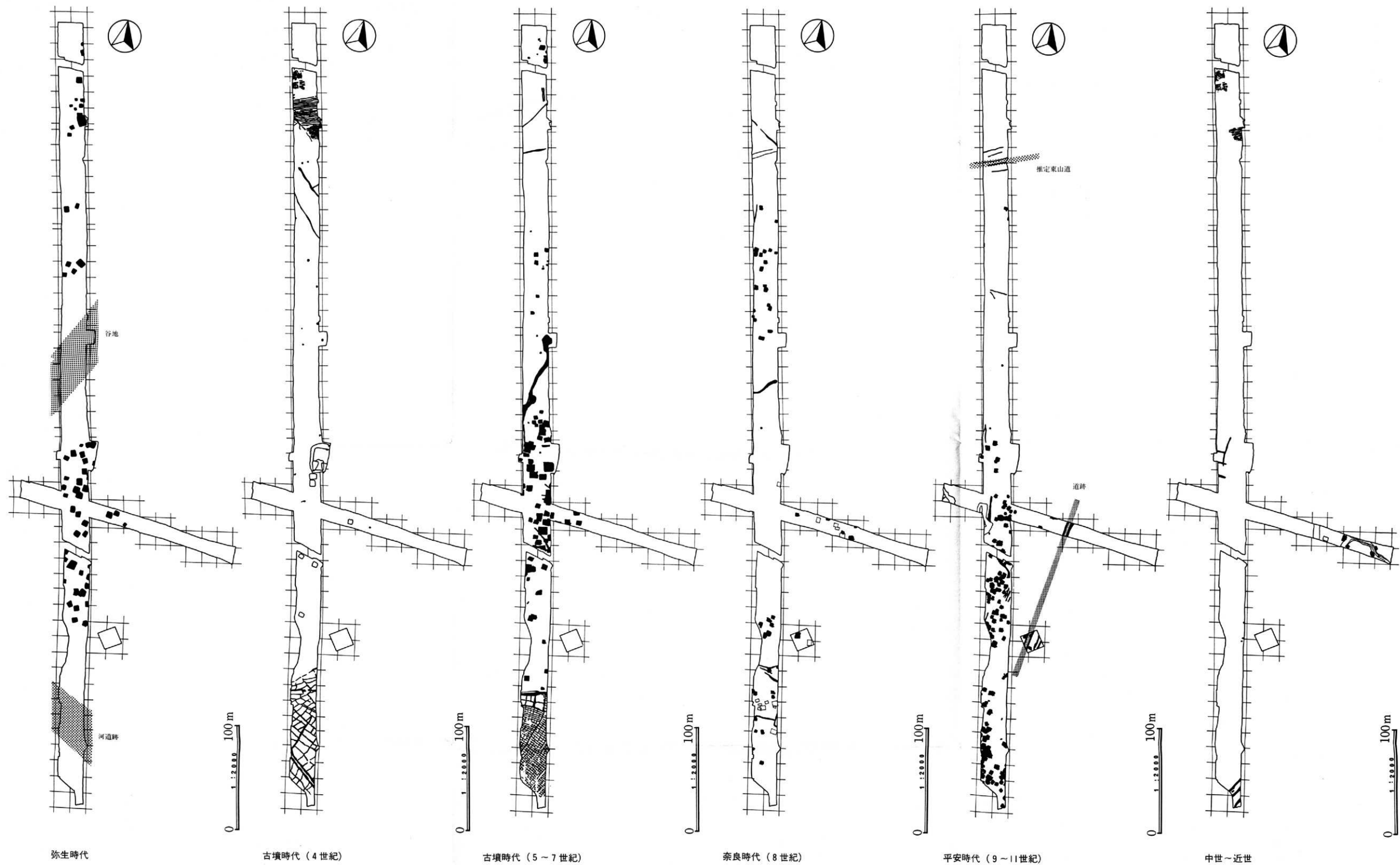
付図1 遺跡位置図 熊野堂遺跡(2)

0 1:5000 250m

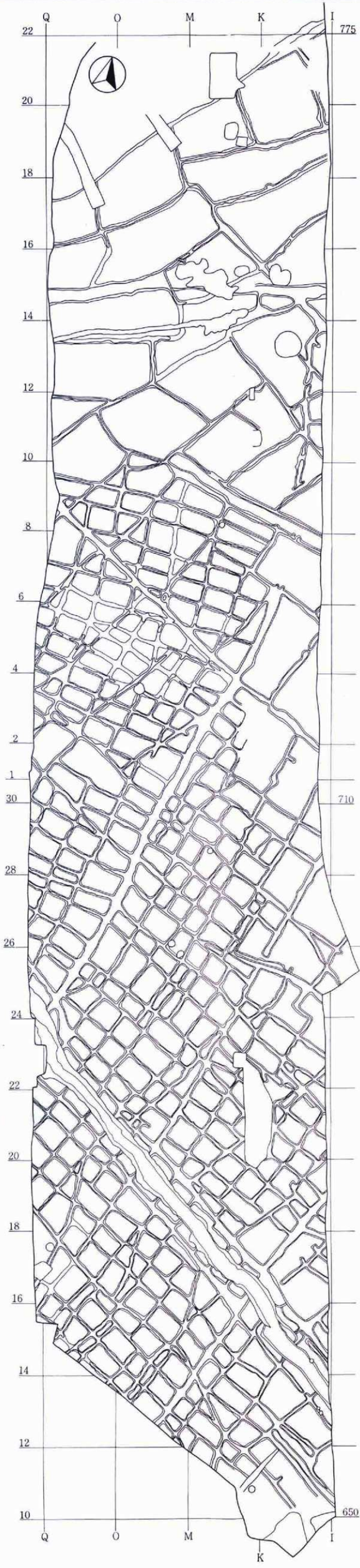


- 遺構数
- 1 住居 302軒 (弥生時代43, 古墳時代62, 古代197)
 - 2 堀立柱建物 11棟
 - 3 井戸 3基
 - 4 土坑 186基
 - 5 溝 43条
 - 6 竪穴状溝槽 7基
 - 7 方形周溝墓 1基
 - 8 水田 2面
 - 9 畝 2箇所

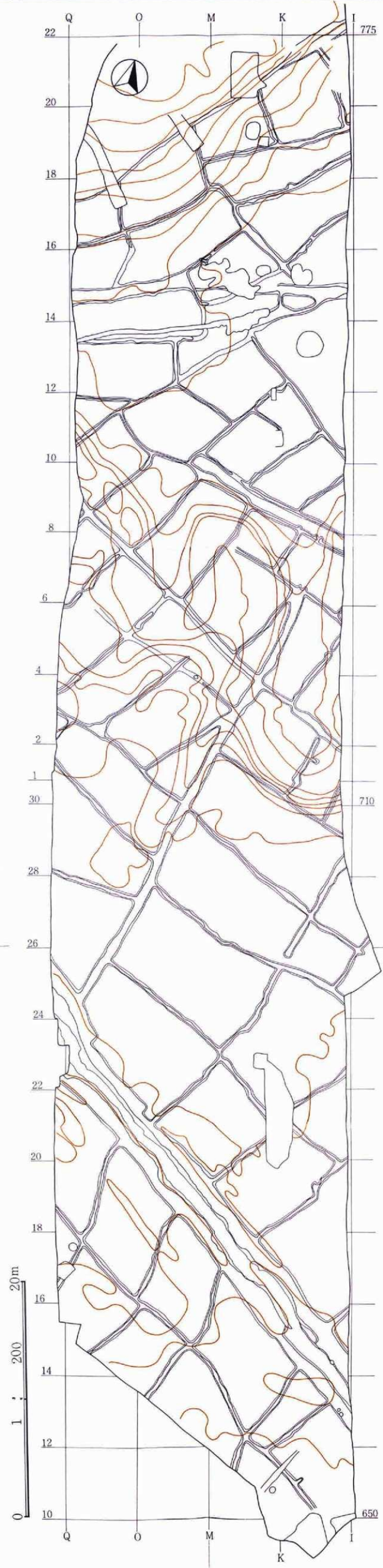
付図2 熊野堂遺跡第II地区全体図



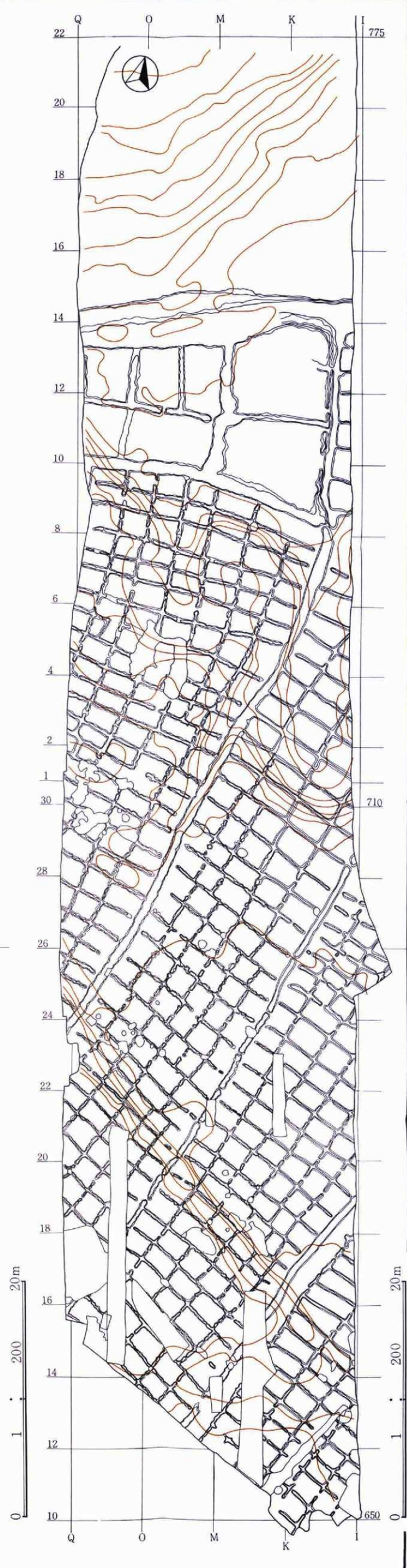
付図3 熊野堂遺跡時代別全体図



1 浅間C軽石下水田 (既報告のもの)



2 浅間C軽石下水田



3 ニッ岳FA水田

付図4 熊野堂遺跡水田全体図